

松江市文化財調査報告書 第79集



文化財愛護  
シンボルマーク

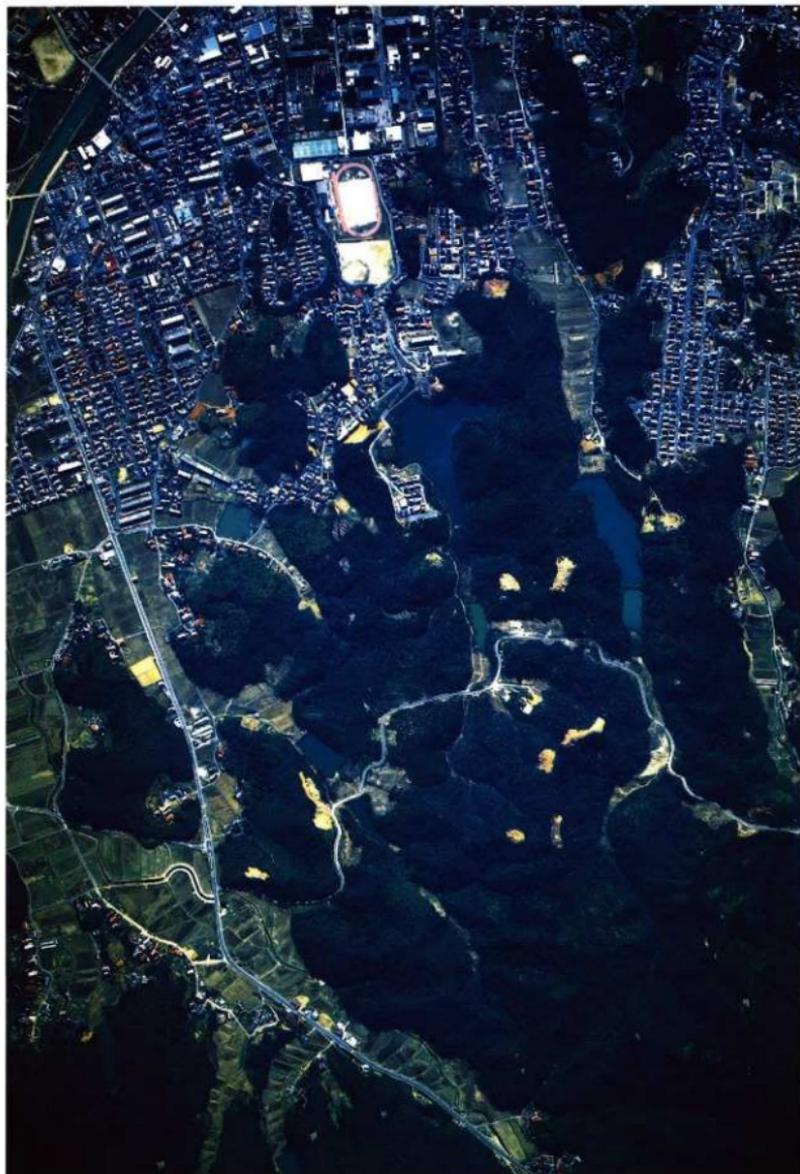
ソフトビジネスパーク建設に伴う  
**大佐遺跡群発掘調査報告書**

1999年3月

松江市教育委員会  
財団法人松江市教育文化振興事業団



大佐遺跡・藤ヶ谷遺跡 調査前全景



大佐遺跡・藤ヶ谷遺跡 調査後



大佐遺跡 調査後全景（写真右が北）



大佐遺跡 粘土床・木棺痕跡断面 (SK-02)



大佐遺跡 赤色顔料 (SK-02・上が東側)



大佐遺跡 漆塗製品出土状況 (SK-01)



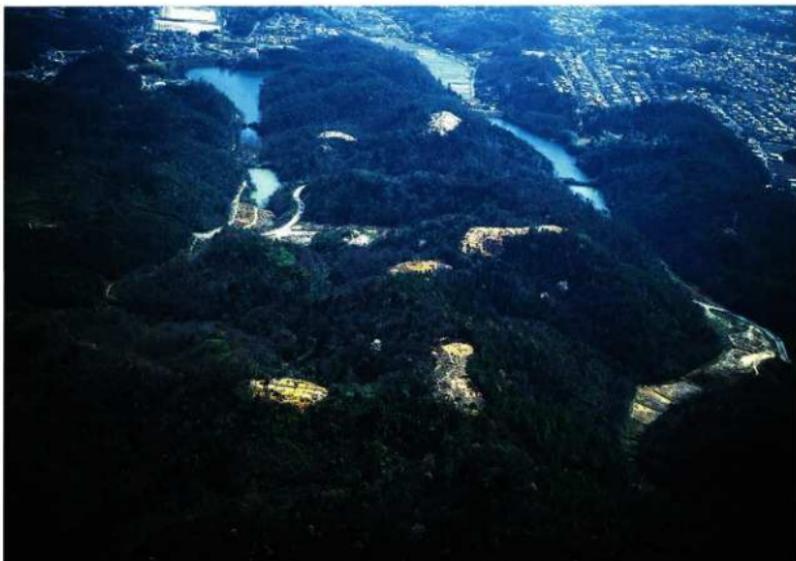
大佐遺跡出土 漆塗製品



藤ヶ谷遺跡 A～D地点全景（左上からA地点、B地点）



藤ヶ谷遺跡 E・F地点全景（左・E地点、右・F地点）



天狗山から見た藤ヶ谷城砦群（手前からA地点、B地点）



藤ヶ谷城砦群の東側から白鹿城・真山城を望む

# 例 言

1. 本書は平成9年度に実施したソフトビジネスパーク造成工事にかかる大佐遺跡・藤ヶ谷遺跡の発掘調査報告書である。
2. 本発掘調査は島根県開発公社から松江市教育委員会が依頼を受け、財団法人松江市教育文化振興事業団が実施したものである。
3. 調査の組織は下記のとおりである

(平成9年度)

依頼者	島根県土地開発公社	理 事 長	橋 本 正 行 (H.9.5.31まで)
		同	鈴 木 義 治 (H.9.6.1から)
主体者	松江市教育委員会事務局	教 育 長	原 敏
		生涯学習課長	谷 正 次
		文化財室長	岡 崎 雄二郎
		文化財係長	中 尾 秀 信
実施者	財団法人松江市教育文化振興事業団	埋蔵文化財課	
		理 事 長	大 塚 雄 史
		事 務 局 長	板 垣 信 治
		調 査 係 長	瀬 古 諒 子
調査者		調 査 員	石 川 崇
		〃	古 藤 博 昭
		〃	江 川 幸 子
		〃	昌 子 寛 光
		嘱 託 員	青 山 悦 朗
			門 脇 千 穂
			藤 原 堅
			松 下 剛

(平成10年度)

依頼者	島根県土地開発公社	理 事 長	鈴 木 義 治
主体者	松江市教育委員会事務局	教 育 長	原 敏
		生涯学習課長	谷 正 次
		文化財室長	岡 崎 雄二郎
		文化財係長	吉 岡 弘 行
実施者	財団法人松江市教育文化振興事業団	埋蔵文化財課	
		理 事 長	宮 岡 寿 雄

作成者	事務局長	柳 浦 孝 行
	調査係長	瀬 占 諒 子
	調査員	江 川 幸 子
	調査員	占 藤 博 昭
	調査員	石 川 崇
	嘱託員	藤 原 堅
	嘱託員	青 山 悦 朗

4. 調査の実施については次の方々の指導と協力を頂いた。記して感謝の意を表したい。

(敬称略、順不同)

渡辺 貞幸 (松江市文化財審議員考古学担当)	山根 正明 (鳥根県立松江南高校)
佐藤 昌憲 (奈良国立文化財研究所)	肥塚 隆保 (奈良国立文化財研究所)
柴田喜太郎 (考古地質学研究所)	国友 昌三 (国友鉄砲の里資料館)
肥後 弘幸 (京都府教育庁指導部文化財保護課)	鮫島 安豊 (種子島開発総合センター)
沖田総一郎 (種子島開発総合センター)	後藤 和民 (創価大学教授)
森岡 秀人 (芦屋市教育委員会)	戸井 晴夫 (八王子市教育委員会)
南 洋一郎 (福井県立・乗谷朝倉氏遺跡資料館)	中川 寧 (鳥根県埋蔵文化財センター)
内田 律雄 (鳥根県埋蔵文化財センター)	板垣 旭 (三刀屋町教育委員会)
池峯 龍彦 (堺市立埋蔵文化財センター)	

5. 下記の先生方に調査並びに分析をお願いしそれに関する原稿をお願いし、付編として掲載した。

山根 正明氏	—— 藤ヶ谷遺跡内の城跡の縄張り調査
佐藤 昌憲氏	—— 大佐遺跡出土の漆について
柴田喜太郎氏	—— 大佐遺跡出土の赤色顔料について

6. 本書の作成は以下の者が携わった。

(実測) 江川、古藤、石川	(浄書) 江川、古藤、石川、青山、藤原、門脇
(遺構撮影) 江川、古藤、石川、昌子	(遺物撮影) 江川、古藤、石川

7. 出土遺物は松江市教育委員会生涯学習課文化財室で保管している。

8. 本書の編集は古藤・江川と協議のうえ、石川が行った。

# 目 次

## I 調査に至る経緯

## II 遺跡の位置と環境 ..... 2 ..... (石川)

## III 調査の概要

### 1. 大佐遺跡 ..... 9 ..... (古藤)

- (1) 遺跡の概要
- (2) 丘陵頂上部の遺構
- (3) 丘陵西側緩斜面の遺構
- (4) 丘陵西側平坦面の遺構
- (5) 丘陵東側の遺構
- (6) 遺物について
- (7) 赤色顔料について
- (8) 小結

### 2. 藤ヶ谷遺跡 (城跡関連遺跡)

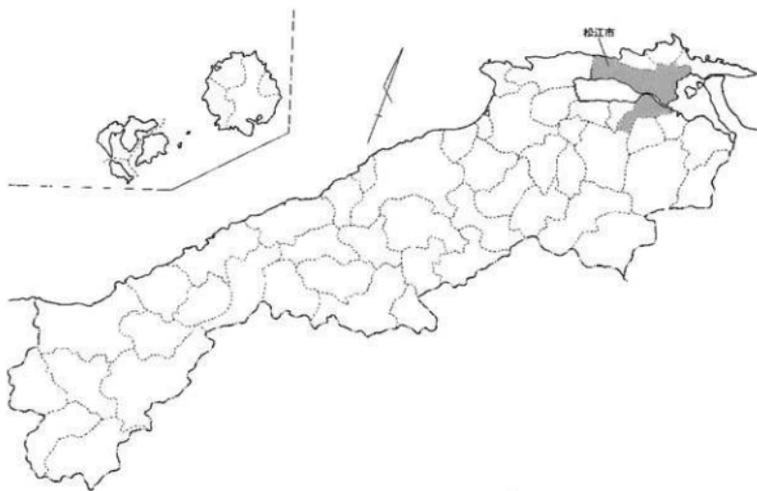
- (1) 調査の概要 ..... 28 ..... (石川)
- (2) A地点 ..... 29 ..... (石川)
- (3) B地点 ..... 32 ..... (石川)
- (4) C地点 ..... 36 ..... (石川)
- (5) D地点 ..... 43 ..... (石川)
- (6) E地点 ..... 53 ..... (江川)
- (7) F地点 ..... 56 ..... (江川)

### 3. 考 察 ..... 66 ..... (古藤・石川)

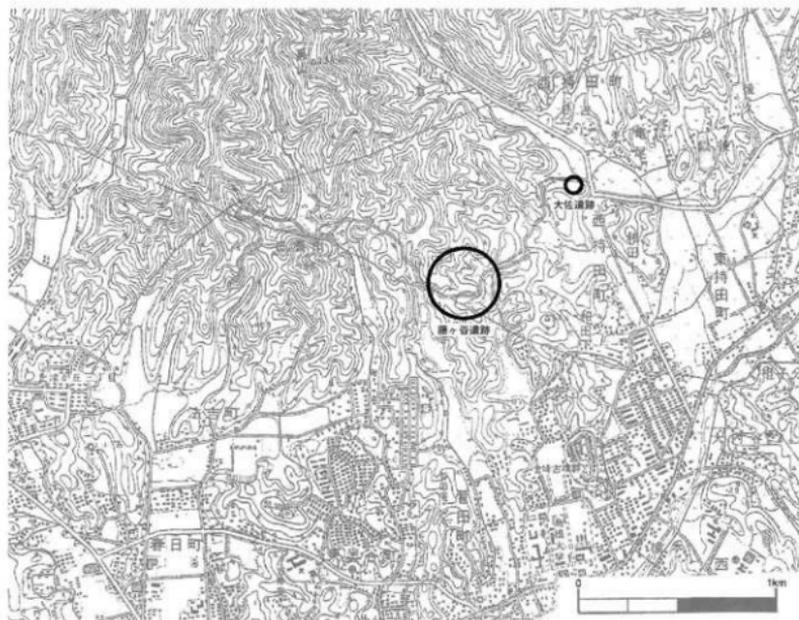
## IV 付 編

1. 大佐遺跡出土の漆について ..... 81 ..... 奈良国立文化財研究所 佐藤 昌憲
2. 大佐遺跡出土の赤色顔料の検討 ..... 82 ..... 考古地質学研究所 柴田喜太郎
3. 藤ヶ谷遺跡と周辺の山城遺構について ..... 86 ..... 島根県立松江南高校 山根 正明

## V 図 版



第1図 島根県地図



第2図 大佐遺跡・藤ヶ谷遺跡位置図

# 挿 図 目 次

- 第1図 高根県位置図
- 第2図 大佐遺跡・藤ヶ谷遺跡位置図
- 第3図 ソフトビジネスパーク整備事業計画平面図
- 第4図 周辺の遺跡分布図
- 第5図 大佐遺跡調査前地形測量図
- 第6図 大佐遺跡調査成果図
- 第7図 大佐遺跡土層堆積状況
- 第8図 大佐遺跡丘陵頂上部SK-01実測図
- 第9図 大佐遺跡丘陵頂上部SK-02実測図
- 第10図 大佐遺跡丘陵頂上部SK-03実測図
- 第11図 大佐遺跡丘陵頂上部SK-04実測図
- 第12図 大佐遺跡丘陵頂上部土器棺Ⅰ実測図
- 第13図 大佐遺跡丘陵頂上部土器棺Ⅱ実測図
- 第14図 大佐遺跡丘陵西側石蓋上墳墓（SK-08）実測図
- 第15図 大佐遺跡丘陵西側SK-05実測図
- 第16図 大佐遺跡丘陵西側SK-06・07実測図
- 第17図 大佐遺跡丘陵西側SD-01実測図
- 第18図 大佐遺跡丘陵東側SD-02実測図
- 第19図 大佐遺跡丘陵東側石棺墓（SD-09）実測図
- 第20図 大佐遺跡土器棺Ⅰ実測図
- 第21図 大佐遺跡土器棺Ⅱ（1号土器）実測図
- 第22図 大佐遺跡土器棺Ⅱ（2号土器）実測図
- 第23図 大佐遺跡SK-01出土の漆塗製品実測図
- 第24図 藤ヶ谷遺跡調査地点配置図
- 第25図 藤ヶ谷遺跡A地点調査前地形測量図及び調査区設定図
- 第26図 藤ヶ谷遺跡A地点平坦面位置図
- 第27図 藤ヶ谷遺跡A地点セクション図
- 第28図 藤ヶ谷遺跡B地点調査前地形測量図及び調査区設定図
- 第29図 藤ヶ谷遺跡B地点遺構配置図
- 第30図 藤ヶ谷遺跡B地点セクション図
- 第31図 藤ヶ谷遺跡B地点SX-01実測図
- 第32図 藤ヶ谷遺跡B地点出土遺物実測図

- 第33図 藤ヶ谷遺跡C地点調査前地形測量図及び調査区設定図
- 第34図 藤ヶ谷遺跡C地点遺構配置図
- 第35図 藤ヶ谷遺跡C地点セクション図
- 第36図 藤ヶ谷遺跡C地点SK-01実測図
- 第37図 藤ヶ谷遺跡C地点SK-02実測図
- 第38図 藤ヶ谷遺跡C地点SK-03実測図
- 第39図 藤ヶ谷遺跡C地点土橋土層断面図
- 第40図 藤ヶ谷遺跡C地点出土遺物実測図
- 第41図 藤ヶ谷遺跡D地点調査前地形測量図及び調査区設定図
- 第42図 藤ヶ谷遺跡D地点北側斜面遺構配置図
- 第43図 藤ヶ谷遺跡D地点北側斜面セクション
- 第44図 藤ヶ谷遺跡D地点北側斜面溝状遺構実測図 (1)
- 第45図 藤ヶ谷遺跡D地点北側斜面溝状遺構実測図 (2)
- 第46図 藤ヶ谷遺跡D地点北側斜面溝状遺構実測図 (3)
- 第47図 藤ヶ谷遺跡D地点北側溝状遺構 (SF-01-09) 実測図
- 第48図 藤ヶ谷遺跡D地点南側斜面遺構配置図
- 第49図 藤ヶ谷遺跡D地点南側斜面セクション図
- 第50図 藤ヶ谷遺跡D地点南側斜面出土遺物実測図
- 第51図 藤ヶ谷遺跡E地点調査成果図
- 第52図 藤ヶ谷遺跡E地点セクション図
- 第53図 藤ヶ谷遺跡F地点調査前地形測量図
- 第54図 藤ヶ谷遺跡F地点調査成果図
- 第55図 藤ヶ谷遺跡F地点セクション図
- 第56図 藤ヶ谷遺跡F地点A-A' ラインのA' 側セクション図
- 第57図 藤ヶ谷遺跡F地点堀切状遺構平面図
- 第58図 藤ヶ谷遺跡F地点堀切状遺構セクション図
- 第59図 藤ヶ谷遺跡F地点出土の鉄砲弾
- 第59図 山城の主な名称
- 第60図 藤ヶ谷遺跡周辺の主な城跡
- 第61図 満願寺城略測図
- 第62図 茶臼山城略測図
- 第63図 毛利家・尼子家・松田家相関図
- 第64図 藤ヶ谷遺跡F地点堀切状遺構の変遷模式図
- 第65図 黒色物質の顕微FT-IRスペクトル
- 第66図 大佐遺跡SK-02粘土床に混入する顔料

- 第67図 白鹿城略測図
- 第68図 真山城略測図
- 第69図 和久羅城略測図
- 第70図 天狗山城略測図
- 第71図 深町城略測図

# 図 版 目 次

- 図版 1 大佐遺跡丘陵頂上部出土 土器棺Ⅰ (SX-01) 出土状況  
大佐遺跡丘陵頂上部 SX-01完掘状況
- 図版 2 大佐遺跡丘陵頂上部出土 土器棺Ⅱ (SX-02) 出土状況
- 図版 3 大佐遺跡丘陵頂上部 SX-02埋設状況  
大佐遺跡丘陵頂上部 SX-02門縁部出土状況
- 図版 4 大佐遺跡丘陵頂上部 SK-01完掘状況  
大佐遺跡丘陵頂上部 SK-02完掘状況
- 図版 5 大佐遺跡丘陵頂上部 SK-03完掘状況  
大佐遺跡丘陵頂上部 SK-04完掘状況
- 図版 6 大佐遺跡丘陵西側 石蓋土墳墓 (SK-08) 検出状況  
大佐遺跡丘陵西側 SK-08完掘状況
- 図版 7 大佐遺跡丘陵西側 SK-08 石蓋 (一部)  
大佐遺跡丘陵西側 SK-08土墳内出土の石
- 図版 8 大佐遺跡丘陵東側 石棺墓 (SK-09) 検出状況  
大佐遺跡丘陵東側 SK-09石蓋除去後
- 図版 9 大佐遺跡丘陵西側 SK-05完掘状況
- 図版10 大佐遺跡丘陵西側 SD-01完掘状況
- 図版11 大佐遺跡丘陵東側斜面 SD-02完掘状況
- 図版12 大佐遺跡出土 土器棺Ⅰ  
大佐遺跡出土 土器棺Ⅱ
- 図版13 藤ヶ谷遺跡B地点 調査前  
藤ヶ谷遺跡B地点 SX-01完掘状況
- 図版14 藤ヶ谷遺跡C地点 調査前  
藤ヶ谷遺跡C地点 上層土層堆積状況
- 図版15 藤ヶ谷遺跡C地点 SK-01上層堆積状況  
藤ヶ谷遺跡C地点 SK-01完掘状況
- 図版16 藤ヶ谷遺跡C地点 SK-02土層堆積状況  
藤ヶ谷遺跡C地点 SK-02完掘積状況
- 図版17 藤ヶ谷遺跡C地点 SK-03半掘状況  
藤ヶ谷遺跡C地点 SK-03完掘状況
- 図版18 藤ヶ谷遺跡D地点北側斜面 溝状遺構

- 図版19 藤ヶ谷遺跡D地点北側斜面 溝状遺構  
藤ヶ谷遺跡D地点南側斜面 完掘状況
- 図版20 藤ヶ谷遺跡E地点東側 虎口付近  
藤ヶ谷遺跡E地点西側 虎口付近
- 図版21 藤ヶ谷遺跡F地点 堀切状遺構完掘状況
- 図版22 藤ヶ谷遺跡F地点 完掘状況  
藤ヶ谷遺跡E・F地点完掘状況
- 図版23 藤ヶ谷遺跡出土遺物D地点
- 図版24 藤ヶ谷遺跡から北側を望む  
藤ヶ谷遺跡から東側を望む
- 図版25 藤ヶ谷遺跡から南側を望む  
藤ヶ谷遺跡から西側を望む

# I 調査に至る経緯

島根県は、平成5年度に策定した「島根県長期計画戦略プロジェクト」の一つとして、地域産業の高度化、創造的展開を支援するため、人材育成、研究開発等の産業支援サービスを提供する産業支援機関、企業の研究開発部門、産業支援サービス業等が集積する「産業支援の拠点（ソフトビジネスパーク）」の整備構想を掲げた。設置場所としては島根大学工科学系学部等との連携を図る必要があることから、島根大学の北側丘陵（松江市西持田町、西川津町、菅田町）の87haが選定され、平成6年度において埋蔵文化財分布調査依頼書が提出された。

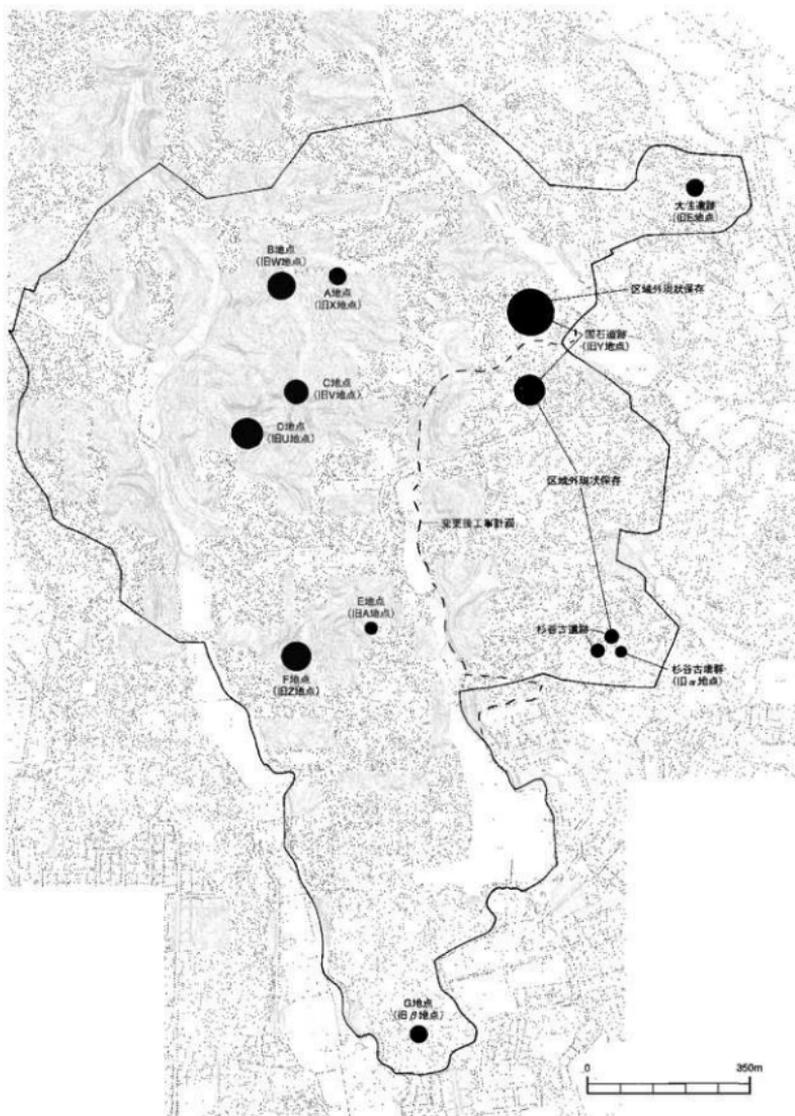
松江市教育委員会は平成7年度において分布調査を実施し、周知の遺跡2箇所（宮垣古墳群、白鹿谷遺跡）を含む26箇所まで遺跡及び遺跡推定地を確認し、このうち開発区域内にかかる古墳1箇所、古墳推定地2箇所、山城跡（砦跡）5箇所、集落推定地1箇所の合計9箇所については事前に調査が必要である旨を回答した。

平成8年度においては再度詳細な分布調査と試掘調査を実施し、古墳1箇所（A地点）、古墳群1箇所（B-1）、散布地2箇所（B-2、B-3）、集落跡1箇所（C地点）、城跡関連遺跡6箇所（D、E、F、G、H、I地点）、古墳推定地1箇所（J地点）の合計12箇所を要発掘調査地点として確定した。

発掘調査は平成9年度に島根県土地開発公社からの受託事業として、財団法人松江市教育文化振興事業団において実施した。また、平成9年度中において開発計画の変更があり、開発面積が75haとなった。これに伴い、B-1、B-2、B-3地点とC地点の一部が開発区域外となり、C地点の残る部分は区域内で緑地として現状保存がなされることが決定したため、最終的にA、D、E、F、G、H、I、J地点の合計8箇所を対象として発掘調査を実施した。調査期間は平成9年4月17日～平成10年2月27日までの合計285日を要して実施した。

また調査終了後、遺跡名が以下の通り変更された。

- 大佐遺跡群A地点 → 大佐遺跡（墳墓）
- 〃 B-1地点 → 杉谷古墳群（古墳2場）
- 〃 B-2地点 → 杉谷遺跡（散布地）
- 〃 B-3地点 → 〃（〃）
- 〃 C地点 → 岡石遺跡（集落跡推定地）
- 〃 D地点 → 藤ヶ谷遺跡A地点（城跡推定地）
- 〃 E地点 → 藤ヶ谷遺跡B地点（城跡推定地）
- 〃 F地点 → 藤ヶ谷遺跡C地点（城跡推定地）
- 〃 G地点 → 藤ヶ谷遺跡D地点（城跡推定地）
- 〃 H地点 → 藤ヶ谷遺跡E地点（城跡推定地）
- 〃 I地点 → 藤ヶ谷遺跡F地点（城跡推定地）



第3図 ソフトビジネスパーク整備事業計画平面図

## II 遺跡の位置と環境

大佐遺跡・藤ヶ谷遺跡は松江市街地の北側に位置し、大佐遺跡①は国道431号線から鹿島町・烏根町に向かう県道松江島根線沿いにある墳墓であり、藤ヶ谷遺跡②は島根大学に北側に広がる尾根筋の頂上平地に点在する城跡関連遺跡である。

大佐遺跡・藤ヶ谷遺跡の周辺から現在のところII石器時代から弥生時代にかけて明確な遺構をもつ遺跡は確認されていないが、遺物が出土する遺跡は多い。まず大佐遺跡の少し離れた東側の朝酌川流域には西川津遺跡③・タテチョウ遺跡④・原の前遺跡⑤がある。これらの遺跡から土器や石器などの遺物が数多く出土している。藤ヶ谷遺跡の南側の島大橋内遺跡⑥からは縄文時代前期の丸木船も出土している。この丸木船は全長約6m、最大幅57cm、材質は杉を使っている。これは外洋向きではなく、「内湾性漁労」に使用されたものと推測される。<sup>⑩</sup>

このような朝酌川流域の調査から、縄文時代は周辺まで宍道湖の湖岸線が伸びて、弥生時代になると宍道湖の汀線が後退していたことが確認されている。そのため弥生時代にはこの周辺一帯が湿地帯であり、水田農耕に適していたと想像される<sup>⑪</sup>。タテチョウ遺跡などからは水田農耕に使用したと思われる木製の農耕具や石器が土器と共に出土している<sup>⑫</sup>。このようなことから朝酌川流域の周辺には大きな集落があった可能性が考えられる。

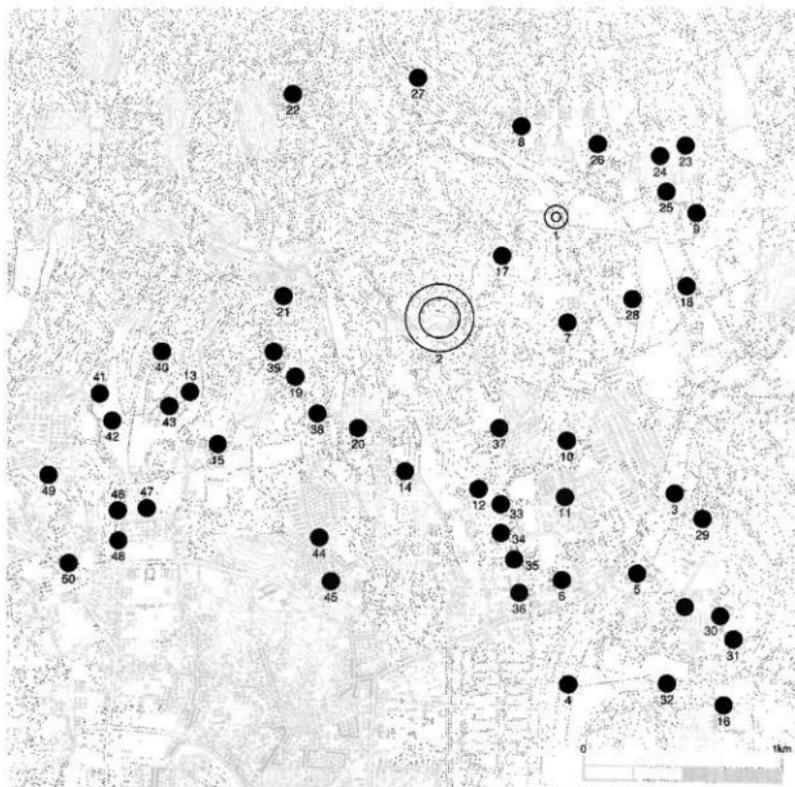
古墳時代になると、大佐遺跡・藤ヶ谷遺跡の周辺にも多くの遺跡が見られる。大佐遺跡の周辺には宮垣古墳群⑦・畑の内古墳⑧・小丸山古墳群⑨などがある。なかでも畑の内古墳は横穴式石室の中に組合式家形石棺を有し<sup>⑬</sup>、小丸山古墳群は4基の方墳が存在し、箱式石棺墓や礎床を有する箱式木棺墓などが検出されている<sup>⑭</sup>。

藤ヶ谷遺跡の南側には福山古墳群⑩・金崎古墳群⑪・上浜弓古墳群⑫などがある。金崎古墳群は前方後方墳と前方後円墳が1基づつ、方墳9基からなる古墳群で、主体部は竪穴式石室や木棺直葬などさまざまな埋葬形態を持っている。なかでも1号墳は規模・主体部構造・副葬品などから周辺一帯の首長的存在の墓であったと推測される<sup>⑮</sup>。また上浜弓1号墳の主体部からは鉄製の直刀が2本出土している<sup>⑯</sup>。

少し離れて藤ヶ谷遺跡の西方には1辺16mの方墳の伝宇牟加比売命御陵古墳⑬がある。この古墳は『出雲風土記』に書かれている「法吉」の地名起源説話にちなんで名付けられたもので、円筒埴輪や刀子・鉄族などが出土している<sup>⑰</sup>。そのほかにも松ヶ峠古墳⑭や山嶺古墳⑮などが存在する。

集落などの生活遺跡はあまり確認されていないが、大佐遺跡の南東に堤廻遺跡⑯があり、住居址17軒、掘立柱建物2軒が検出され、大量の須恵器や土師器が出土した<sup>⑱</sup>。また大佐遺跡の南西側麓には国石遺跡⑰があり、試掘調査の結果、古墳時代中期頃の住居址と思われる遺構が検出されているが、現段階では詳細なことは不明で、本格的な調査が待たれる。

古墳時代以降になると大佐遺跡の東側には持田川流域糸里制遺跡⑱があり、藤ヶ谷遺跡の南側、上浜弓古墳群の周辺からは近世の土壌墓が検出され火葬骨と土師質土器が出土した。藤ヶ谷遺跡の西方にある白鹿山の麓にはコゴメダカ山遺跡⑲や二反田古墳⑳などがある。コゴメダカ山遺跡からは古銭



第4図 周辺の遺跡分布図

- |             |             |                |               |             |
|-------------|-------------|----------------|---------------|-------------|
| 1.大佐遺跡      | 2.藤ヶ谷遺跡     | 3.西川津遺跡        | 4.タテチョウ遺跡     | 5.原の前遺跡     |
| 6.鳥大構内遺跡    | 7.宮垣古墳群     | 8.垣の内古墳        | 9.小丸山古墳       | 10.福山古墳群    |
| 11.金崎古墳群    | 12.上浜弓古墳群   | 13.伝字牟加比売命御陵古墳 | 14.松ヶ峠古墳      |             |
| 15.山横古墳     | 16.堤廻遺跡     | 17.国石遺跡        | 18.持田川流域衆里制遺跡 |             |
| 19.コゴメダカ山遺跡 | 20.二反田古基    | 21.白鹿城         | 22.真山城        | 23.鍛冶屋谷横穴   |
| 24.穴の口横穴群   | 25.松の前古墳群   | 26.洞泉寺裏古墳      | 27.金比羅谷古墳     | 28.大源古墳     |
| 29.馬込古墳群    | 30.山崎古墳     | 31.柴田遺跡        | 32.橋本遺跡       | 33.浜弓1号墳    |
| 34.小丸山古墳    | 35.菅田丘古墳    | 36.薬師山古墳       | 37.深町古墳群      | 38.なつめ谷荒神古墳 |
| 39.長谷窯跡     | 40.田中谷遺跡    | 41.田中谷古墳       | 42.塚山古墳       | 43.新宮古墳     |
| 44.折廻古墳群    | 45.ひのさん山横穴群 | 46.唐梅古墳群       | 47.法吉遺跡       | 48.石在経塚     |
| 49.久米遺跡     | 50.比津ヶ崎横穴群  |                |               |             |

(宋銭・明銭)と長さ約44cmの脇差が一口が出土した<sup>(10)</sup>。二反田古墓からは室町時代後半から安上桃山期の石敷基壇や宝篋印塔が出土しており、この古墳は尼子・毛利の攻防戦の舞台となった白鹿城②や真山城②の麓あるいは出入口にあたるため、何らかの関連があると思われる<sup>(11)</sup>。

白鹿城(白髮城とも書く)は戦国時代、尼子氏の家臣松田氏の居城で「尼子十旗」の内で第一の城とされていた。真山城(新山城とも書く)は白鹿城攻略のために毛利軍が陣を構え、白鹿城落城後は毛利氏の出雲支配の拠点として使用された。尼子再興戦では再び尼子氏の手落ち、尼子氏出雲出国後は再度毛利氏の拠点となった<sup>(12)</sup>。藤ヶ谷遺跡はその真山城を北側に、白鹿城を東側に望み、その地理的な環境などからこれらの城跡と深い関係があると考えられる。

#### [引用文献]

- (1)『島根大学構内遺跡第1次調査(橋瀬手地区1)』島根大学埋蔵文化財調査研究センター  
1997年
- (2)『タテチョウ遺跡Ⅰ～Ⅳ』島根県教育委員会1979～1989年
- (3)『原の前遺跡』島根県教育委員会1995年
- (4)山本清「石棺について」『山陰文化研究紀要10号』1970年
- (5)『小丸山古墳』松江市教育委員会1986年
- (6)『金崎古墳群』松江市教育委員会1987年
- (7)『上浜弓1号墳他発掘調査』松江市教育委員会1993年
- (8)『伝宇牟加比命御陵古墳』松江市教育委員会1993年
- (9)『堤廻遺跡』松江市教育委員会
- (10)『二反田古墓』松江市教育委員会1987年
- (11) (10)と同じ
- (12)『日本城郭体系14 鳥取・島根・山口』新人物往来社1980年

## 大佐遺跡・藤ヶ谷遺跡の周辺遺跡一覧表

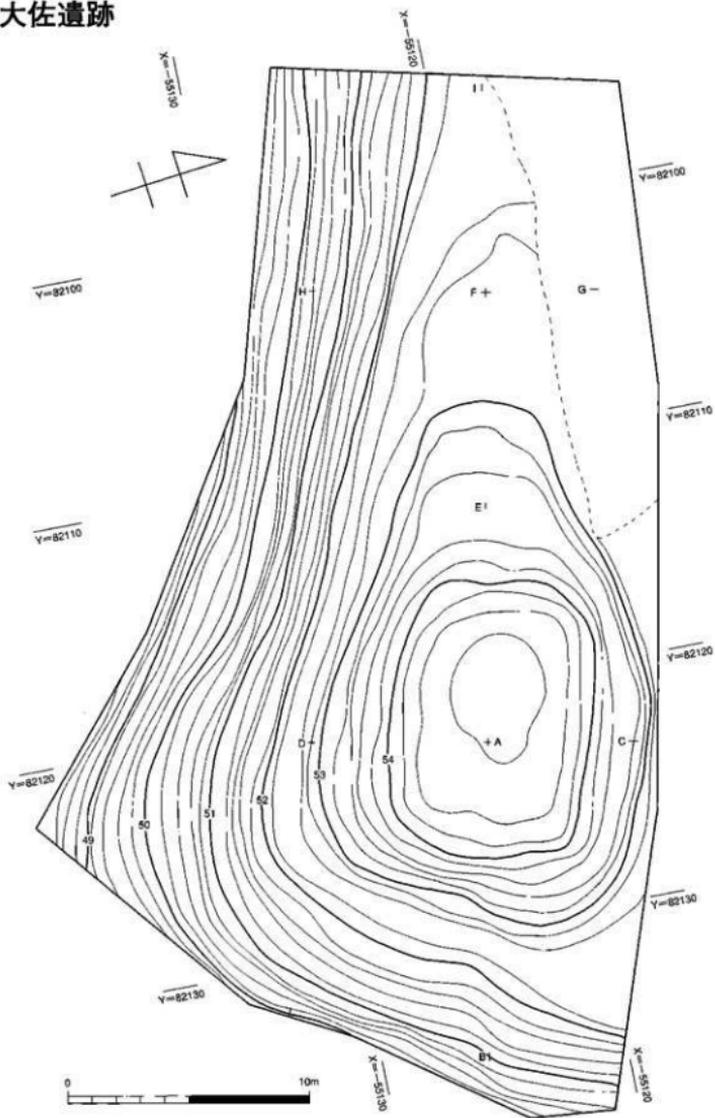
No.	名称	所在地	種別	概要
1	大佐遺跡	西持田町	墳丘墓	土壇、石蓋土壇墓、箱式石棺葬、弥生土器
2	藤ヶ谷遺跡	西川津町・菅田町	城跡推定地	土壇、堀切、須恵器、土師質土器、鉄砲彈
3	西川津遺跡	西川津町	散布地	縄文土器、弥生土器、木製品など
4	タテチョウ遺跡	〃	〃	縄文土器、弥生土器、木製品など
5	原の前遺跡	〃	〃	縄文土器、弥生土器、木製品など
6	島大橋内遺跡	〃	〃	縄文土器、弥生土器、木製品、丸木船など
7	宮垣古墳群	西持田町	古墳	方墳5基、円墳1基
8	垣の内古墳	〃	〃	横穴式石室、組合形石棺
9	小丸山古墳	〃	〃	方墳4基
10	福山古墳群	〃	〃	方墳3基
11	金崎古墳群	西川津町	〃	前方後円墳1基、前方後方墳1基、方墳9基など
12	上浜弓古墳群	菅田町	〃	方墳2基
13	比奈加此光命御陵古墳	法吉町	〃	方墳（一辺16m）、刀子、鉄鏃、円筒埴輪
14	松ヶ崎古墳	〃	〃	円墳（径36m）
15	山楨古墳	〃	〃	方墳5基
16	堤彌遺跡	西川津町	築落	住居址17件、掘立柱建物2軒、土師器、須恵器
17	国石遺跡	西持田町	散布地	焼土器、須恵器、土師器
18	持田川流域糸里制遺跡	西持田町	柔里制	〃
19	コゴメダカ山遺跡	法吉町	古墳	脇差、宋銭、明銭
20	二反田古墳	〃	〃	宝篋印塔、火葬墓
21	白鹿城	〃	城跡	曲輪、井戸
22	真山城	〃	〃	曲輪、石垣
23	鍛冶屋谷横穴群	東持田町	横穴	〃
24	穴の川横穴群	〃	〃	2穴
25	松の前古墳群	西持田町	古墳	方墳12基
26	洞泉寺裏古墳	〃	〃	方墳
27	金比羅谷古墳	〃	〃	異形石棺式
28	大源古墳	〃	〃	円墳
29	馬込山古墳群	西川津町	〃	方墳3基、円墳1基、古釜1基
30	山崎古墳	〃	〃	方墳
31	柴重遺跡	〃	散布地	竪穴住居3棟、掘立柱建物12棟、須恵器など
32	橋本遺跡	〃	散布地	土師器片
33	浜弓1号墳	菅田町	古墳	方墳（一辺8m）
34	小丸山古墳	〃	〃	方墳（一辺25m）
35	菅田丘古墳	〃	〃	前方後方墳、磯櫛、玉類
36	森師山古墳	〃	〃	鏡、鉄鏃、有孔円鋸、土師器、須恵器
37	深町古墳群	〃	〃	円墳2基?
38	なつめ谷荒神古墳	法吉町	古墳	方墳（一辺17m）
39	長谷竊跡	〃	竊跡	須恵器片
40	田中谷遺跡	〃	散布地	弥生土器、須恵器
41	田中谷古墳	〃	古墳	前方後方墳
42	塚山古墳	〃	〃	方墳、円筒埴輪
43	新宮古墳	〃	〃	円墳
44	折廻古墳群	〃	〃	円墳他5基、櫛5、須恵器他
45	ひのさん山横穴群	〃	横穴	30穴以上
46	唐梅古墳群	〃	古墳	方墳4基
47	法古遺跡	〃	散布地	縄文土器、弥生土器、土師器
48	石在経塚	〃	経塚	字・石経、土壇
49	久米遺跡	〃	散布地	須恵器、掘立柱建物
50	比津が崎横穴群	比津町	横穴	須恵器



### Ⅲ 調査の概要



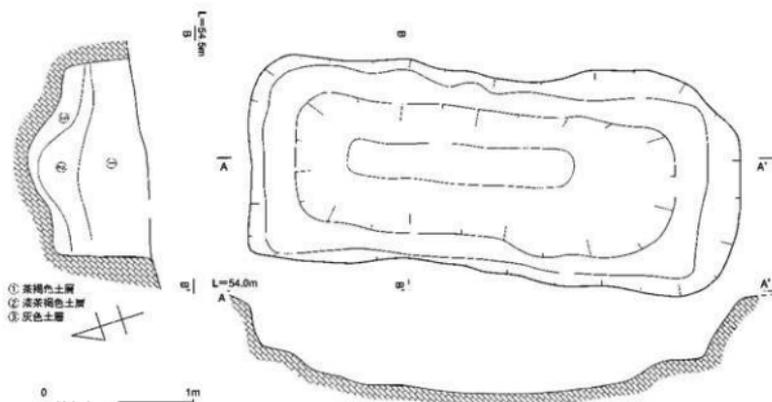
# 1. 大佐遺跡



第 5 図 大佐遺跡調査前地形測量図







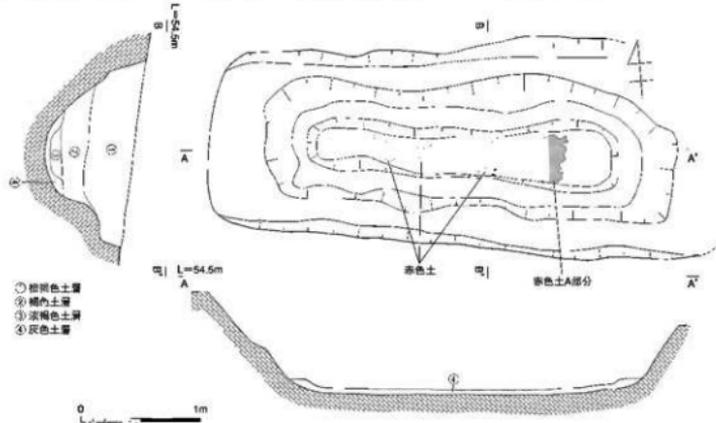
第8図 大佐遺跡丘陵頂上部SK-01実測図

木棺が使用されたと推測される。木棺痕跡の北側底面から黒色の漆塗製品（第23図、口絵4）が出土し<sup>(1)</sup>、ほかに遺物は出土しなかった。

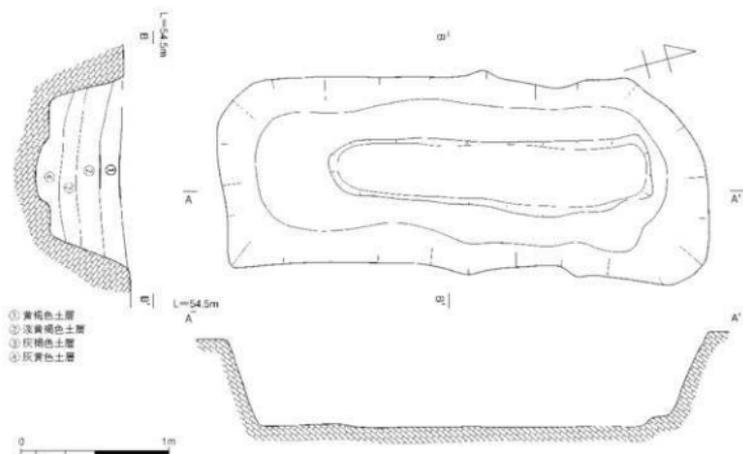
②SK-02（第9図、図版4）

丘陵頂上部南側から検出した埋葬施設である。

墓壇の上軸はN-83°-Wをとる。規模は遺構上面で長軸3.45m、短軸1.2m、深さは最大0.8mを測る。墓壇の掘り方は2段掘りになっており、壇内にテラス状平坦面が1段巡らされている。墓壇底面には棺を安定させるために粘土床がつくられ、その粘土が5～8cmの厚さで敷き詰められていた。粘土検出面では木棺痕跡を検出し、その規模は、長軸2.6m、短軸0.4m、深さは約7cmを測る。痕跡底面の断面形は舟底形を呈することから、棺には荊竹形木棺が使用されたと推測される。



第9図 大佐遺跡丘陵頂上部SK-02実測図



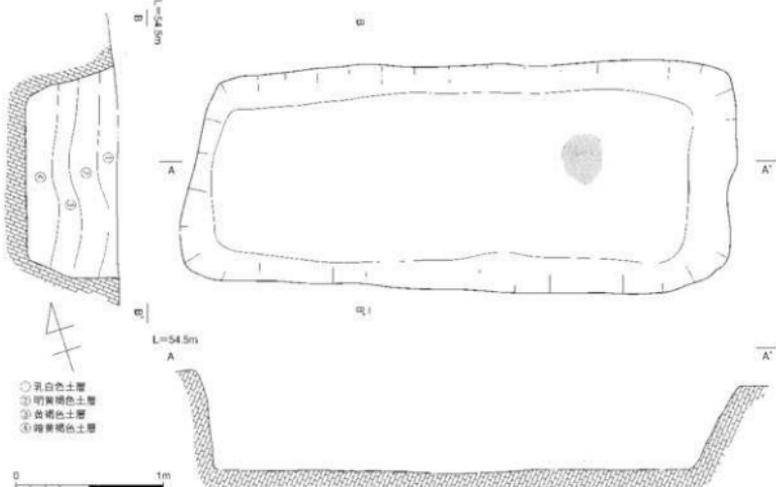
第10図 大佐遺跡丘陵頂上部SK-03実測図

木棺痕跡内の粘土床は部分的に赤色を帯びており、赤色顔料が使用された可能性があるため、特に多く赤色土が分布していた東側の土を採取して分析を行った。(第9図、赤色土A部分) その結果、採取した土に含まれる赤色顔料は、高純度の辰砂(硫化水銀朱)であることがわかった<sup>②</sup>。

墓壕内から遺物は出土しなかった。

③SK-03 (第10図、図版5)

丘陵頂上部西側から検出した埋葬施設である。



第11図 大佐遺跡丘陵頂上部SK-04実測図

墓塚の主軸はN-17.5°-Eをとる。規模は遺構上面で長軸約3.3m、短軸約1.4m、深さは約0.65mを測る。墓塚底面では木棺痕跡を検出し、その規模は、長軸1.7m前後、短軸約0.4m、深さは約8cmを測る。SK-01、02とは異なり墓塚底面の中央を僅かに掘り窪めて棺を置いたと思われる。痕跡底面の断面形は舟底形を呈することから、棺には割竹形木棺が使用されたと推測される。

墓塚内から遺物は出土しなかった。

#### ④SK-04 (第11図、図版5)

丘陵頂上部北側から検出した埋葬施設である。

墓塚の主軸はN-73°-Wをとる。遺構の平面形は長方形、断面形は逆台形を呈する。規模は遺構上面で長軸3.7m、短軸1.5m、底面で長軸3.2m、短軸1m前後、深さは最大0.65mを測る。墓塚内にはSK-01、02のような粘土床は検出されず、また木棺の痕跡も確認できなかったが、底面東側の一部で厚さ1.5cmほどの薄い粘土層を直径30cmの範囲で検出した。

墓塚内から遺物は出土しなかった。

#### ⑤土器棺Ⅰ (SX-01) (第12図、図版1)

試掘調査の際、丘陵頂上部北西側において出土した壺形土器(土器棺Ⅰ)である。

土器は直径0.7m前後、深さ約0.2mほどの掘り込み内に口縁部をほぼ南に向けて横倒しの状態で出土し、この土器は頸部から口縁部にかけては故意に打ち欠かれていた。

土器の埋納されていた土壌は、SK-03の墓塚北西隅に重複する形で掘り込まれている。SK-03の被葬者との関係は不明であるが、乳児あるいは幼児が埋葬されていたものと考えられる。

棺内から副葬品は出土しなかった。

#### ⑥土器棺Ⅱ (SX-02) (第13図、図版2)

丘陵頂上部南東側で検出した壺形土器(土器棺Ⅱ1号、及び2号土器)である。これら2つの土器は、40×50cmほどの楕円形状を呈する土壌内に、破片が折り重なった状態で出土した。いずれの土器も口縁部が故意に打ち欠かれており、その打ち欠かれた2つの口縁部は、土壌西側の側面で端部を東に向けた状態で出土した。2つの土器の詳細な置かれ方に付いては不明だが、出土状況から判断すると少なくとも1号土器については頸部が西に向けられた横向きの状態であり、そして2つの口縁部はその口を塞ぐ蓋の役目を果たしたと考えられる。

この土器棺Ⅱも土器棺Ⅰ同様、乳児あるいは幼児が埋葬されていたものと思われる。

棺内から副葬品は出土しなかった。

### (3) 丘陵西側緩斜面の遺構

#### ①SK-08 (第14図、図版6)

丘陵頂上部南西側裾部(西側緩斜面)から検出した埋葬施設(石蓋土塚墓)である。墓塚の主軸はN-69.5°-Wをとる。規模は遺構上面で長軸1.9m、短軸0.85m、深さ最大0.46mを測る。蓋石には50～60cmを測る板状の石が5枚使用されていた。墓塚は地山から掘り込まれているが、北側と南側の地山では高低差があるため、この差をなくすために南側の地山上に軟岩を並べた後、さらに盛土を施して

いる。

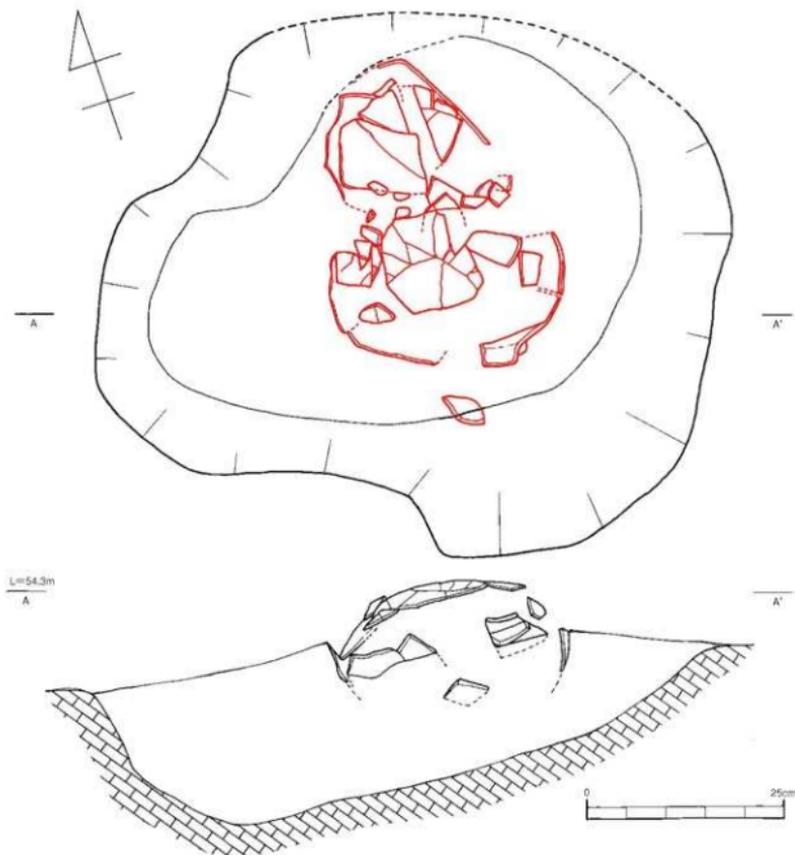
墓塚は、蓋石の置かれている範囲よりも広く掘り込まれており、土壌内に被葬者を安置した後埋め戻し、さらにその上に蓋石を置いたものと思われる。蓋石の石材はすべて安山岩であった。

墓塚内から遺物は出上しなかった。

#### (4) 丘陵西側平坦面の遺構

##### ①SD-01 (第17図、図版10)

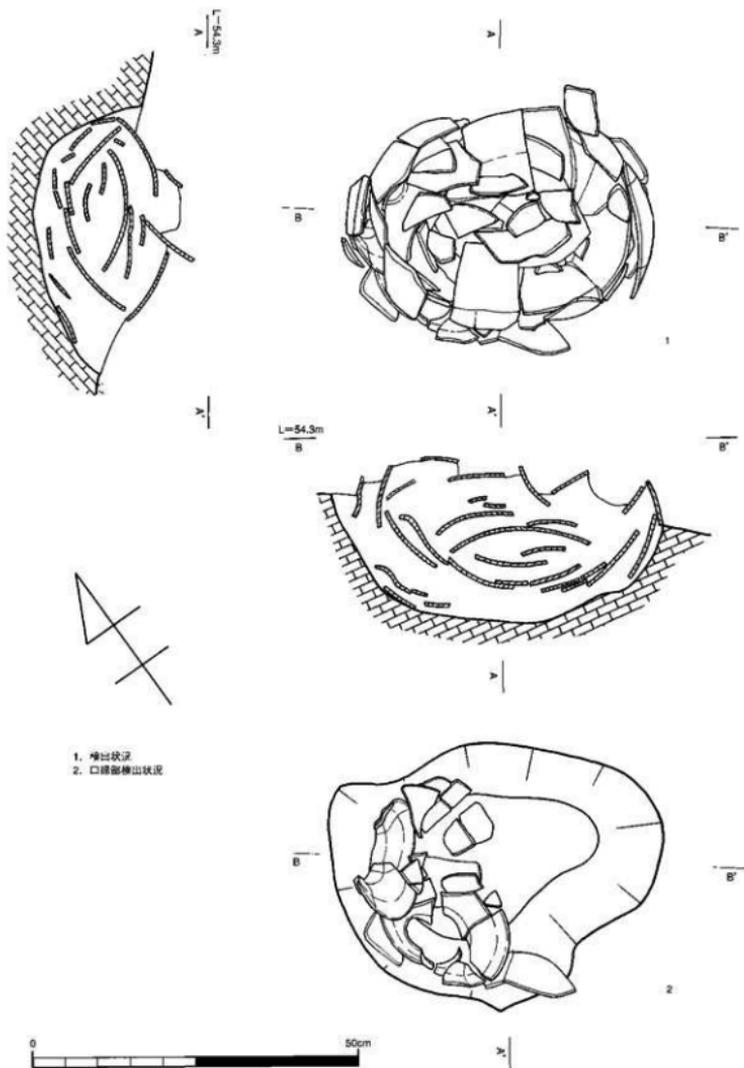
SK-06、07、とSK-08間の尾根を南北に切る形で掘り込まれた溝状遺構である。規模は、南北長約6.7m、幅は遺構上面で約1.0~1.4m、底面で0.4m~1.1m、深さは最大0.72mを測る。遺構底面のレベ



第12図 大佐遺跡丘陵頂上部土器棺I実測図

ルは中央で最も高く、南北方向に向かって低くなる。

この溝状遺構は、丘陵西側平坦面の主体部群と同時期に掘り込まれていると考えられ、この遺構より西側をひとつの墓域として区画する意味を持つものと思われる。



第13図 大佐遺跡丘陵頂上部土器棺Ⅱ実測図

この遺構から遺物は出土しなかった。

②SK-05 (第15図、図版9)

丘陵尾根内側で検出した埋葬施設(土塚墓)である。

墓塚の主軸はN-10.5°-Eをとる。規模は遺構上面で長軸約2.6m、短軸1.46mを測る。墓塚の掘り方は2段掘りになっており、城内の南側を除いてテラス状の平坦面が巡らされている。特に東側の平坦面は明確に作られている。南側にはテラス状平坦面は見られず、30cm大の石(軟岩)が1個置かれていた。墓塚底面の平面形は長方形、底部の断面形は舟底形を呈し、規模は長軸1.8m、短軸0.4mを測る。墓塚内埋土の堆積状況から棺が用いられた痕跡は確認できなかった。

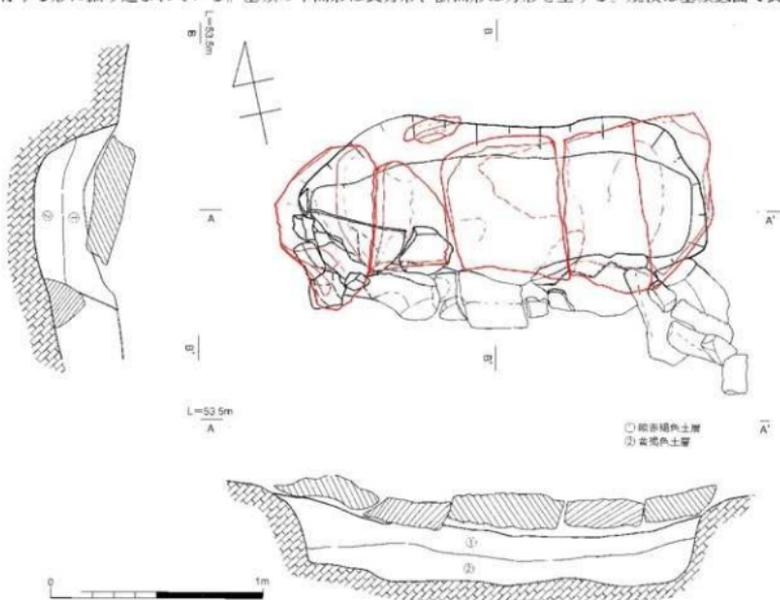
墓塚内から遺物は出土しなかった。

③SK-06、07 (第16図、図版9)

SK-05の東方、約2.5mのところ検出した埋葬施設(土塚墓)である。

墓塚の主軸はN-12°-Eをとる。規模は遺構上面で長軸約3m、短軸1.4m、底面で長軸2.35m、短軸0.38mを測る。墓塚の掘り方は東側を除いては2段掘りになっており、特に西側についてはテラス状の平坦面が明確につくられている。墓塚南側にはSK-05と同様に石(軟岩)が1個置かれていた。

一方、墓塚の東側は3段掘りの形状を呈し、テラス状平坦面は2段存在しており、上段の平坦面から小型の埋葬施設SK-07が掘り込まれていた。SK-07の主軸はN-17°-Eをとり、SK-06の主軸にほぼ平行する形で掘り込まれている。墓塚の平面形は長方形、断面形は方形を呈する。規模は墓塚底面で長



第14図 大佐遺跡丘陵西側石蓋土塚墓 (SK-08) 実測図

軸0.84m、短軸0.34m、深さはテラス状平坦面より約0.35mを測る。墓底面のレベルは、SK-06とほぼ同じである。SK-06、07は掘り込みの形状や土層から、同時に掘り込まれたものと思われる。SK-07はSK-06の被葬者と血縁的に深い関係にあった乳幼児、あるいは小児の墓と考えられる。

## (5) 丘陵東側の遺構

### ①SK-09 (第19図、図版8)

丘陵南東側斜面から検出した箱式石棺である。石棺の主軸はN-48°-Eをとる。規模は石棺内法で長さ1.67m、北東側小口幅0.34m、南西側小口幅0.16mを測り、深さは側石上面から0.2mを測る。石棺の北東側と比較して南西側小口の幅が極端に狭くなっているのは、南西側側石の1枚が土圧によって大きく内側にずれ込んだことによるものである。石棺の側石は北西側に3枚、南東側は大きな石が3枚と小さな薄手の石が1枚使用されていた。北東側小口には、側石と同じような厚手の板状の石が1枚使用されており、また南西側小口には厚さ4～6cmの薄手の石が2枚重ねて使用されていた。

石棺内北東小口側では、被葬者の頭部を置いた枕石と思われる大小3つの石を検出した。埋葬面である

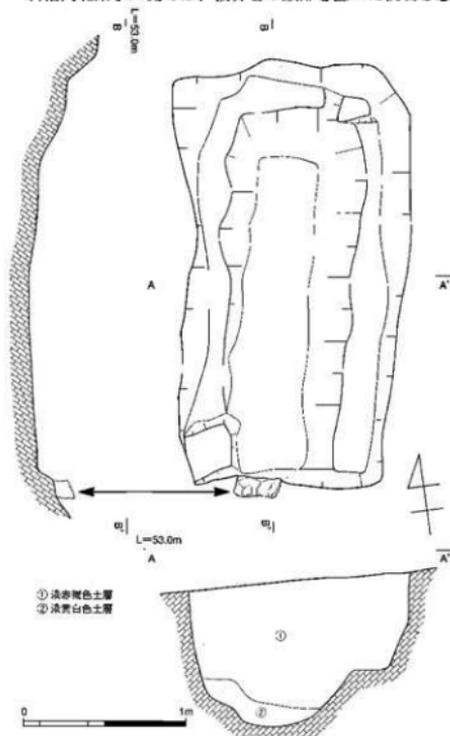
地山直上に1個大きめの石(30cm大)が置かれ、その上の側石側に1個ずつ小さめの石(10～15cm大)が乗せられていた。上に乗せられていた2つの石は、おそらくは、被葬者の頭部を安定させるためのものであったと考えられる。

蓋石に使用されていた石の数は20枚ほどであるが、棺の直上に置かれていたのはその内の6枚であった。それら6枚の蓋石の大きさは、南西側小口に向かうほど幅が狭く小さな石が使用されており、他の石はそれらの隙間を塞ぐようにして置かれていた。石材はすべて安山岩であった。

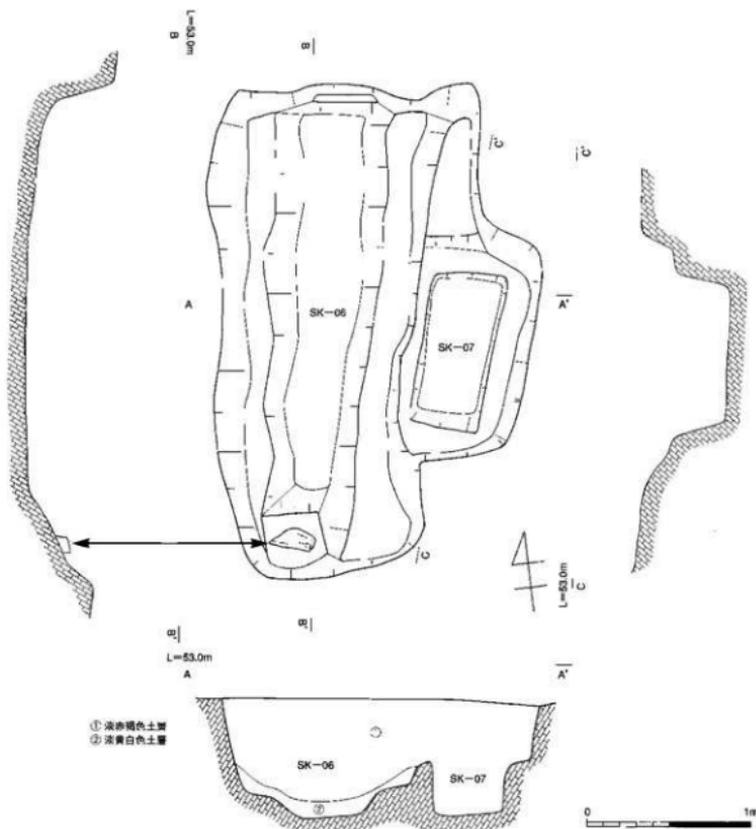
棺内から側石内側の剥離片が出上したが、ほかの遺物は出土しなかった。

### ②SD-02 (第18図、図版11)

丘陵尾根北東側斜面で検出された溝状遺構である。規模は南北長6.3m、幅は遺構上面で0.25～0.85m、底面で0.1～0.5m、深さは0.15～0.4mを測る。遺構底面のレベルは北に向かって下がっている。この



第15図 大佐遺跡丘陵西側SK-05実測図



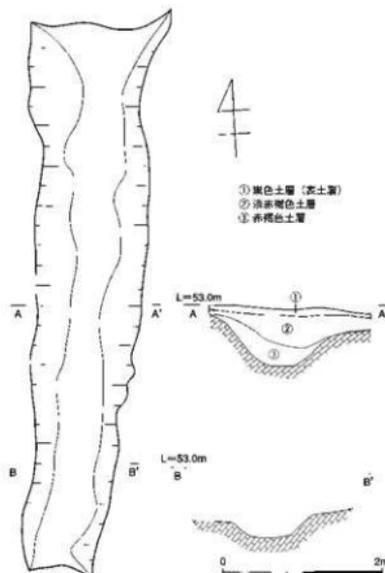
第16図 大佐遺跡丘陵西側SK-06・07実測図

溝状遺構は斜面北側部分でしか確認できなかった。SD-01とは規模や位置の状況が異なるため別の性格を持つ遺構であると考えられる。

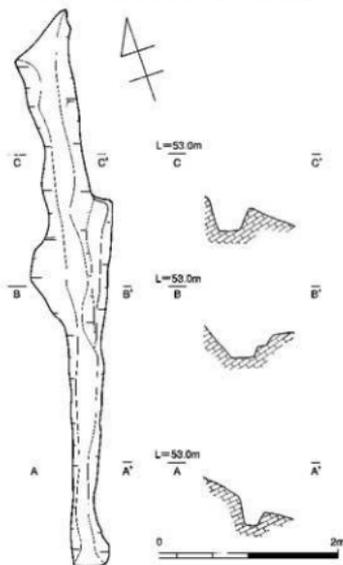
この遺構から遺物は出土しなかった。

#### (6) 遺物について

第20岡は上器棺Ⅰ(SX-01)である。頸部には突帯が巡り、それより上の口縁部は打ち欠かれている。胴部から底部にかけては器肉が非常に薄く、出土したものの復元は不可能であった。法量は胴部径40cmを測り、その他の部分については不明である。外面の調整は頸部が横ナデで、肩部より下は多方向のハケメである。内面の調整は頸部が横ナデで、それより下はヘラケズリである。胎土は1ミリ以



第17図 大佐遺跡丘陵西側SD-01実測図



第18図 大佐遺跡丘陵東側SD-02実測図

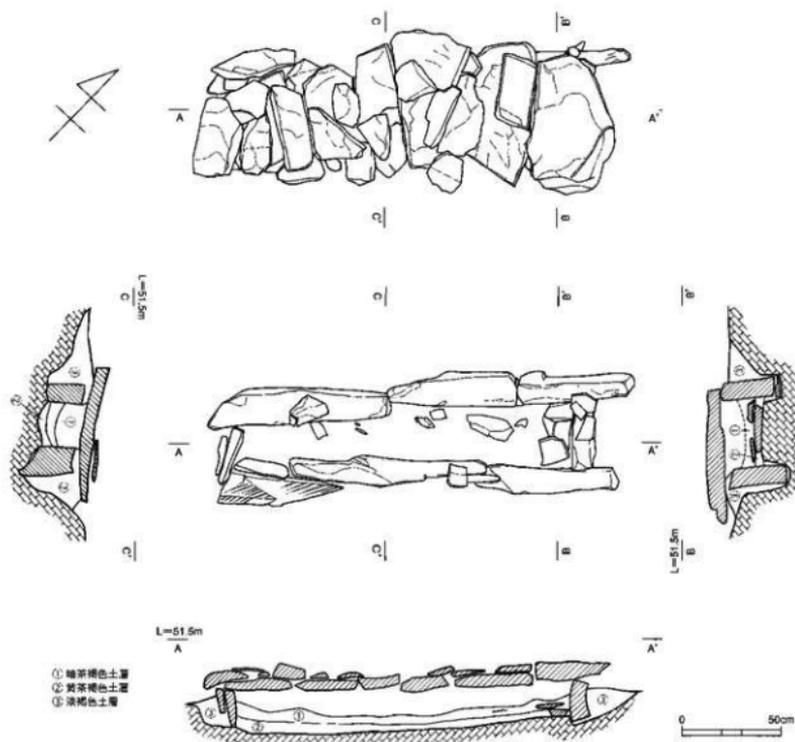
下の砂粒を含む。焼成は良好である。

この土器のように、頸部に突帯が付くものは県内では出土例があまりなく、松江市の柴尾2号墳より出土した壺や、袋尻8号墳より出土した壺、また鹿角町の草田遺跡のSD-03から出土した裝飾壺など数例であり、これらの土器は鳥取県内で盛行するタイプのもものと類似する。時期は草田編年7期に相当し、古墳時代前期のものと思われる。

第21図は壺形土器(SX-02、1号土器)である。法量は口径19.5cm、胴部径33.3cmを測る。復元器高は44.5cmである。成形技法は、叩き成形であり、胴部には僅に叩き目が残存する。外面の調整は口縁部、頸部が共に横ナデで、肩部より下が多方向のヘラミガキを施している。内面の調整は口縁部から頸部にかけて横ナデであり、それより下は多方向のハケメである。口縁部は複合口縁であり、立ち上がりから緩やかに外傾する。外面の稜は突出せずややだれた感があり、口縁端部は若干丸みを帯びている。底部は欠損しているが、直径4cmほどの平底を持つものと思われる。胎土は、1ミリ程度の砂粒をわずかに含む。焼成は良好である。

第22図は壺形土器(SX-02、2号土器)である。法量は口径19.6cm、胴部径31.4cmを測る。

復元器高は39.7cmである。成形技法は1号土器と同様、叩き成形であり、胴部下に叩き目が残存する。外面の調整は口縁部、頸部が横ナデで、肩部より下が斜め方向のヘラミガキを施している。内面の調整は口縁部、頸部が横ナデであり、肩部より下は多方向のハケメである。口縁部は複合口縁であり、下側の稜から緩やかに外傾する。稜はあまり突出せずだれた感があり、口縁端部は丸みを帯びている。底部は直径4.6cmの平底を持つ。胎土は直径1mmほどの砂粒をわずかに含む。



第19図 大佐遺跡丘陵西側石棺墓 (SD-09) 実測図

焼成は良好である。

これら土器Ⅱとして検出した土器は、プロポーシヨンや技法から近畿地方より搬入された可能性が高い。時期的には庄内式ないし布留式に相当するものと思われる。

第23図はSK-01より検出した黒色の漆塗製品である。残存長6.3cm、幅1.3cm、厚さ0.6cmを測る。肉眼による観察では、表面に規則的な格子状の筋が存在する。内部の構造は中空であり、土が詰まった状態である。分析の結果、糸状の繊維が規則止しく巻きつけられた製品の表面に漆が塗られたものであることが判明した。糸の巻きつけられていたものは木製品であった可能性が高い。

#### (7) 赤色顔料について

島根県内の墳墓において赤色顔料が見られるようになるのは、弥生時代の後期終末からであり、それより古墳時代の前半期までは水銀朱が多く用いられ、それ以降はベンガラが一般的に使われる状況

が窺われ、古墳時代後期以降になると顔料そのものが墳墓ではあまり使用されなくなる傾向が見られる。<sup>9)</sup> SK-02より検出した赤色顔料は水銀朱であることが判明し、この時代的な赤色顔料の使用傾向に合致するものである。赤色顔料の使用方法に関しては、飯塚氏の分類の3類（顔料が塊状となって検出された例）ないし、4類（主躯体床面に部分的に少量検出された例）に該当するものと思われ、被葬者の頭胸部への施朱によるものか、あるいは副葬品として納められたものと推定される。

## (8) 小結

今回の調査では、本遺跡は弥生時代終末期から古墳時代前期のものであることが明らかになった。

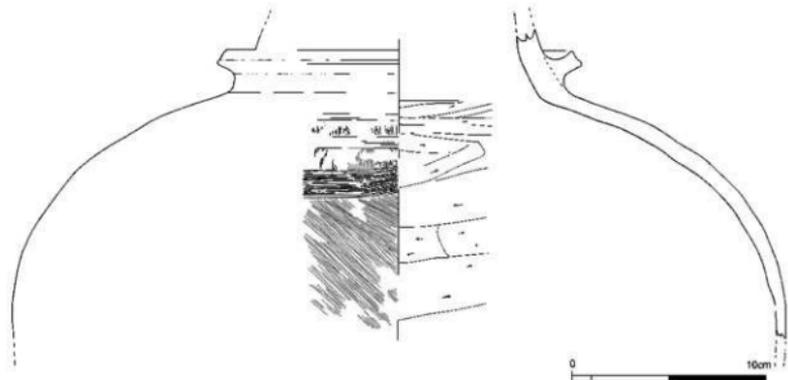
発見された埋葬施設としては、丘陵頂上部マウンド上に中心主躯体群が存在し、そして、それらに付随する形でマウンド東西裾部、西側尾根上平坦部に周辺主躯体群が存在しており、全体として見れば集団墓の様相を呈する。

丘陵頂上部は、自然地形を削り出し主躯体部を掘り込み、その後盛り土を施してマウンド状に成形されたと考えられる。

中心主躯体群として4基の上墳墓（うち3基は木棺痕跡検出）と、それに付随して2基の乳・幼児用と思われる土器棺が出土した。これらの埋葬施設の中でも優位にあるものが、水銀朱の検出されたSK-02と、副葬品と思われる漆塗製品が出土したSK-01であると思われる。

マウンド西側裾部で検出した石蓋土塚墓と、東側裾部にあたる斜面で検出した箱式石棺は、施設に石材が用いられている点、またマウンドの裾部にあたる場所に存在するという点で共通性がみられ、周辺主躯体群を形成する同一集団の墓と思われる。これら2つの施設内からは赤色顔料はおろか副葬品も出土しておらず、中心主躯体の方に優位性が置かれていることが窺え、被葬者はマウンド上の被葬者に比べて階層的に低かったのではないかと思われる。

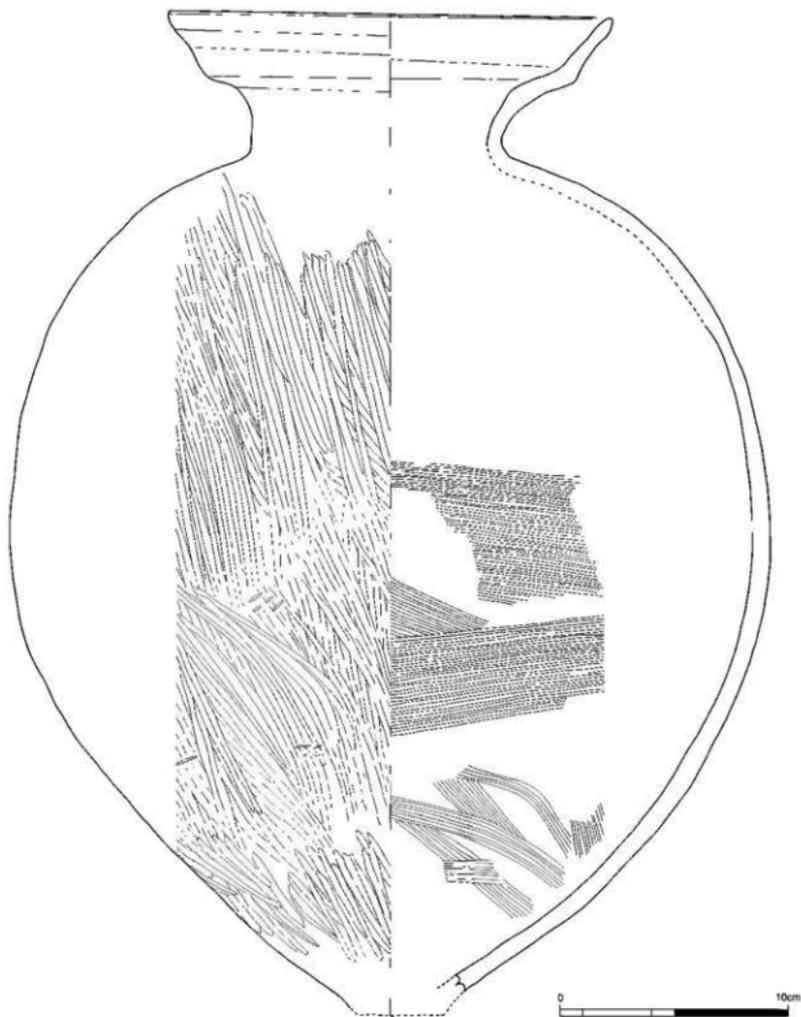
マウンド西側の尾根上平坦面で検出した3基の上墳墓は、いずれも長軸が尾根筋に直交する形をとり、また、共通して2段掘りの形態を取ることから、一つのまとまりを持つ集団の墓と考えられる。



第20図 大佐遺跡土器棺I実測図

これらの施設内からは特殊なものは検出されず、やはりマウンド上の中心主体に関連する周辺主体部群の一つと考えられる。

本遺跡は、このように同一の丘陵尾根に集中して埋葬主体が築かれており、集団墓の様相を呈している。その中でもマウンド上の中心主体群は優位性を持っており、これらの被葬者は特定集団の中で

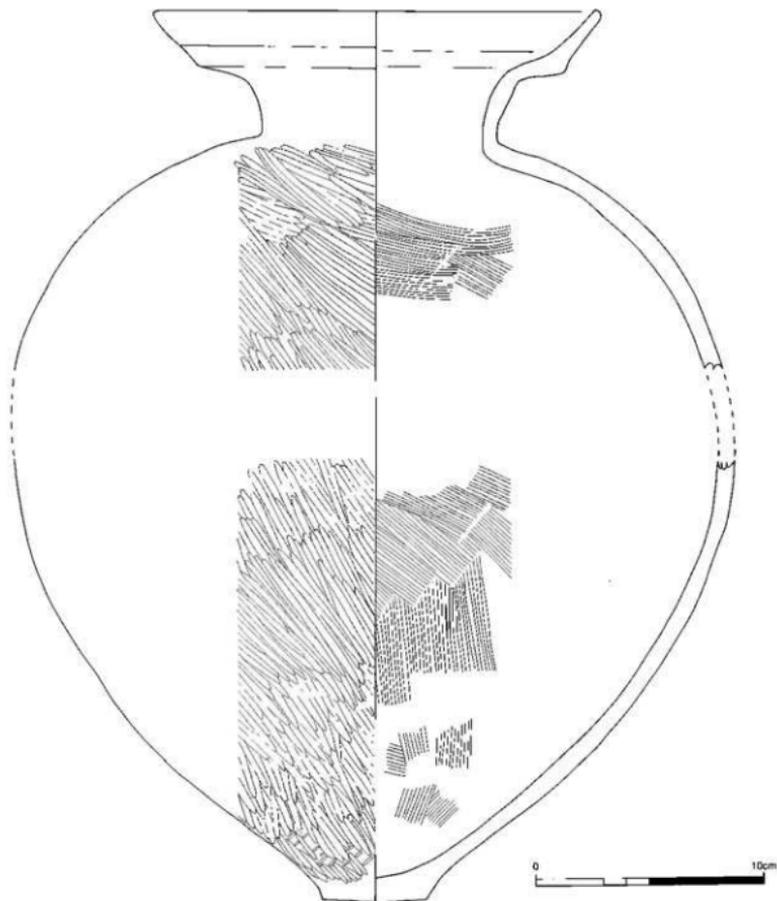


第21図 大佐遺跡土器棺Ⅱ（1号土器）実測図

も特別な存在であったのではないだろうか。さらに、それら中心主体群の中でも優位にあるものが存在することから、その特別な集団の中でも特定の個人が存在が表面化しつつあったのではないだろうか。

土器棺Ⅰ（SX-01）として出土した突帯付きの壺型土器に類似するタイプのもは鳥取県内において多くの出土例があり、被葬者が当該地方との密接な関係にあったことを窺わせる史料である。

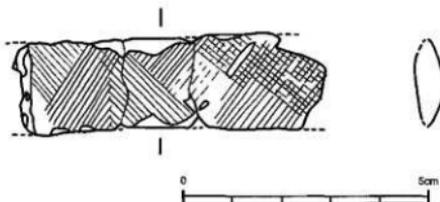
本遺跡近辺では、柴尾2号墳（前期古墳）の墳頂部供献土器として同タイプの土器の出土例があり興味深い。土器棺Ⅱとして出土した壺型土器は、本遺跡築造時期において畿内を中心とする他地域の



第22図 大佐遺跡土器棺Ⅱ（2号土器）実測図

影響を強く受けていたことを窺わせるものである。

このように、本遺跡は在地の有力集団がいかにして前期古墳を築いていくのか、またその過程においてどの地方の影響を強く受けたのかを解明する上での手がかりとなるものである。



第23図 大佐遺跡SK-01出土の漆塗製品実測図

<註>

- (1) 奈良国立文化財研究所佐藤昌憲氏の分析結果による
- (2) 考古地質学研究所柴田喜太郎氏の分析結果による
- (3) 『釜代1号墳外発掘調査報告書』松江市教育委員会 財団法人松江市教育文化振興事業団 1994年

<参考文献>

- 松本岩雄「墳丘出土の大型土器」『山陰考古学の諸問題』山本清先生喜寿記念論集刊行会 1986年
- 「四隅突出形墳丘墓とその時代」第25回山陰考古学研究集会 1997年
- 田中義昭他「山陰地方における弥生墳丘墓の研究」鳥根大学法文学部考古学研究室 1992年
- 「東宗像遺跡」財団法人鳥取県教育文化財団 1985年
- 「長瀬高浜遺跡発掘調査報告書Ⅳ」財団法人鳥取県教育文化財団 1982年
- 「平Ⅱ遺跡、吉佐山根1号墳、穴神横穴墓群」鳥根県教育委員会 1995年
- 「柴尾遺跡発掘調査報告書（Ⅰ）」松江市教育委員会 財団法人松江市教育文化振興事業団 1994年
- 「袋尻遺跡群発掘調査報告書」松江市教育委員会 財団法人松江市教育文化振興事業団 1998年
- 茂木雅博「方形周溝墓と墳丘墓」『季刊考古学第9号』雄山閣 1984年
- 六車恵一「讃岐における合口土器と前期古墳」『考古学研究第14巻第1号』考古学研究会 1967年
- 展示図録『春季特別展 墓と弥生時代』滋賀県立安土城考古博物館 1996年
- 肥後弘幸「丹後地方の弥生墓制」『京都府埋蔵文化財論集第2集』  
財団法人京都府埋蔵文化財調査研究センター 1991年
- 岩松保「山地の墓、あるいは平地の墓」『京都府埋蔵文化財論集第3集』  
財団法人京都府埋蔵文化財調査研究センター 1996年

## 大佐遺跡遺構一覽表

地点	遺構名	種別	規模 (m)	出土遺物	共存遺構	備 考
頂上部	SK-01	木棺墓	上面 1.4~3.30 木棺痕跡 0.6~2.5 深さ 0.8	漆製品	なし	削竹形木棺、粘土床
頂上部	SK-02	木棺墓	上面 1.2~3.45 木棺痕跡 0.4~2.6 深さ 0.8	赤色顔料	なし	削竹形木棺、粘土床
頂上部	SK-03	木棺墓	上面 1.4~3.30 木棺痕跡 0.4~1.7 深さ 0.65	なし	SX-01	削竹形木棺、粘土床
頂上部	SK-04	不明	上面 1.5~3.70 底面 1.0~3.2 深さ 0.65	粘土塊	なし	
西側平坦面	SK-05	土塚墓	上面 1.46~2.60 底面 0.4~1.8 深さ 0.26	石 1	なし	
西側平坦面	SK-06	土塚墓	上面 1.4~3.0 底面 0.38~2.35 深さ 0.24	石 1	SK-07	
西側平坦面	SK-07	土塚墓	底面 0.34~0.84 深さ 0.35		SK-06	
西側緩斜面	SK-08	石蓋土塚墓	上面 0.85~1.9 底面 0.56~1.78 深さ 0.46	石 1	なし	蓋石は 5 枚使用 (安山岩) 蓋石-20枚程度、側石-10枚、底石-なし
東側緩斜面	SK-09	箱式石棺墓	石箱内法 0.34~1.67 深さ 0.2	枕石 3	なし	組合式箱式石棺
西側平坦面	SD-01	溝状遺構	長さ 6.7 幅 1.0~1.4 深さ 0.72	なし	なし	仕切溝
東側緩斜面	SD-02	〃	長さ 6.3 幅 0.25~0.85 深さ 0.15~0.4	なし	なし	
頂上部	SX-01	土器棺	径 0.7前後 深さ 0.2	土器 1	SK-03	頸部に突帯をもつ 一部がSK-03と重複、一個体が横倒しの状態で出土
頂上部	SX-02	〃	径 0.5前後 深さ 0.3	土器 2	なし	複合口縁で平底、厚き成形 二個体の土器が横倒しの状態で出土

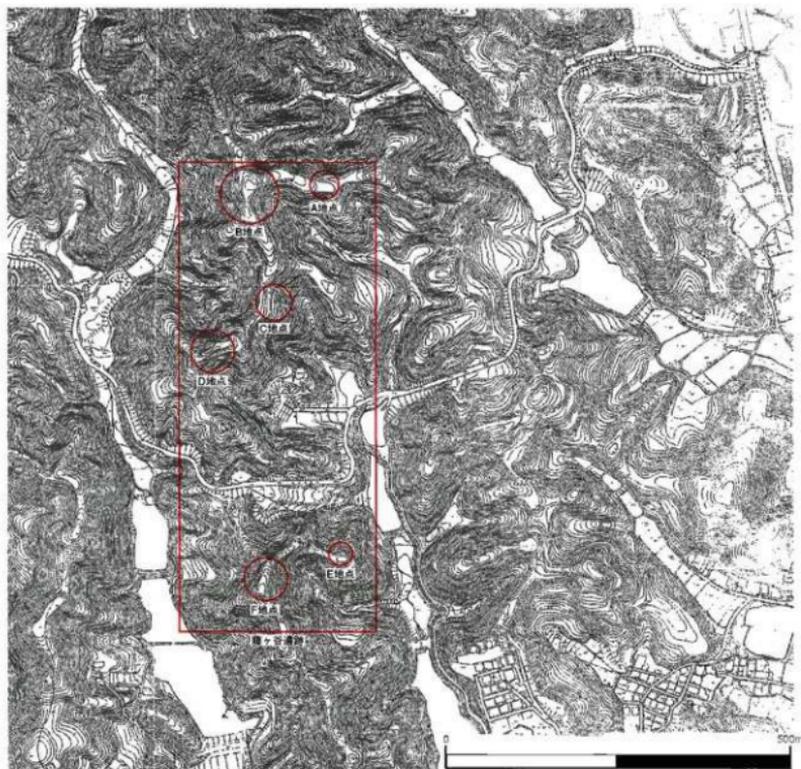
## 2. 藤ヶ谷遺跡

### (1) 調査の概要

藤ヶ谷遺跡は島根大学の北側、島根半島から南に伸びる北山山脈の尾根筋上に位置する城跡推定地である。この尾根を境に東側は苔田町、西側は西川津町となり、城跡は尾根筋の頂上の平坦地の数カ所に点在し広範囲にまたがる。尾根筋には独立した丘陵が多く見られ、人工的に削平されたと思われる曲輪や通路と思われる場所の両端（もしくは片端）に小土塁状の高まりや、土橋などが随所に見られる。

この遺跡は北西側に真山城、西側の尾根の先端に白鹿城空群の常福寺丸、さらにその東隣の尾根には白鹿城空群の本丸があるため、これらの城跡と関連があると考えられる。

本調査は平坦地6カ所（A～F地点）を重点的に行い（第24図）、同時に縄張り調査も行った。



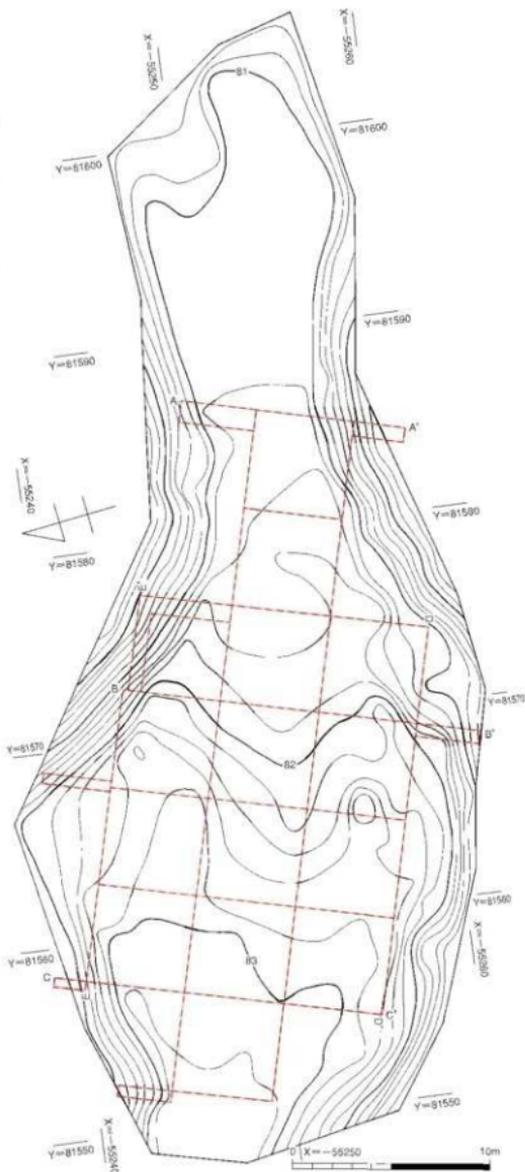
第24図 藤ヶ谷遺跡調査地点配置図

## (2) A地点

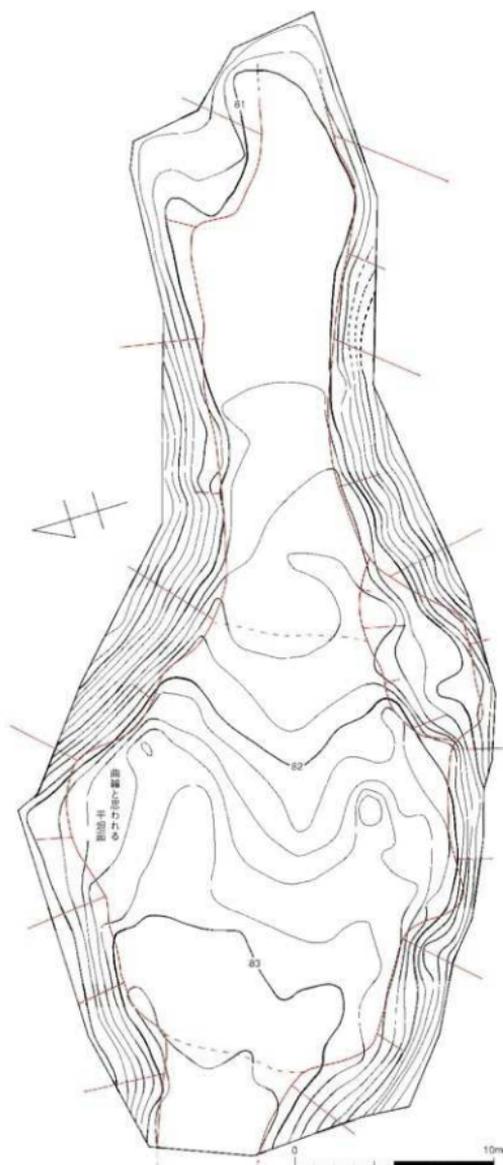
本地点は調査区内の最北端にあるB地点から東側に伸びる尾根上に位置する。調査地点の標高は81m～83m、尾根自体は西から東にわずかに傾斜しているが、ほとんど平坦に近い。本地点は東西に広がる尾根上平坦地で、南北両側は急斜面になっている。調査区中央は前後の尾根幅よりも広い平坦面があり、その付近約35m×15mの範囲を中心に5mグリッドを設定し、南北の斜面に関しては上層の堆積状況を確認するためにトレンチを数本設定して調査を行った(第25図)。

東西に伸びる尾根頂上部の平坦面は東西長さ約140mに及び、南北幅は5m前後である。しかし本地点の中央部、拡張されたと思われる部分は最大で南北幅約20mを測り、前後の頂上部平坦面に比べて南北両側に10m以上広がることもある。この拡張されたと思われる部分は東西長さ20m、南北幅10m～20m、面積約250m<sup>2</sup>に及ぶ(第26図)。この部分が人為的によるものかどうかをトレンチによって土層で確認を行った。

調査の結果、調査区の尾根上平坦面は表上が約10cm程度堆積しているだけで、そのすぐ下は地山の明黄褐色土層であった(第27図)。地山面には人工的に加工されたような痕跡は見あたらず、遺物も出土しなかった。



第25図 藤ヶ谷遺跡A地点調査前地形測量図及び調査区設定図



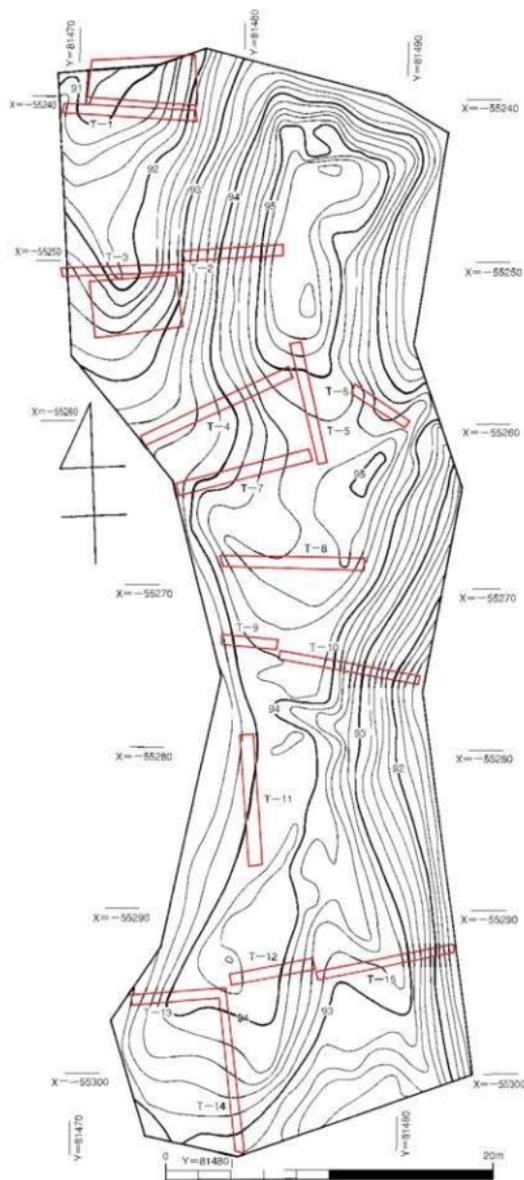
第26図 藤ヶ谷遺跡A地点平坦面位置図

拡張されたと思われる部分は上層が平坦面とは異なる堆積状況をしてきた。この付近の土層は地山が谷底に向かって傾斜し始めているにもかかわらず、地表面は平坦地が続いている。その後やや遅れて地表面が谷底に向かって傾斜を始める。この付近の土層は地山から最大約1m前後別の層が堆積しているところもあり、それよりも南側が顕著に見られる。拡張されていない所は自然堆積のように表上も流れ落ちているように思われる(第27図、A-A)。

これは尾根を削って平坦面をつくった際にその土を両側に盛ったとも考えられるが、旧土など盛上によるものかどうかの確認は得られなかった。

遺物が出せず、建物跡などの遺構も検出されなかったため本地点が曲輪なのか、もし曲輪であれば機能した時期や役割など不明な点が多い。しかし本地点が独立した丘陵ではなく、B地点との比高差は約10mあり、段下に位置する。尾根を東西に移動するためには必ず本地点を通らなければならないという位置的関係からB地点の関連した曲輪、もしくは付属した曲輪だった可能性が考えられる。また拡張部分の面積が約250㎡とかなりの広さとなるため、何人かの城兵が野営もしくは駐屯するための曲輪だったかもしれない。





第28図 藤ヶ谷遺跡B地点調査前地形測量図及び調査区設定図

### (3) B地点

本地点は本遺跡の最北端に位置する尾根上平坦地である。調査区内は標高91m～95m、東西約23m、南北約80mに広がる尾根上平坦地で、南北両側にはやや高い小さな丘陵状の地形が各1カ所ずつある。この尾根上平坦地は南から続いており、その長さは約200m近くになる。北側の小丘陵頂上部に南北11m×東西3m、南側の丘陵頂上部にも南北10m×東西8mの平坦地がある。調査区外の東西両側は急斜面になっているため、本地点は独立丘陵状になっている(第28図)。

本地点は3方向へ行く分岐点にあたる。

- 天狗山へ行く道
- A地点へ行く道
- C地点へ行く道

調査前の段階でこの3方向の道筋のそれぞれに小さな土塁状の高まりがあった。調査は各所にトレンチを設定して遺構の有無の確認から行った。

調査の結果、平坦地は表土直下が地山の黄褐色上層であり、地山には加工されたような痕跡は確認されなかった。3方向に行く道筋の小さな土塁状の高まりは小土塁と考えられ、南側小丘陵から遺構が確認された。

①小土塁1…北側小丘陵の西側にあり、天狗山へ行く道筋にある。長さは30m以上あり調査区外の北側へ続いている。幅約50cm、高さは10～20cmを測る。小丘陵との間は緩やかな谷状の斜面で、通路として使用し

たと思われる。この通路の土層と小土塁の土層は異なっているため（第30-1・2図）、小土塁には別の土を盛ったとも考えられるが、詳細については不明である。

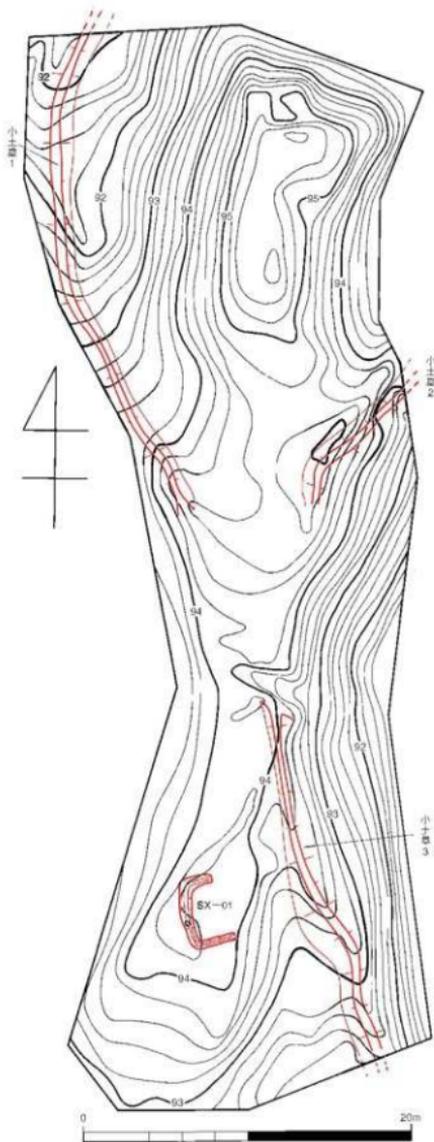
②小土塁2…北側小丘陵の南東側にあり、A地点へとつながる道筋にある。長さは約10m、幅約50cm、高さは20～30cmを測る。小丘陵との間は小土塁1に比べて傾斜のある斜面だが、同様に通路として使用したと思われる。また小土塁1と同じく土層は斜面の土層と異なる堆積をしている（第30-3図）。

③小土塁3…南側小丘陵の東側にあり、南側の尾根筋から続いている。長さはおよそ30m、幅は約50cm、高さは20cm～30cm程度を測る。小丘陵との間が平坦で通路として使用したと思われる。これも1・2同様に尾根上平坦面の通路状の地形の土層とは異なる堆積をしていた（第30-4図）。

第2層の赤褐色土層上面から須恵器の坏の口縁部片が出土した（第32図、図版23）。

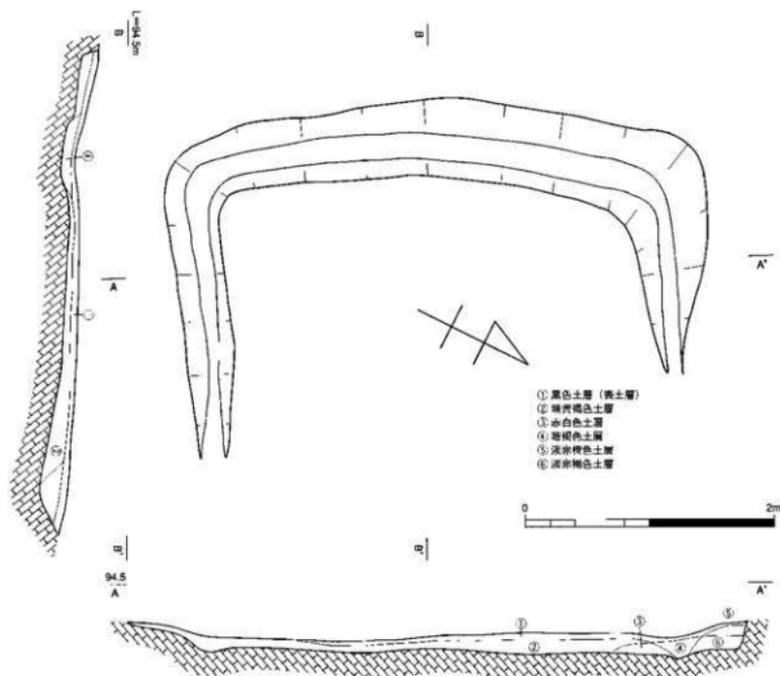
これらの土塁は周辺を削って造った削出土塁と考えられる。その削った際の上を盛ったものの、つき固めていないため流れ落ちてしまったと思われる。おそらく造った当初はもう少し高かったのではないだろうか。

○SX-01（第30図・図版13）…南側小丘陵から検出された側溝を持つ竪穴遺構である。規模は上端東西4.31m×



第29図 藤ヶ谷遺跡B地点遺構配置図





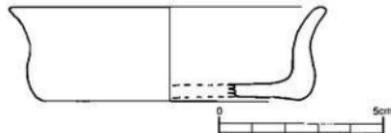
第31図 藤ヶ谷遺跡B地点SX-01実測図

南北2.08m～2.60m、下端東西3.36m×南北1.20m～2.10m、深さ約10cmを測る。側溝は幅約8cm～20cm、深さ約10cmを測る。南北両側と西側に壁をもち、東側に向かって11を開けているような状態である。側溝以外は柱穴など建物跡を示すような遺構は検出されず、遺物も出土しなかったため、時期や用途、機能など詳細については不明である。

北側小丘陵についてはすでに地山が露出しているところもあり、頂上部の平坦面や丘陵斜面からも遺構は検出されず、遺物も出土しなかった。

②遺物 (第32図、図版23)

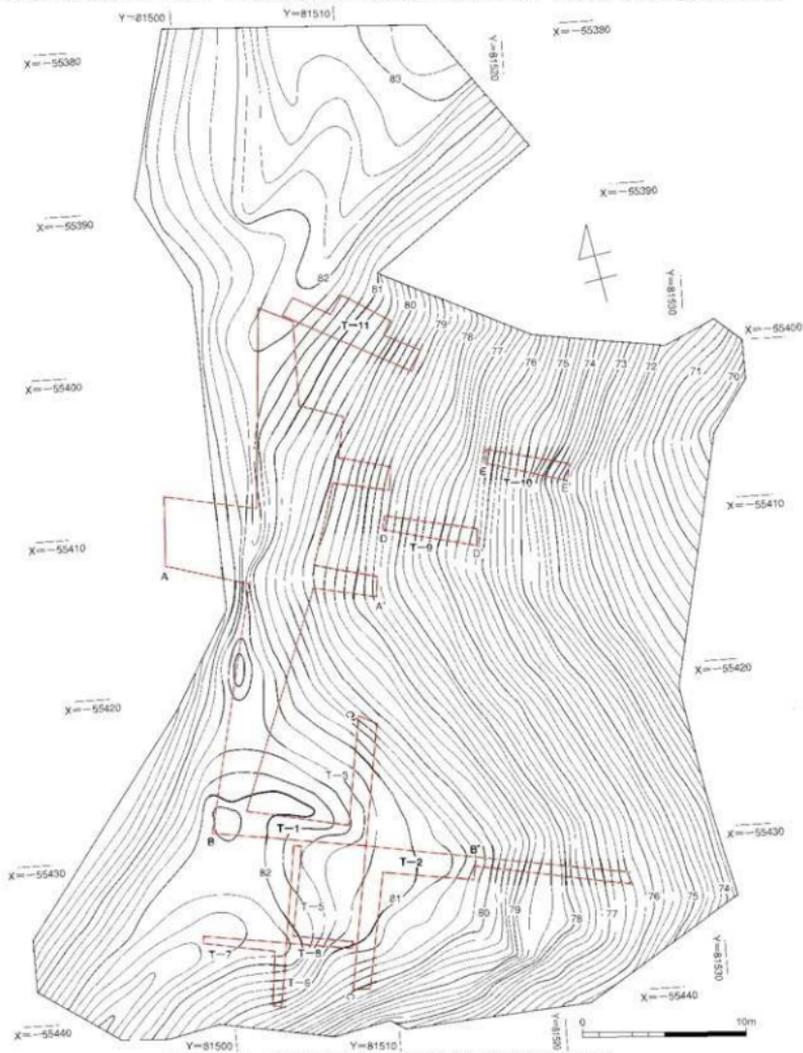
○須恵器…T-15の第2層赤褐色土層上面から出土した坏の口縁部片である。法量は推定で、口径9.6cm、底径8.0、高さ2.9cmを測り、外面には自然釉がかかっており、底部には回転糸切り痕が見られ、口縁部が外反する器形である。形態や技法的特徴から8世紀中頃から9世紀中頃のものと思われる。



第32図 藤ヶ谷遺跡B地点出土遺物実測図

#### (4) C地点

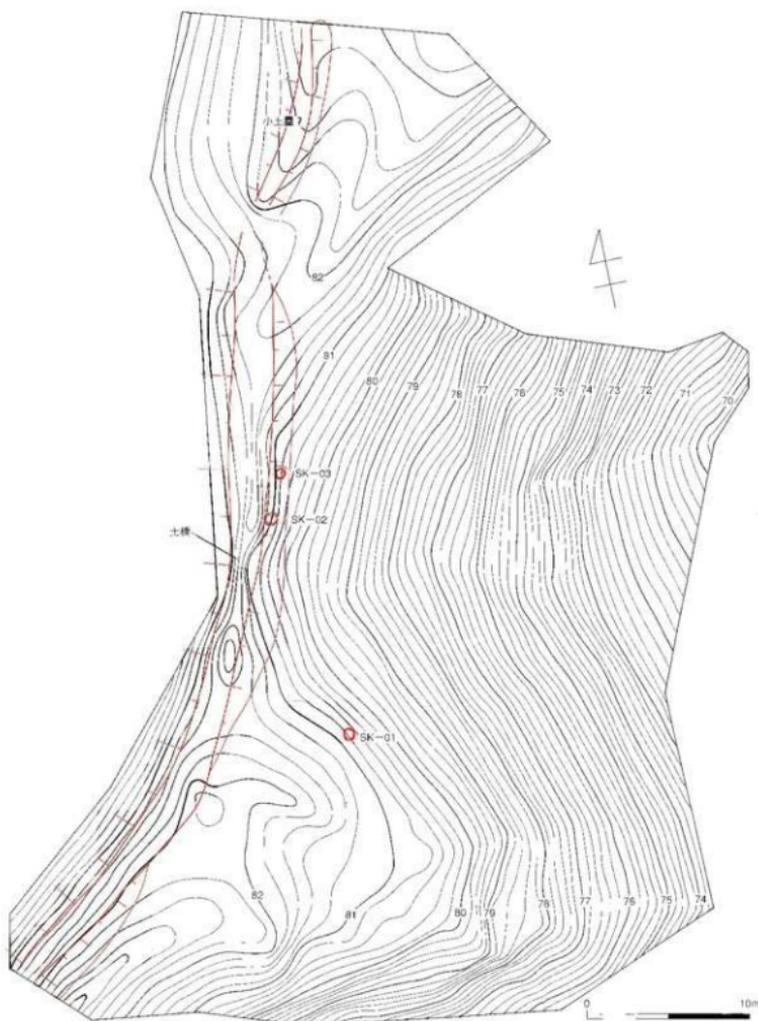
本地点はB地点とD地点との中間に位置し、東に伸びる舌状台地と東向き斜面からなる。南側にある舌状台地は標高80m～82m、平坦地は東西15m×南北18m面積約270m<sup>2</sup>であり、東側は急斜面である。



第33図 藤ヶ谷遺跡C地点調査前地形測量図及び調査区設定図

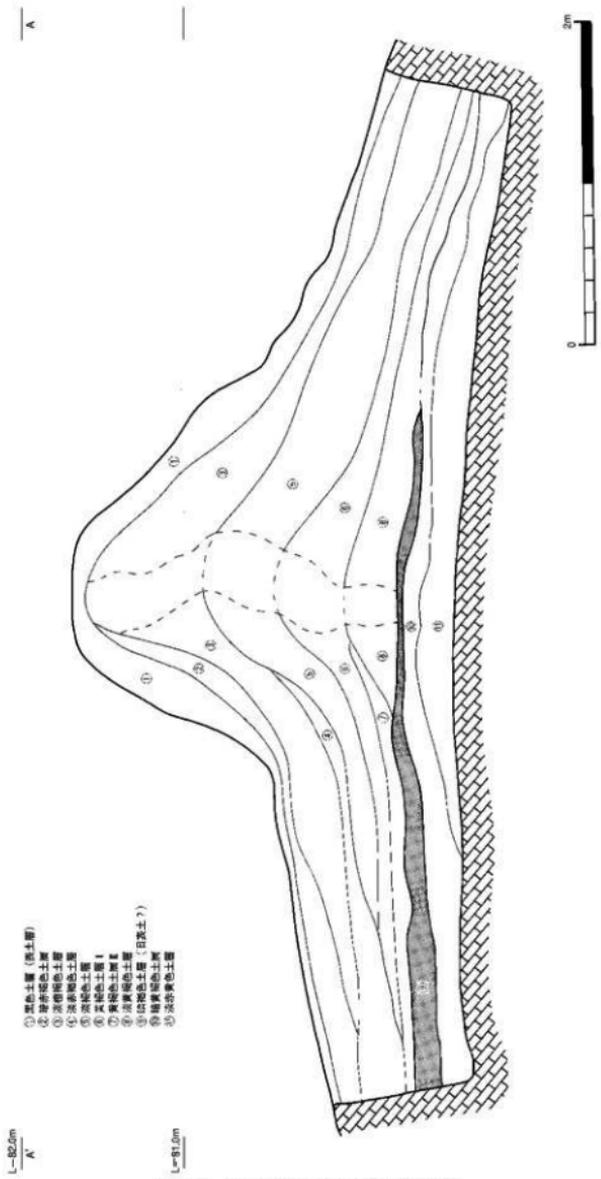
北側の東向き斜面は標高71m～81m、東西約24m×南北27m、面積約650m<sup>2</sup>である（第33図）。

調査前の段階で南北に走る土橋が確認されていた（図版14）。土橋の幅は1m～3m、長さ約20mに及ぶ。高さは東側斜面の地表面から最高で約1.2mを測る。調査区の北側には尾根の幅が約10mの平坦地が広がり、平坦地の西側に幅約30cm、高さ約20cmを測る小土壘状の高まりが見られる（第34図）。



第34図 勝ヶ谷遺跡C地点遺構配置図





第39図 藤ヶ谷遺跡C地点土層断面図

調査は舌状台地の平地地には東西南北の4方向にトレンチを設定し、東側斜面にまでトレンチを延長した。東向き斜面は上橋付近を重点的に斜面下までトレンチを設定した。土橋は東西を横断するような立割トレンチを設定し、土層堆積状況を調べた。また上橋の基盤部分を調べるために土橋に沿ってトレンチを設定し、調査を行った。

調査の結果、焼土層が舌状平坦地（SK-01）と上橋の下（SK-02）から検出され、上橋の東側から素堀土層（SK-03）が検出された。遺物は舌状台地部分から数点出土した。

#### ○遺構

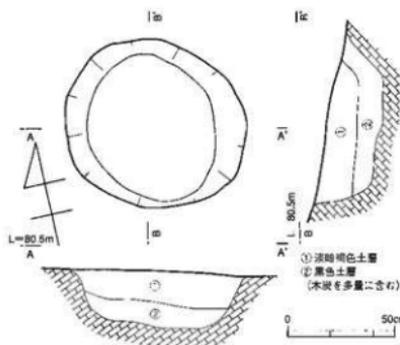
##### ①上橋（第39図、図版14）

土橋は調査前の段階で長さ約20m、幅約1～3m、高さは約1.2mを測った。調査の結果、土層断面からII表土と思われる暗褐色土層が検出され、5層にわたって盛上されていた。規模は土層断面から上端幅1m、下端幅3.3m、II表土から地表面までは2mを測る。この土橋は版築工法などによって築かれたものではないと思われるが、比較的固く締まっている。この土橋を築成するためにどこから上を持ってきて盛ったのかは不明であり、遺物も出土しなかったため詳細な築成の時期も不明である。

旧表上の検出の範囲は西側が上橋より5mまで確認できているが、それより西は調査区外のため不明である。東側は斜面の下まで確認されている（第35-3・4図）。南北方向は土橋が始まる舌状台地部分との境から土橋が終わるところまで確認された。その規模は東向き斜面に全体に広がっており、東西30m以上、南北25mである。

##### ②SK-01（第36図、図版15）

SK-01は舌状台地の北側、緩やかな北向き斜面から検出された焼土層で、上部径約90cm、底部径約60cm、深さ約27cmを測り、平面形はやや不整な円形、断面形は逆台形を呈し、底面はやや凸凹しているものの平坦に近い。上面の縁は固く焼けている。覆土第2層の黒色土層は炭化物を多量に含んで約10cm前後堆積していた。恐らくかなり長時間にわたって火を使用したものと考えられる。この焼土層内から遺物は出土しなかったが、検出面の明黄褐色土層は遺物包含層であり、同層から須恵器の破片が数片出土した。



第36図 藤ヶ谷遺跡C地点SK-01実測図

##### ③SK-02（第37図、図版16）

SK-02は上橋の下、立割トレンチから検出された焼土層で、上部径約72cm、底部径約59cm、深さ約20cmを測り、平面形は円形、断面形は逆台形を呈し、底面はやや凸凹しているものの平坦に近い。SK-01に比べて底面や上面縁、側壁がより赤く焼けている。SK-01と同様に覆土第2層の黒色土層に炭化物を多量に含んで約10cm堆積していた。SK-02内や周辺からも遺物は出土しなかったが、土橋の旧表上面と思われる層の下、地山の淡赤黄色土層から掘り込まれてい

るため、土橋築成以前のもと考えられる。

#### ④SK-03 (第38図、図版17)

SK-02の北側約5mのところから検出された素堀の土壇(SK-03)で、上部径約56cm、底部径約47cm、深さ約127cmを測り、平面形は円形、断面形は逆台形を呈し、底面は平坦である。SK-01やSK-02のように焼上や炭化物など火を使用した痕跡はなく、遺物も出土しなかったため、時期や性格など詳細については不明だが、SK-01・02と比べると非常に深いため用途は異なる土壇と思われる。

舌状台地部分は上層から平坦地が拡張されたとと思われる。東西方向はわずかながら東に向かって傾斜するが、平坦に近い。地山が谷に向かって傾斜し始めるまで別の層が堆積して地表面では平坦地がつづく。尾根上平坦地の西端から約15m付近で斜面に変わる。(第35-1図)。南北方向も同様に平坦地から斜傾しはじめる付近では異なる層が堆積している(第35-2図)。東向き斜面のように川表土らしき層は確認されなかったために盛土であるとの確認は得られなかったが、A地点と同じ方法で拡張したと考えられる。

東向き斜面は、旧表土と思われる層は確認されたが遺構は確認されず、遺物も出土しなかった。

#### ○遺物 (第40図、図版23)

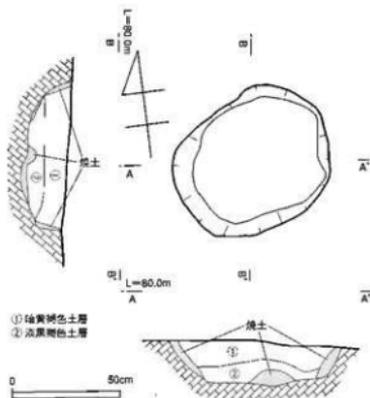
遺物は舌状台地部分から須恵器の破片が数片と陶器が出土した。東向き斜面や土橋付近からは出土しなかった。

#### ①須恵器 (第40-1図)

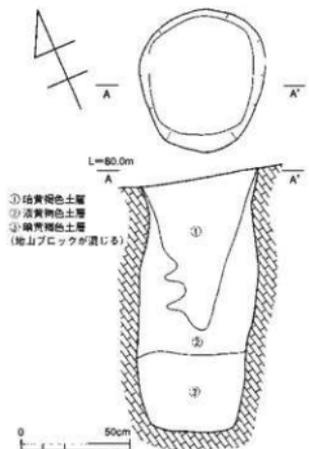
舌状平坦地の西側、土橋との境でT-1の暗黄褐色土層から出土した皿形の杯の口縁部片で、法量は推定で口径約10cm、底径約9.2cm、器高約2.5cmを測る。口縁部片のため底部に回転糸切り痕があるかどうかはわからないが、口縁部は外反するため、B地点出土の須恵器(第29図)と同じ器形のものと思われる。

#### ②須恵器 (第40-2図)

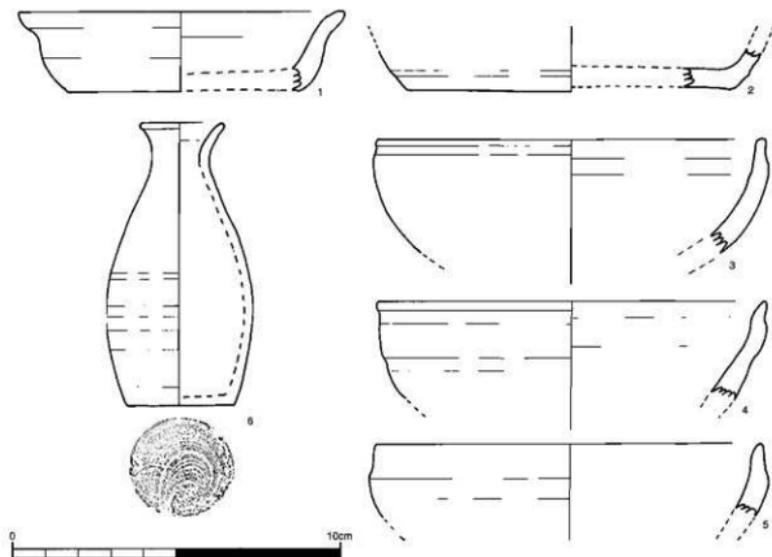
舌状平坦地の北側、明黄褐色土層(遺物包含層)から出土した皿形の杯の底部片で、法量は推定で底径約10cmを測り回転糸切り痕が見られる。調整は横ナデ、胎上は緻密で、焼成は良好である。



第37図 藤ヶ谷遺跡C地点SK-02実測図



第38図 藤ヶ谷遺跡C地点SK-03実測図



第40図 藤ヶ谷遺跡C地点出土遺物実測図

③須恵器 (第40-3図)

舌状平坦地の北側、緩やかな斜面の第2層の遺物包含層である明黄褐色土層から出土した碗形の坏の口縁部片で、法量は推定で口径約12cmを測る。口縁部外面には段差があり、外反せずそのまま立ち上がる。調整は横ナデ、胎土は緻密で、焼成は良好である。

④須恵器 (第40-4図)

舌状平坦地の北側、緩やかな斜面の第2層の遺物包含層である明黄褐色土層から出土した碗形の坏の口縁部片で、法量は推定で口径約12cmを測る。口縁部外面と体部に段差があり、わずかに外反する。せずそのまま立ち上がる。調整は横ナデ、胎土は緻密で、焼成は良好である。

⑤須恵器 (第40-5図)

舌状平坦地の北側、緩やかな斜面の第2層の遺物包含層である明黄褐色土層から出土した碗形の坏の口縁部片で、法量は推定で口径約12cmを測る。口縁部外面には段差があり、外反せずそのまま立ち上がる。調整は横ナデ、胎土は緻密で、焼成は良好である。

⑥施釉陶器 (第40-6図)

舌状台地の南側の第2層の暗赤黄色土層から出土した小形のミニチュアの徳利である。口径2.8cm、底径3.2cm、器高8.8cmを測り、ロクロ成形で底部には回転糸切り痕が見られる。表面には暗茶褐色系の釉がかかっており、胎土は緻密で赤褐色を呈し、焼成は良好である。おそらく近世以降に祭祀に使用したものと考えられる。

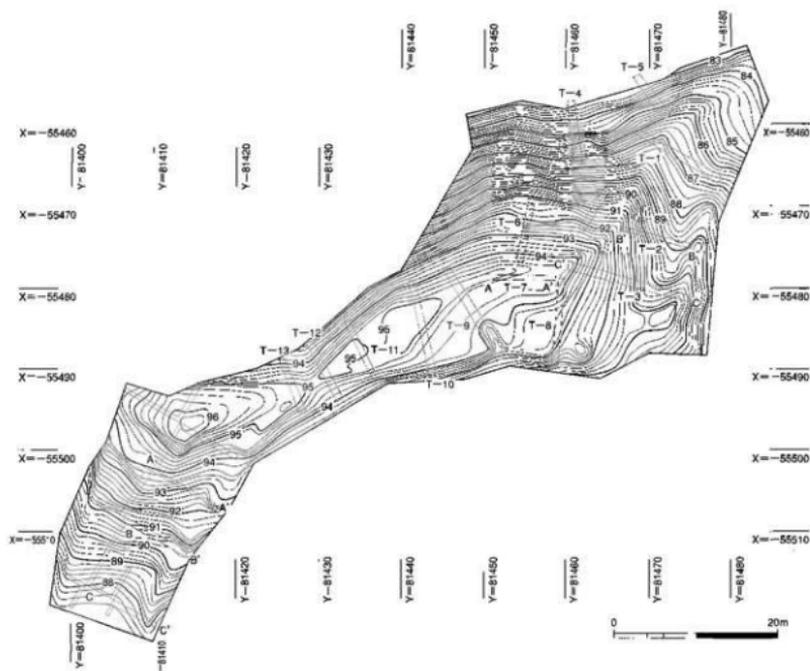
### (5) D地点

本地点は遺跡内の中央からやや西北寄りに位置し、標高は84m～96m、南北70m×東西80m、尾根上平坦地と斜面からなり、尾根上平坦地と斜面の合わせて約1700m<sup>2</sup>の調査を行った。本地点の四方は急斜面であり、独立丘陵状になっている。頂上部の平坦地には南北両側にそれぞれ1カ所づつ小丘陵があり、そこからの眺望は非常によく、北側に天狗山、南側に松江城、宍道湖などが一望できる。調査は上に北向き斜面、尾根上平坦地、南向き斜面の3つに分けて行った。

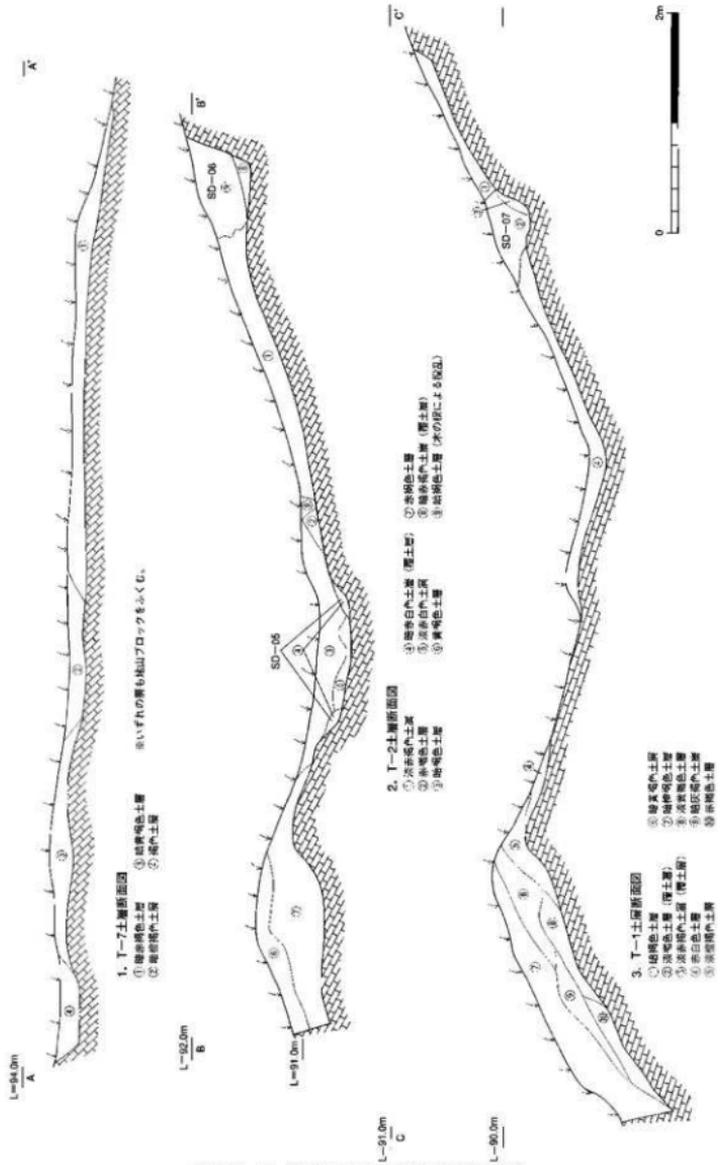
北向き斜面は標高84m～94m、東西35m以上、南北約20mを測る。その斜面の東側、南北13m、幅4mの範囲は両側が盛り上がり、中央部は谷状になっており、通路のようにになっている。東側の盛り上がりは長さ約7m、幅50cm、高さ30cm、西側の盛り上がりは長さ約13m、幅約50cm、高さは約30cmの小土塁状の高まりがそれぞれ見られた。

南向き斜面は標高88m～96m、南北40m、東西16mあり、調査前の段階で、東側は長さ約30m、幅約30cm、高さ30cm、西側は長さ10m前後、幅約30cm、高さ約20cmを測る小高い小土塁状の高まりがそれぞれ見られた。

尾根上平坦地は標高94m～95m、北東-南西に細長く、幅約10mで、調査前にすでに表面の所々岩



第41図 藤ヶ谷遺跡D地点調査前地形測量図及び調査区設定図



1. T-1土層断面図  
 ① 埋土層  
 ② 埋土層  
 ③ 埋土層  
 ④ 埋土層  
 ⑤ 埋土層  
 ⑥ 埋土層  
 ⑦ 埋土層  
 ⑧ 埋土層  
 ⑨ 埋土層  
 ⑩ 埋土層  
 ⑪ 埋土層  
 ⑫ 埋土層  
 ⑬ 埋土層  
 ⑭ 埋土層  
 ⑮ 埋土層  
 ⑯ 埋土層  
 ⑰ 埋土層  
 ⑱ 埋土層  
 ⑲ 埋土層  
 ⑳ 埋土層  
 ㉑ 埋土層  
 ㉒ 埋土層  
 ㉓ 埋土層  
 ㉔ 埋土層  
 ㉕ 埋土層  
 ㉖ 埋土層  
 ㉗ 埋土層  
 ㉘ 埋土層  
 ㉙ 埋土層  
 ㉚ 埋土層  
 ㉛ 埋土層  
 ㉜ 埋土層  
 ㉝ 埋土層  
 ㉞ 埋土層  
 ㉟ 埋土層  
 ㊱ 埋土層  
 ㊲ 埋土層  
 ㊳ 埋土層  
 ㊴ 埋土層  
 ㊵ 埋土層  
 ㊶ 埋土層  
 ㊷ 埋土層  
 ㊸ 埋土層  
 ㊹ 埋土層  
 ㊺ 埋土層  
 ㊻ 埋土層  
 ㊼ 埋土層  
 ㊽ 埋土層  
 ㊾ 埋土層  
 ㊿ 埋土層

2. T-2土層断面図  
 ① 埋土層  
 ② 埋土層  
 ③ 埋土層  
 ④ 埋土層  
 ⑤ 埋土層  
 ⑥ 埋土層  
 ⑦ 埋土層  
 ⑧ 埋土層  
 ⑨ 埋土層  
 ⑩ 埋土層  
 ⑪ 埋土層  
 ⑫ 埋土層  
 ⑬ 埋土層  
 ⑭ 埋土層  
 ⑮ 埋土層  
 ⑯ 埋土層  
 ⑰ 埋土層  
 ⑱ 埋土層  
 ⑲ 埋土層  
 ⑳ 埋土層  
 ㉑ 埋土層  
 ㉒ 埋土層  
 ㉓ 埋土層  
 ㉔ 埋土層  
 ㉕ 埋土層  
 ㉖ 埋土層  
 ㉗ 埋土層  
 ㉘ 埋土層  
 ㉙ 埋土層  
 ㉚ 埋土層  
 ㉛ 埋土層  
 ㉜ 埋土層  
 ㉝ 埋土層  
 ㉞ 埋土層  
 ㉟ 埋土層  
 ㊱ 埋土層  
 ㊲ 埋土層  
 ㊳ 埋土層  
 ㊴ 埋土層  
 ㊵ 埋土層  
 ㊶ 埋土層  
 ㊷ 埋土層  
 ㊸ 埋土層  
 ㊹ 埋土層  
 ㊺ 埋土層  
 ㊻ 埋土層  
 ㊼ 埋土層  
 ㊽ 埋土層  
 ㊾ 埋土層  
 ㊿ 埋土層

3. T-1土層断面図  
 ① 埋土層  
 ② 埋土層  
 ③ 埋土層  
 ④ 埋土層  
 ⑤ 埋土層  
 ⑥ 埋土層  
 ⑦ 埋土層  
 ⑧ 埋土層  
 ⑨ 埋土層  
 ⑩ 埋土層  
 ⑪ 埋土層  
 ⑫ 埋土層  
 ⑬ 埋土層  
 ⑭ 埋土層  
 ⑮ 埋土層  
 ⑯ 埋土層  
 ⑰ 埋土層  
 ⑱ 埋土層  
 ⑲ 埋土層  
 ⑳ 埋土層  
 ㉑ 埋土層  
 ㉒ 埋土層  
 ㉓ 埋土層  
 ㉔ 埋土層  
 ㉕ 埋土層  
 ㉖ 埋土層  
 ㉗ 埋土層  
 ㉘ 埋土層  
 ㉙ 埋土層  
 ㉚ 埋土層  
 ㉛ 埋土層  
 ㉜ 埋土層  
 ㉝ 埋土層  
 ㉞ 埋土層  
 ㉟ 埋土層  
 ㊱ 埋土層  
 ㊲ 埋土層  
 ㊳ 埋土層  
 ㊴ 埋土層  
 ㊵ 埋土層  
 ㊶ 埋土層  
 ㊷ 埋土層  
 ㊸ 埋土層  
 ㊹ 埋土層  
 ㊺ 埋土層  
 ㊻ 埋土層  
 ㊼ 埋土層  
 ㊽ 埋土層  
 ㊾ 埋土層  
 ㊿ 埋土層

第42図 藤ヶ谷遺跡D地点北側斜面遺構配置図

### (5) D地点

本地点は遺跡内の中央からやや西北寄りに位置し、標高は84m～96m、南北70m×東西80m、尾根上平坦地と斜面からなり、尾根上平坦地と斜面の合わせて約1700m<sup>2</sup>の調査を行った。本地点の四方は急斜面であり、独立丘陵状になっている。頂上部の平坦地には南北両側にそれぞれ1カ所ずつ小丘陵があり、そこからの眺望は非常によく、北側に大狗山、南側に松江城、六道湖などが一望できる。調査は主に北向き斜面、尾根上平坦地、南向き斜面の3つに分けて行った。

北向き斜面は標高84m～94m、東西35m以上、南北約20mを測る。その斜面の東側、南北13m、幅4mの範囲は両側が盛り上がり、中央部は谷状になっており、通路のようにになっている。東側の盛り上がりは長さ約7m、幅50cm、高さ30cm、西側の盛り上がりは長さ約13m、幅約50cm、高さは約30cmの小土塁状の高まりがそれぞれ見られた。

南向き斜面は標高88m～96m、南北40m、東西16mあり、調査前の段階で、東側は長さ約30m、幅約30cm、高さ30cm、西側は長さ10m前後、幅約30cm、高さ約20cmを測る小高い小土塁状の高まりがそれぞれ見られた。

尾根上平坦地は標高94m～95m、北東-南西に細長く、幅約10mで、調査前にすでに表面の所々岩



第41図 藤ヶ谷遺跡D地点調査前地形測量図及び調査区設定図

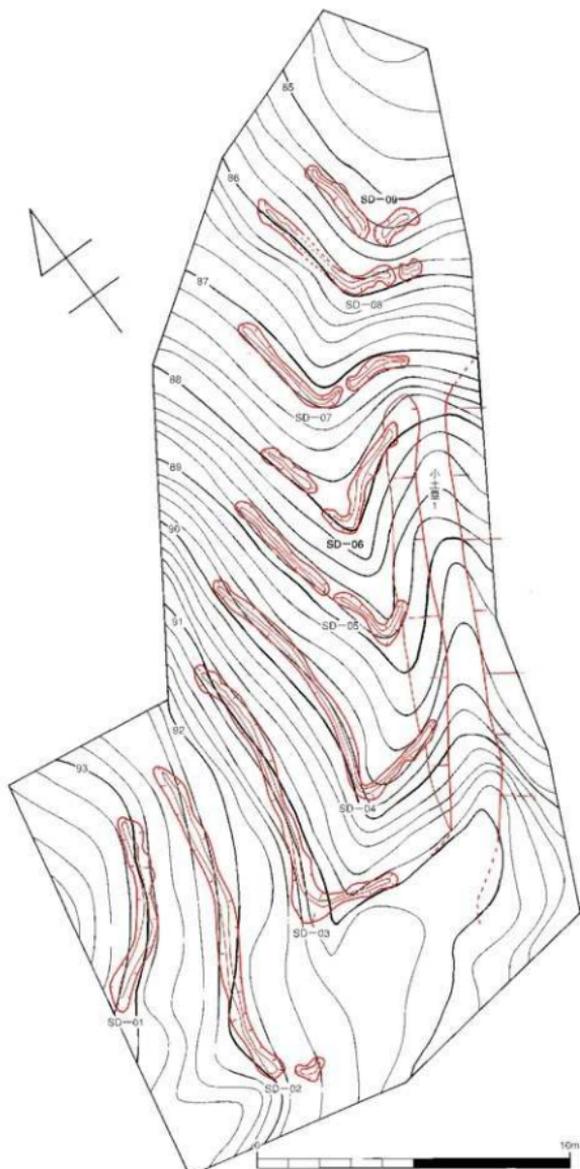
肌が見えていた。

調査は調査区内の各所にトレンチを設定し、遺構の有無の確認を行った。

調査の結果、北向き斜面の東側の谷状の地形から溝状遺構が検出され、小土塁と思われる遺構が確認された。南向き斜面からも小土塁と思われる遺構が検出され、斜面から須恵器の破片が出土した。

#### ○遺構

北向き斜面から検出された溝状遺構は通路状地形から7条、小丘陵斜面から2条の合計9条検出された。規模は長さ4.6m～12m、幅22cm～112cm、深さ10cm～36cmを測る。これらの溝状遺構は等高線に沿うようにほぼ1m間隔で、平面形は尾根の斜面から検出されたものが斜面に向かってV字形を呈し、小丘陵斜面から検出されたものは丘陵斜面に沿うようにカーブしている。断面形はL字形、V字形、逆台形などさまざまである。斜面の傾斜の角度がきつい斜面の上方(南側)ほど、規模は長く頑丈に造っているのに対して、傾斜の角度が緩く

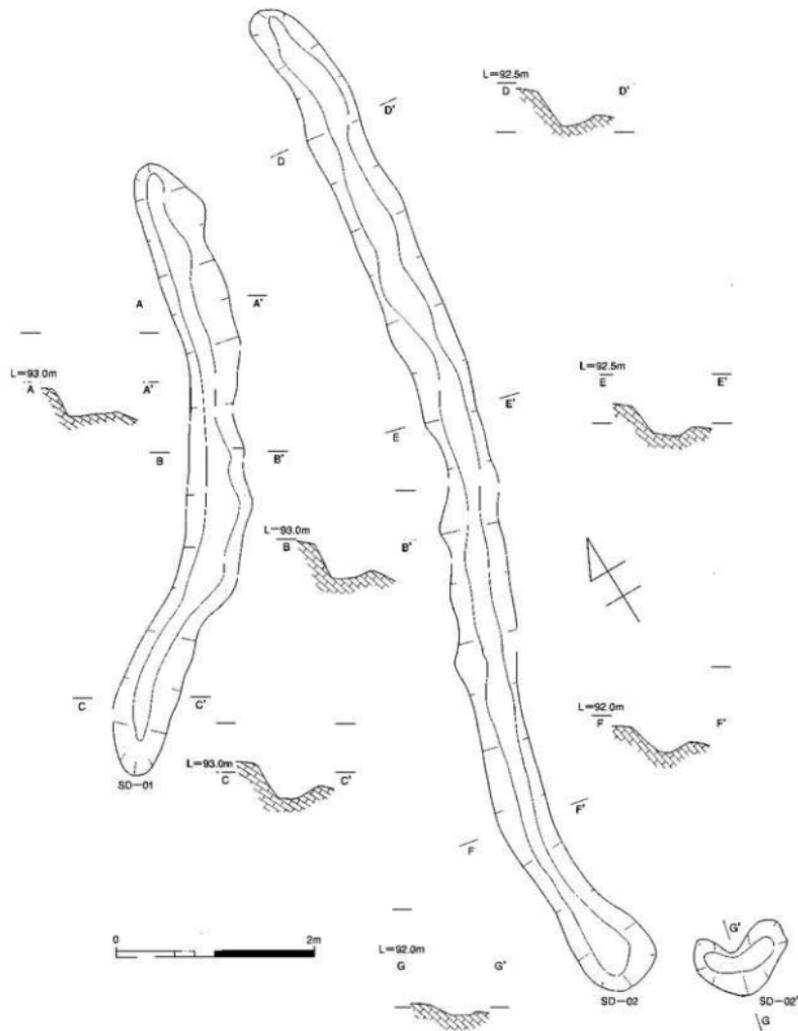


第43図 藤ヶ谷遺跡D地点北側斜面セクション

平坦地に近くなる下方（北側）ほど短く形が明確でなく、規模は短くなる傾向がある。

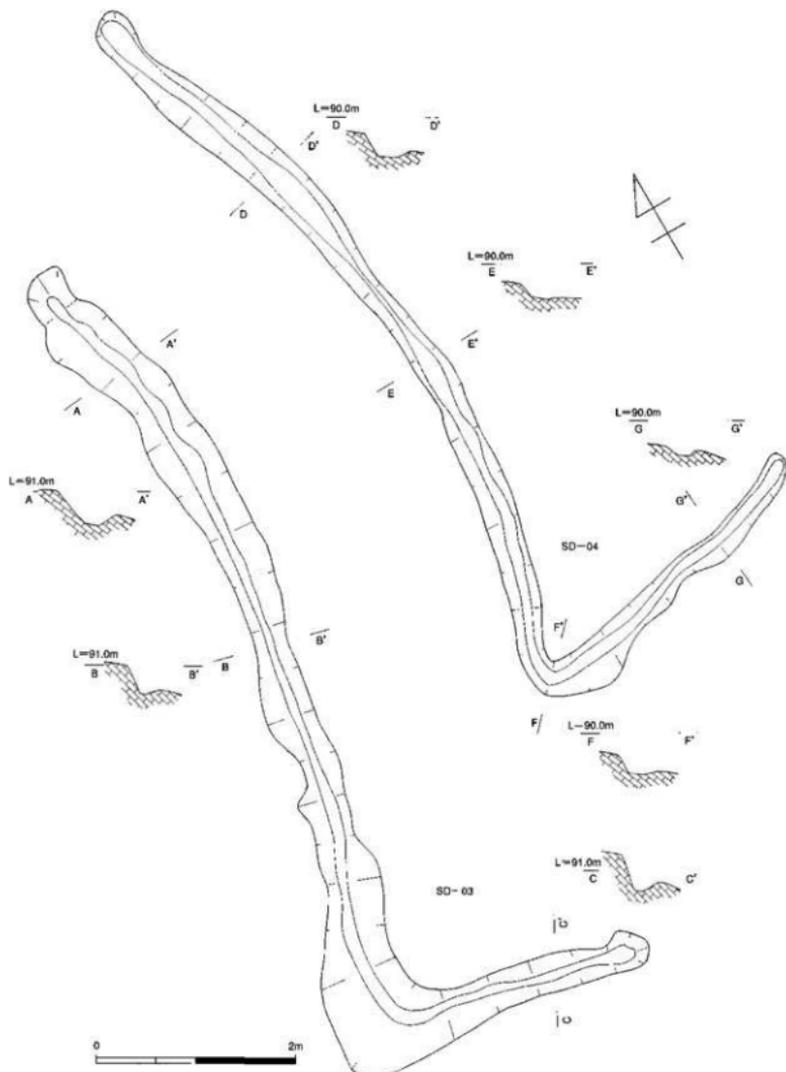
①SD-01（第44図、図版19）

SD-01は小丘陵頂上部から西側約1m、標高93mのところから検出され、溝状遺構の中で最も高い位置にある。規模は上端幅42cm～66cm、下端幅10cm～32cm、深さ30cm～36cm、長さ6.2mを測る。平



第44図 藤ヶ谷遺跡D地点北側斜面溝状遺構実測図（1）

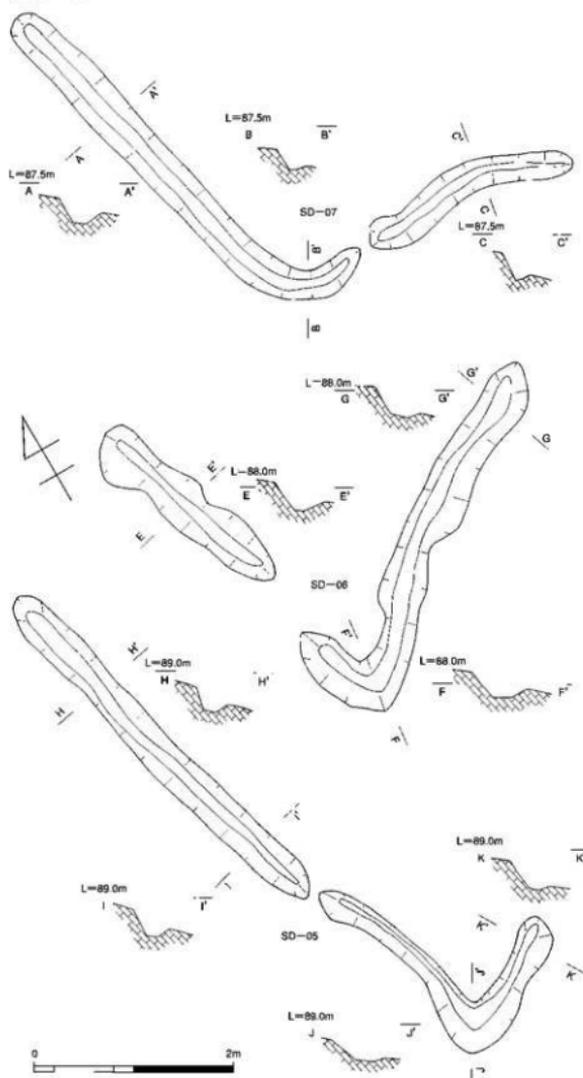
面形は直線に近いが、小丘陵斜面に沿って巡るためわずかに左にカーブする。断面形については一様ではなく、北側(A-A')は壁の低い方の肩の部分でほとんど見られずL字形を呈し、底部は平坦である。中央(B-B')は壁の低い方の肩がわずかに認められる程度であまり高さがなく、底部は平坦で



第45図 藤ヶ谷遺跡D地点北側斜面溝状遺構実測図(2)

幅広である。南側（C-C'）は壁の肩の部分明確で立ち上がりの角度が鋭く、底部は平坦で幅広である。SD-01から遺物は出土しなかった。

②SD-02



(第44図、図版19)

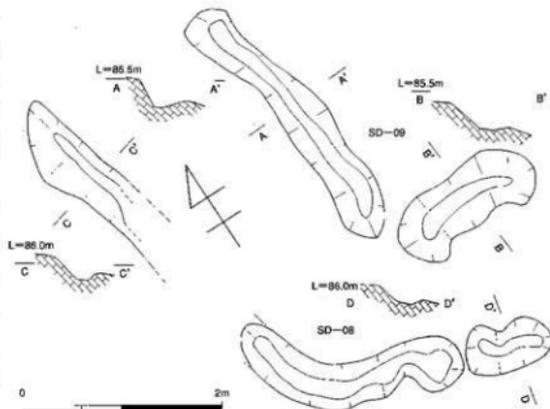
SD-02はSD-01の東側約2m、標高92mのところから検出され、溝状遺構の中で最も長い。規格は上端幅44cm～64cm、下端幅12cm～34cm、深さ10cm～36cm、長さ12mを測る。平面形は直線に近く、途中南側で約40cm程度間隔をあけて東側に方向を変える（SD-02'）。断面形はV字状で底部が極端に狭いもの（D-D'）、逆台形で底部が平坦、幅広のもの（E-E'、F-F'）がある。壁の立ち上がりは北側が鋭く、南側に行くほど角度は鈍くなる。SD-02'は平面形は不正形で、断面形は壁の立ち上がりほとんどなく平坦に近い。SD-02、SD-02'から遺物は出土しなかった。

③SD-03 (第45図)

SD-03はSD-02の東側約1m、標高91mのところから検出された。斜面から検出され

第46図 藤ヶ谷遺跡D地点北側斜面溝状遺構実測図 (3)

た溝状遺構の中で最も長い。規模は上端幅30cm～112cm、下端幅 8 cm～20cm、深さ 34cm～38cm、長さ11.8mを測る。平面形は小丘陵斜面に沿ってわずかに左にカーブし、途中東に方向を変え、斜面に向かってV字形を呈する。断面形は逆台形を呈し、両側に行くほど立ち上がりの角度は鈍く、底部の幅も狭くなる。SD-03から遺物は出土しなかった。



第47図 藤ヶ谷遺跡D地点北側溝状遺構 (SD-01～09) 実測図

④SD-04 (第45図)

SD-04はSD-03の東側約1m、標高90mのところから検出された。規模は上端幅26cm～50cm、下端幅 5 cm～24cm、深さ10cm～26cm、長さ9.6mを測る。平面形は小丘陵斜面に沿ってわずかに左にカーブし、途中東に方向を変え、斜面に向かってV字状を呈している。断面形は逆台形を呈し、両側に行くほど壁の立ち上がりは鈍くなり、高さもなくなっている。底部幅はSD-03に比べてやや幅広である。SD-04から遺物は出土しなかった。

⑤SD-05 (第45図)

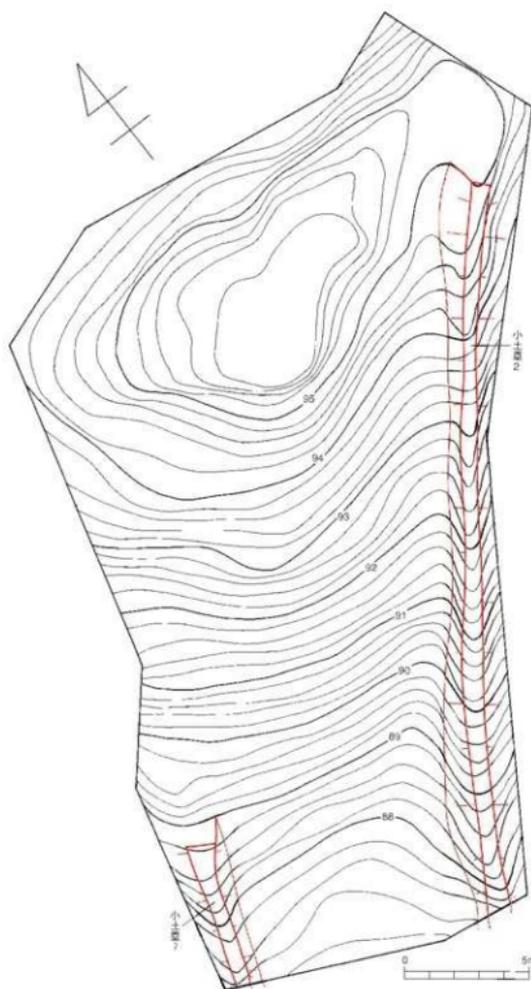
SD-05はSD-04の東側約1m、標高89mのところから検出された。規模は上端幅22cm～50cm、下端幅 4 cm～22cm、深さ20cm～28cm、長さは途中約10cm程度途切れるものの合わせて7.6mを測る。平面形はほぼまっすぐに南に向かい途中東に方向を変え、斜面に向かってはV字状を呈する。断面形はJ-J'を除いては壁の立ち上がりが鋭く、底部は平坦で幅が狭い。J-J'は壁の低い方の肩の部分があり見られず、L字状に近い。SD-05から遺物は出土しなかった。

⑥SD-06 (第46図)

SD-06はSD-05の東側約80cm、標高88mのところから検出された。規模は上端幅34cm～52cm、下端幅 8 cm～20cm、深さ28cm～34cm、長さは途中60cm程度途切れるものの、合計で6.8mを測る。平面形はほぼまっすぐに南に向かい途中東に方向を変え、斜面に向かってはV字形を呈する。断面形は壁の立ち上がりが鋭く、底部は平坦で幅広である。SD-06から遺物は出土しなかった。

⑦SD-07 (第46図)

SD-07はSD-06の東側約1m、標高87mのところから検出された。規模は上端幅30cm～40cm、下端幅 4 cm～14cm、深さ24cm～30cm、長さは途中約10cm程度途切れるものの、合計6.6mを測る。平面形はほぼまっすぐに南に向かい途中東に方向を変え、斜面に向かってはV字形を呈する。断面形は壁の立ち上がりが鋭く、底部はV字状を呈するもの (B-B'、C-C')、平坦で幅広のもの (A-A') が



第48図 藤ヶ谷遺跡D地点南側斜面遺構配置図

途中東に方向を変え、斜面に向かってはV字形を呈する。断面形はA-A'の壁の立ち上がりが鋭く底部の幅も狭く、B-B'の壁の立ち上がりが鈍く底部の幅も広い。SD-09から遺物は出土しなかった。

⑩小土塁1 (第40・45図)

調査前の段階で北向き斜面の東西両側に見られた。東側は長さが約15m、幅50cm、高さ約30cmを

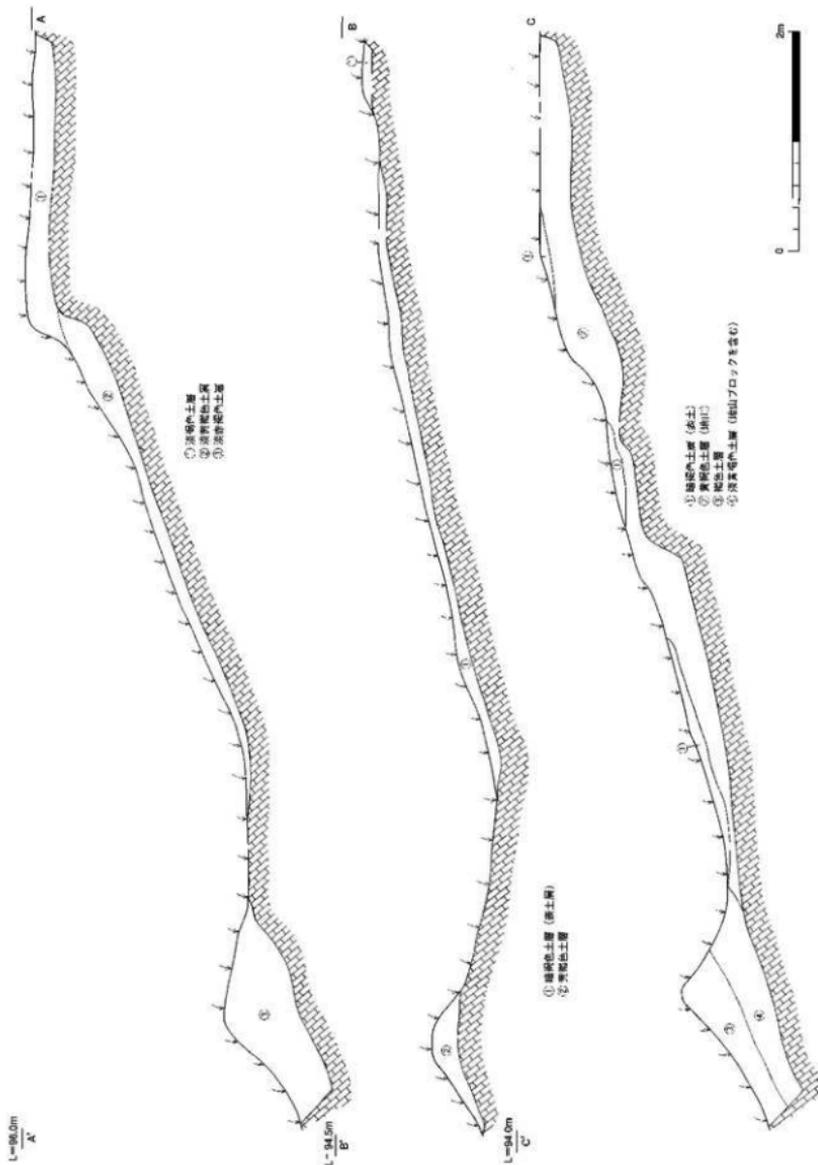
ある。SD-07から遺物は出土しなかった。

⑧SD-08 (第47図、図版)

SD-08はSD-07の東側約1m、標高86mのところから検出された。規模は上端幅30cm~60cm、下端幅10cm~30cm、深さ20cm~24cm、長さは木の根による攪乱で溝の形が壊されていたり途中10cm程度途切れるが、合計で推定約6.4mを測る。平面形はほぼまっすぐに南に向かい途中東に方向を変え斜面に向かってV字形を呈するが、他の溝状遺構に比べて形が不明確である。断面形は壁の立ち上がりは緩やかで高さもあまりない。底部は平坦で幅広である。SD-08からは遺物は出土しなかった。

⑨SD-09 (第47図、図版)

SD-09はSD-08の東側約1.4m、標高85mのところから検出され、溝状遺構の中で最も短い。規模は上端幅36cm~70cm、下端幅10cm~22cm、深さ26cm~30cm、長さは途中約10cm程度途切れるものの合計で4.6mを測る。平面形はほぼまっすぐに南に向かい



第49図 藤ヶ谷遺跡D地点南側斜面セクション図

測る。調査の結果、斜面とは異なる土層が堆積していた。斜面では表土直下が地山であり、溝状遺構は地山から掘り込まれていた。小土塁1は地山から2層にわたって約50cm堆積していた。旧表上と思われる層は確認されなかったため、詳細については不明だが、簡略的に盛られたものと思われる。

西側は調査前で、長さ約20m、幅約30cm、高さ約20cmを測った。調査の結果、表土直下が地山もしくは地山のブロックを含んだ層が堆積していたため、自然地形による隆起と思われる。

#### ①小土塁2(第45図)

南向き斜面にも同様の高まりが見られた。調査前の段階で東側は長さ30m以上、幅約50cm、高さ約30cmを測る。長さは本地点下の平坦地から尾根上平坦地にかかる斜面に続いているため推定で40m近くあると考えられる。西側は長さ20m以上、幅約50cm、高さ約10cmを測った。長さに関しては東側と同じだが、東側は尾根上平坦地まで続いているのに対して、西側は続いておらず高さも低い。

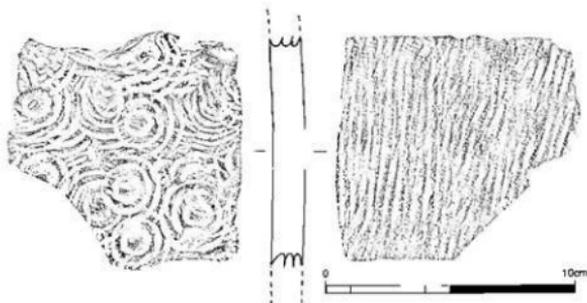
調査の結果、小土塁1と同様に斜面と異なる土層が堆積していた。斜面では表土直下が地山であり、小土塁と思われるところは地山から異なる層が2層にわたって約50cm堆積していた。旧表上と思われる層は確認されなかったため、詳細については不明である。西側は土層から小土塁と判断しにくい、状況から小土塁の一部ではないかと考える。

尾根上平坦地からは建物跡を示す遺構は検出されなかった。表土直下が地山であり、調査前に所々、岩肌が露出していた。また丘陵頂上部も同様であった。

溝状遺構も小土塁も山城における斜面の処理方法、防御施設によるものと考えられる。しかし、溝状遺構は具体的にどのように使用されていたかなど全く不明だが、通路・連絡道に関するものではないだろうか。小土塁はB地点の2・3と同様に斜面に造られており、同じ用途・目的と考えられる。

#### ○遺物(第46図)

南向き斜面の表土中から須恵器の甕の胴部片が出土した。表面にはタタキ痕、裏面には当具痕が見られる。



第50図 藤ヶ谷遺跡D地点南側斜面出土遺物実測図

## (6) E地点

E地点は松江市西川津町字深町に所在する。

そこは真山から派生する低丘陵上に位置する標高50mから57mの緩斜面で、周囲は調査区北西の一部を除いて急峻な崖になっている。地山が浅いため耕作には適さず、近年まで松茸山として管理されていた。

当初は地形的に不自然な凹凸がみられたため古墳関連の遺跡が想定されていたが、約700m<sup>2</sup>について発掘調査を実施したところ、古墳関連ではない人工的な土木工事の痕跡が確認できた。遺物は全く出土せず、土木工事がおこなわれた時期は確定できないが、周辺の遺跡との関連から、山城に関連する遺構と考えて調査を進めることにした。しかし、E地点は周囲の丘陵に阻まれているため眺望はいたって不良である。しいて言えば、北東方向の平地が一部見渡せ、南方には間近にF地点の山城、西方には犬狗山の山城を仰ぎ見ることができる。

調査方法は、全面表土剥ぎをおこない、不自然な地形にはトレンチをいれて土層観察をおこなうこととした。以下でその結果を述べる。

### ○遺構

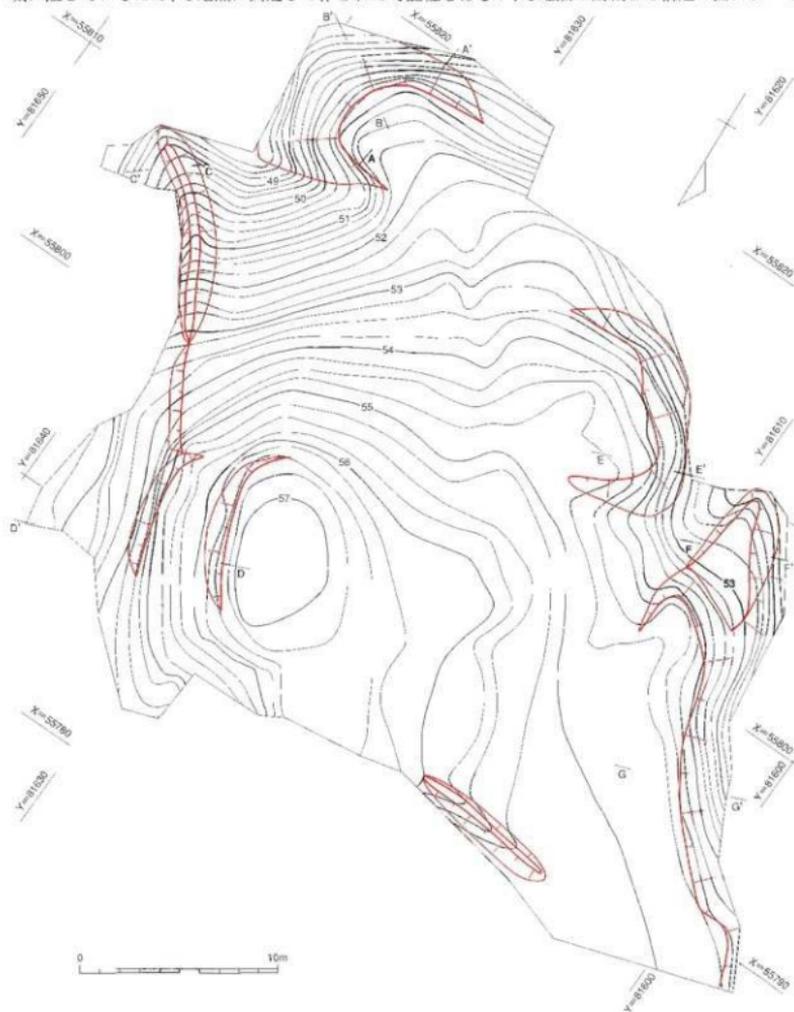
調査区南側には谷に降りる急勾配な道があり、その谷に向かって右側には頂部約2×2m、比高2.5mの高まりがあり、A-A'、B-B'のトレンチを入れたところ、約1mの盛土層を確認した。盛土は地山の小ブロックを含む粘質の無い褐色土単層で、谷から上がってくる道に対して横矢的な役割を持つ施設があったのではないかと考えられる。盛り土上にピット等は検出できなかったが、盛り土とともに流出した可能性が大きい。また、谷に向かって左側には低い土塁状の低い高まりがある。トレンチC-Cを観察すると、急勾配の谷道は地山をある程度人工的に削って急峻にし、左側を削り残してさらに盛り土をして上塁状の高まりとしている。したがって、ここは急峻な進入路を上塁と横矢で扶む虎口であったと考えられる。

調査区西側にも谷へ下りる道の両側に不自然な高まりがあったため、トレンチE-E'、F-F'で土層を観察した。道部分は表土直下が地山であるが、谷に向かって右側には比高0.5m～1m、長さ約8mの盛土をして土塁が検出された。この土塁は頂部の変形が顕著で、かなり流土した可能性が高く本来はもっと高さがあったものと思われる。谷に向かって左側には幅4m、張り出し2mの盛土が観察された。谷道との比高がやや低くピット等は検出されなかったが、横矢的な性格を持つ施設があったものと推定され、この場所も進入路を土塁と横矢で扶む虎口であったと考えられる。

また、最頂部から東の斜面にトレンチD-D'を掘ったところ、わずかに加工段が検出されたが、明確な平坦面は造られておらず出輪とはいえないだろう。最頂所の西側には平坦面に近い緩傾斜地が広がっており、縁辺にG-G'のトレンチを掘ったところ、緩斜面に盛土をして平坦面を広げ、崖をより急峻にしようとした痕跡がみられた。したがって、ここを何らかの施設として利用したことも考えられるが、ピットはおろか焼土や炭すら出土していないため断定することは困難である。

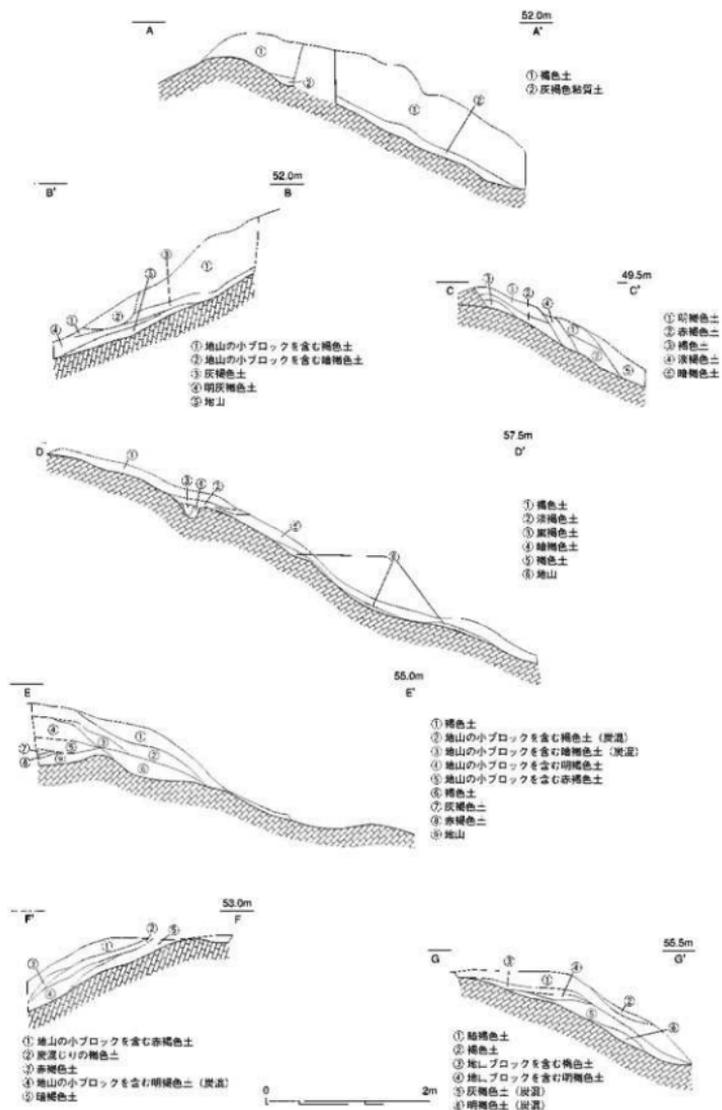
## ○小結

調査区周縁の不自然な地形についての調査成果を記したが、では、この調査区を山城関連の遺跡と考えた場合、どのような性格をもつ場所であったのであろうか。虎口と考えられる遺構は2カ所検出したのだが、この調査区とその周辺には曲輪らしい曲輪が無い。調査区北西から尾根筋道がF地点の山城に通じているため、F地点に関連して作られた可能性もあるが、F地点の山城とは構造の面において



第51図 麩ヶ谷遺跡E地点調査成果図

大きな違いがあり、両者を直接結びつけることは危険であろう。したがって、E地点の遺構を解釈するためには、藤ヶ谷城砦群の一環という大きな視野から考察していくことが必要と考える。



第52図 藤ヶ谷遺跡E地点セクション図

## (7) F地点

F地点は松江市西川津町字深町、西持田町字石橋裏に所在する。

F地点はこれまで城跡と認識されていなかったが、分布調査の段階で明瞭な曲輪の存在が確認でき(第53図)、山城の存在が明確となった。最高所は標高81.50mを測り、周囲の丘陵からは突出した高さである。南方へは菅田町方面に向けて、調査区北端から東方には調査区H地点に向け、また北方には天狗山城方面に向けて尾根道がつながっているが、そのほかは急峻な崖に囲まれており要塞にするには非常にふさわしい場所である。また、丘陵頂部に立つと、大道湖岸全城や松江市周辺が広く眺望できるほか、荒原城跡、満願寺城跡、白鹿城支城の常福寺丸跡、和久羅城跡、真山城跡、天狗山城跡といった中世の山城が一望できる。山城としては申し分の無い立地といえよう。

調査方法は、まず全面表土剥ぎをおこなって遺構を検出した。丘陵頂部の曲輪群については表土直下が岩盤に近い地山になっている場所が多く、腐土も捨て易く実に簡単な作業であったが、尾根の南側と北側の斜面は勾配が急で、小さな切り株に足をかけて鉋やじょれんを操らねばならず、不覚にも足をふみはずして2～3m下へザザーと滑り落ちる事態も少なからずあった。落ち葉等が積もっている時期では朝露や霜で足を滑らせ、また、表土を剥いで地山を露出させた段階ではさらに地山には足止めがきかず、雨や雪で表面が濡れた状態においてはとても危なくて作業は中止せざるを得ない状況であった。しかし、この作業をおこなったおかげで、山城の切岸は思っていた以上に効果があることを身をもって体験することができた。重い甲冑を付けて武器をかついでこの急斜面を上ることは至難の技であり、上の曲輪に敵兵がいればここを正面きって登ることは至難の技であったに違いない。

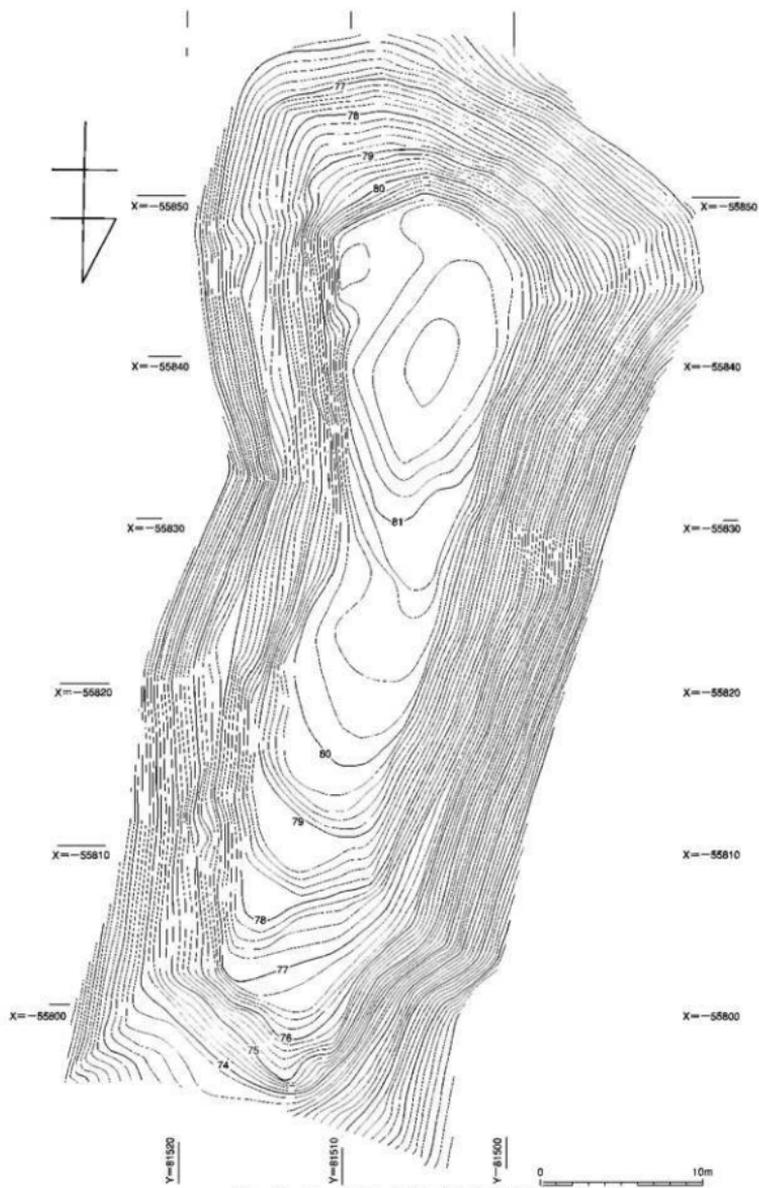
次に、東西方向に1本、南北方向に6本のトレンチを掘って土層観察をおこない、山城諸の痕跡を探った。その結果、I地点は尾根上の平坦面に7つの曲輪がほぼ1列にならぶ、東西約70m、南北約10～15mを測る、小規模な迷郭式山城であることがわかった(第54図)。また、数度の改修工事がおこなわれたこともわかった。以下でその詳細について述べる。

### ○遺構(第54図)

尾根上平坦面は、7つの曲輪がつくられている。これらはわずかな高低差によって区画されるもので、全体として1つの曲輪と把握するほうが妥当かもしれないが、ここでは一応個々の曲輪としてあつかうことにする。尾根上平坦面の南側、北側は自然地形および切岸によって急斜面となっている。

I郭は、曲輪群の中で最も高い位置にあり、標高81m前後、面積約200㎡を測る。ここはきわめて眺望が良く、面積も広いことからここを主郭と考えてよいだろう。I郭がある場所の原地形は、現状よりも標高が高かったらしく、その原地形のままの状態でも山城として利用していた時期があったかもしれないが、最終段階においては最高所に露頭する岩盤まで削り込んで平坦な曲輪を作った痕跡がみられる。そして、その上を利用して地形が低くなっているI郭東側縁辺に地山岩盤を砕いた石を多量に混ぜた土を盛り土して、I郭平坦面となっている。その結果、東接するII郭との間はほぼ垂直に落ちる切岸状となり、高低差は約2mを測る。

I郭の平坦面上には櫓列や建物等の遺構は一切検出されなかった。



第53図 勝ヶ谷遺跡F地点調査前地形測量図

ただ、I郭中央部の西端付近からは少量の炭の散乱を検出したほか、土師質土器の小片が出土した。焼上はできていなかったので、おそらく兵士たちが焚火をして暖をとりながら酒でも飲んでいたのであろう。そんなことを想像しながら遺跡に面していると一見味気ない山城に物語が生まれて楽しいものである。しかし、残念ながら、土師質土器の破片は小さすぎるうえに風化も著しく、図面化および時期の確定をすることはできなかった。

I郭より北側の曲輪Ⅱ・Ⅲ・Ⅳ・Ⅴ郭は、地山をわずかに削って段差をつけたもので、北に向かうほど標高が低く狭小な曲輪となっている。

Ⅱ郭は、I郭との高低差5～10cm、面積約120m<sup>2</sup>、中央付近の標高は80.00mを測る。曲輪上に施設があった痕跡は無く、遺物は出土しなかった。

Ⅲ郭は、Ⅱ郭との高低差約30cmで、Ⅱ郭との境の内端では段差が消えており、通路があったと考えられる。面積は約32m<sup>2</sup>、中央付近の標高は約79.50mを測る。曲輪上に施設があった痕跡は無く、遺物は出土しなかった。北接するⅤ郭との段差は約40cmで、Ⅴ郭との境界では、中央よりやや西寄りに通路が設けられている。

Ⅳ郭は、Ⅴ郭の東側に造られた三角形に近い曲輪で、Ⅲ郭との段差は約20cm、面積は8m<sup>2</sup>、中央付近の標高は約77.50mを測る。Ⅴ郭との段差は約20cmである。施設の痕跡はなく、遺物は出土しなかった。

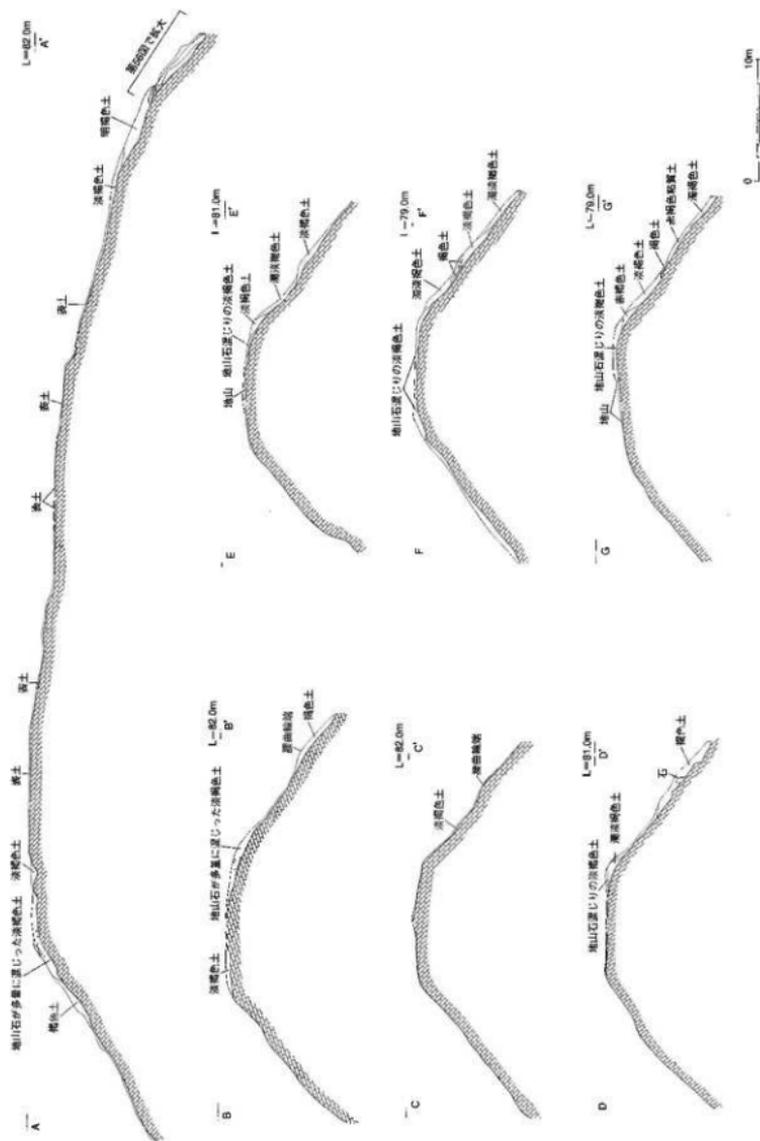
Ⅴ郭は、面積約40m<sup>2</sup>、標高76.00～78.00mを測る、緩傾斜の曲輪である。丘陵頂部の曲輪の中ではⅤ郭が一番低くなっている。ただし、この曲輪にトレンチを掘って土層観察をした結果（第56図）、曲輪の北側は盛り土によって造られており、北端には切岸状となっていた痕跡がみられた。本来はおそらく第2層がもっと高く、平坦面に近い曲輪を形成していたものが、現在ではその盛り上が流土して緩斜面の曲輪になっている可能性が考えられる。曲輪上に施設があった痕跡は無く、遺物は出土しなかった。

以上、尾根上の各曲輪について詳細を記した。全体を見わたすと各曲輪群を結ぶ通路は西寄りに設けられている。また、面積の狭いⅣ郭をわざわざⅤ郭の南東側に配置したこと、腰曲輪を東側に細長く配置していることを考え合わせると、東側斜面からの敵兵の侵入に重点を置いた築城と解釈できよう。

さて、I郭の東に位置するⅣ、Ⅴ郭はいずれも緩斜面でわずかな段差によって形成されており、明瞭な曲輪ではない。しかし、Ⅳ郭の南側には高低差約2mの切岸が作られており、このⅣ郭の入り口で南から尾根筋道を伝って侵入しようとする敵兵の侵入路を、幅の狭い1カ所に限定しようとした意図がうかがえる。したがって、明瞭な曲輪では無いにしてもⅣ郭までを山城の範囲と考えてよいであろう。

調査区北端には、尾根上曲輪群より約2.5m低いレベルに緩傾斜の曲輪、Ⅵ郭、Ⅶ郭が配置されている。これらも明瞭な曲輪ではないが、地山を削って形成したもので、南端と北端の切岸はしっかりしている。この場所はH地点から尾根筋道でつながっており、Ⅶ郭がI地点の山城の入り口にあたるため、切岸により入り口を限定したものと考えられる。また、Ⅵ郭とⅤ郭の間は急斜面であり、約2.5mの高低差をつけていることから、ここがI地点方面からの最終防衛の場所として設計されていたと考えられよう。





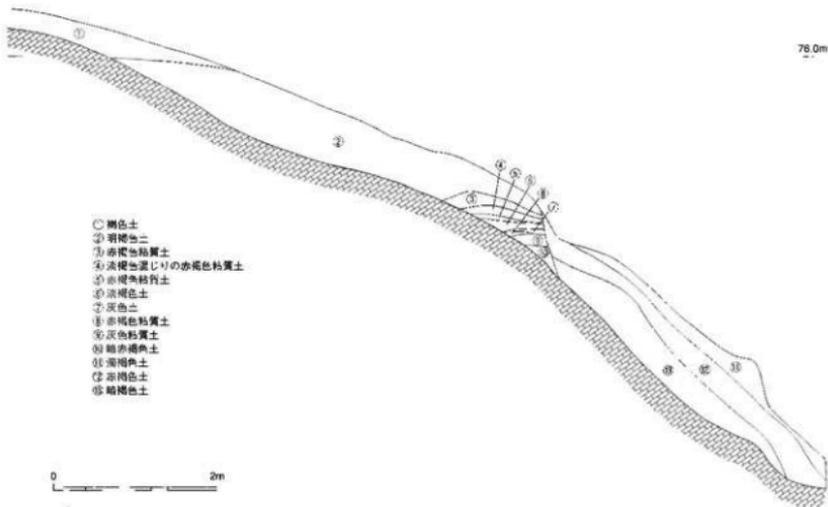
第55図 藤ヶ谷遺跡F地点セクション図

また、尾根上曲輪群の東側斜面には腰曲輪Ⅹ郭、Ⅺ郭が配置されている。この腰曲輪は尾根上曲輪群より2.5～3m下がったレベルで、Ⅹ郭は幅2m弱で長さ約14mを測り、Ⅺ郭へと続いている。普請方法は丘陵上の曲輪から下がる切岸をさらに削り、わずかな平坦面とした後に盛り上をしてより広い平坦面を形成している。施設があった痕跡は無いが、表土除去作業中にⅩ郭の中央よりやや北寄りの位置から鉛製の鉄砲弾1個が出土した。表土の腐葉上中から出たので、正確な出土場所は不明である。

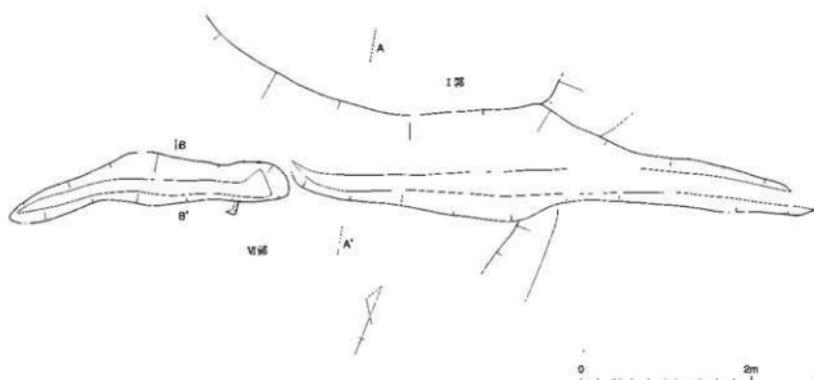
Ⅺ郭は、Ⅹ郭の北5mの地点から北方に作られている。幅1～2m、長さ約30mを測り、Ⅺ郭に続いている。普請方法はⅩ郭と同じである。施設があった痕跡は見られなかった。このⅪ郭は本来はⅩ郭と連なる一連の腰曲輪であったものが、土砂の流出により分かれてしまった可能性も考えられる。

以上、曲輪を中心に述べてきたが、そのほかの遺構としてはⅠ郭とⅡ郭の境界で堀切を検出した(第57図)。この堀切は平面距離にして東西9.4mを測るが、途中で幅約30cmを掘り残して七橋となっている。堀切の幅は70cm前後で、深さは一番深いところで50cm程度と比較的浅いものである。ただ、Ⅰ郭側に切岸状の盛り土をし(第58図)、Ⅱ郭に対するⅠ郭の比高を高くすることによって、南側の尾根筋道からの寄せ手をⅠ郭から迎撃することに効果をもたせている。

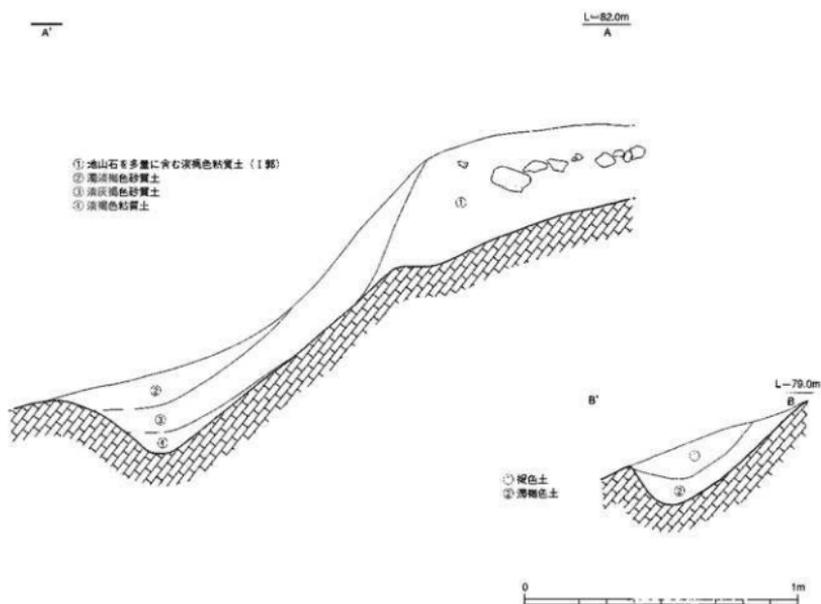
この堀切は後の改修工事によって故意的に埋め立てられており、第58図の3層が、その時の埋土である。図面には示していないが、標高の高い方から堀切内の埋土層の除去作業をおこなったところ、東方に掘り進むにつれて3層の淡灰褐色砂質土が腰曲輪Ⅹ郭の下に潜っていたことから、堀切が腰曲輪Ⅹ郭下にも延びていることがわかり、腰曲輪Ⅹ郭は堀切を埋め立てた後か、もしくは同時に盛り土をして作られていることがわかった。



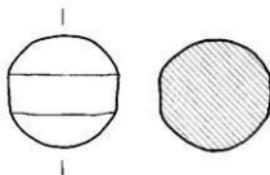
第56図 藤ヶ谷遺跡F地点A-A'ラインのA'側セクション図



第57図 藤ヶ谷遺跡F地点堀切状遺構平面図



第58図 藤ヶ谷遺跡F地点堀切状遺構セクション図



第59図 藤ヶ谷遺跡F地点出土の鉄砲弾  
(実寸大)

#### ○遺物

岡面化できた遺物は、腰曲輪Ⅹ郭から出土した鉄砲弾1個のみである(第59図)。それは鉛の鑄造品で、直径2.3cm、重さ63.5gを測る。直径から判断するといわゆる20匁で、いわゆる中筒と称される火銃銃の弾である。銃型からはみ出した部分はヤスリで1寧に削りとり、その痕跡が幅7mmの帯状となって一周めぐっている。実際に使用した痕跡は無く、変形はみられない。

#### ○小結

F地点の山城は、急峻で周囲の丘陵より突出した高さの尾根という、恵まれた自然地形に簡単な加工を施した程度の小規模な山城である。虎口にあたる場所は切岸によって進入路の幅を狭くしているだけで、周囲の急峻な地形がそのまま防壁として機能するにしても、実戦に有効な施設といえば切岸と古い時期の堀切のみである。また、曲輪内から建物や柵列等の遺構は検出されなかった。

実際に丘陵上の曲輪に立つと、冬期の強い北風を直接に受け、居座るには適していない。火を焚いた跡は1カ所のみで、炭の量も少なかったことから、兵士が常駐していたというよりも、必要に応じて詰めていたと考える方が妥当であろう。また、周囲の眺望が良いということは、言い換えれば周囲からもよく見える場所といえる。

したがって、この城の性格は、寄せ手の進入を一時的にしのぐ場所、存在を誇示して敵に威圧をあたえる場所、眺望が良いことから周囲の動きを見張る場所の3点が考えられ、決して単独で存在し得る山城とは思えない。H地点と同様、大きな視野から、白鹿城または真山城に関連する城塞群、藤ヶ谷城砦群の1要塞として解釈する必要があるだろう。

この山城の歴史については古文書に記載が無いため、最初の普請時期、改修工事の時期・回数等全く不明である。ただ、鉄砲戦が中心になってくるにしたがい腰曲輪が重視されるようになったということであれば<sup>10)</sup>、白鹿城や真山城をめぐって毛利氏と尼子氏が激しい攻防戦を開始した時期に改修工事をおこない、腰曲輪が作られた可能性が高いのではなかろうか。

#### <註>

- (1) 山根正明氏講演「白鹿城攻防戦と鉄砲」(法吉の自然と歴史を学ぶ会) 1998年3月14日

## 藤ヶ谷遺跡 遺構一覧表

地点	遺構名	種別	規模 (m)	出土遺物	共存遺構	備 考
B	小土塁 1	土塁	長さ30m以上 高さ10~20cm	なし	なし	大御山へ向かう道筋
B	小土塁 2	〃	長さ10m 高さ20~30cm	なし	なし	A地点へ向かう道筋
B	小土塁 3	〃	長さ30m 高さ20~30cm	なし	なし	C地点へ向かう道筋
B	SX-01	竪穴遺構	4.3×3.36 深さ10cm	なし	周溝(幅8~20m 深さ10cm)	南側小丘陵
C	土橋	土橋	長さ20m 高さ2m	なし	なし	旧表上面
C	SK-01	焼土塊	上端径90cm 深さ27cm	なし	なし	同じ検出面の周辺から 須恵器片が出土
C	SK-02	〃	上端径72cm 深さ59cm	なし	なし	土橋の旧表上面よりも下層
C	SK-03	土塊	上端径56cm 深さ127cm	なし	なし	土橋の旧表上面よりも下層
D	小土塁 1	土塁	長さ15m 高さ30cm	なし	なし	北側斜面
D	小土塁 2	〃	長さ20m以上 高さ10cm	なし	なし	南側斜面
D	SD-01	溝状遺構	長さ6.2m 深さ30~36cm 上端幅42~66cm 下端幅10~32cm	なし	なし	北側小丘陵
D	SD-02	〃	長さ12m 深さ10~36cm 上端幅44~64cm 下端幅12~34cm	なし	なし	北側小丘陵
D	SD-03	〃	長さ11.8m 深さ34~38cm 上端幅30~112cm 下端幅 8~20cm	なし	なし	北側斜面
D	SD-04	〃	長さ9.6m 深さ10~26cm 上端幅26~50cm 下端幅 5~24cm	なし	なし	北側斜面
D	SD-05	〃	長さ7.6m 深さ20~28cm 上端幅22~50cm 下端幅 4~22cm	なし	なし	北側斜面
D	SD-06	〃	長さ6.8m 深さ28~34cm 上端幅34~52cm 下端幅 8~20cm	なし	なし	北側斜面
D	SD-07	〃	長さ6.6m 深さ24~30cm 上端幅30~40cm 下端幅 4~14cm	なし	なし	北側斜面
D	SD-08	〃	長さ6.4m 深さ20~24cm 上端幅30~60cm 下端幅10~30cm	なし	なし	北側斜面
D	SD-09	〃	長さ4.6m 深さ26~30cm 上端幅36~70cm 下端幅10~22cm	なし	なし	北側斜面
F	堀切	堀切	長さ9.4m 深さ50cm	なし	なし	幅約30cmの上橋あり 腰曲輪造成の際に埋まる

### 3. 考 察

#### (1) 大佐遺跡

大佐遺跡は計11基の埋葬施設が確認された。これらの埋葬施設は4つのグループに分類することができる。

- ①木棺墓グループ…実際は木棺が出土していないので正確には“木棺を使用したと思われるグループ”であり、丘陵頂上部から検出した4つの埋葬施設（SK-01～04）である。これらの埋葬施設は外見から中心となる埋葬施設を判断できないが、内部構造から粘土床を持つもの（SK-01・02）、明確な粘土床ではないが粘土で棺を安置させるもの（SK-03）、ほとんど粘土が認められなかったもの（SK-04）がある。

SK-01～03は1.5m～2.6m前後の丸太材を半裁して削り抜いた棺身、棺蓋をもつ割竹形木棺が使用されたと思われるが、前期古墳に見られるような長大な木棺は使用されていない。また首長墓のように一つの墓域に一つの埋葬施設があるのではなく、一つの墓域に埋葬施設が規則的に並んでいるということは計画的につくられたと考えられ、家族的な様相をうかがわせる。SK-04は木棺らしき痕跡は検出されず、他の埋葬施設とは異なるため実際に埋葬されたかどうか疑わしい。仮に丘陵頂上部の埋葬施設に優位性があるとすれば漆塗製品が出土したSK-01と赤色顔料が検出されたSK-02だろう。

- ②上器棺グループ…丘陵頂上部から検出されたSX-01・02である。SX-01は単独で、SX-02は2個体で構成され、双方とも横倒しの状態であった。SX-02は故意に打ち欠いた口縁部を蓋にしていると思われるのに対して、SX-01は故意に口縁部を打ち欠いて、蓋は木製品で消滅してしまったのではないだろうか。いずれの上器も棺として使用するにつくられたのではなく、生活品からの転用品と考えられる。

上器棺に関しては、東森氏<sup>16)</sup>、松本氏<sup>17)</sup>が報告、分類されている。それを参考にしながら近年のいくつかの上器棺の出土例と比較すると、次のような特徴が考えられる。

A 複数で構成 ア、合口タイプ……同じ器種の大形上器の口縁部同上をつなぎ合わせる。そのため上器棺を埋納する土壌は平面的に大きくなる。

(例) 松江市袋尻4号墳など

……同じ器種の大形上器の一方の口縁部を故意に打ち欠いて口縁部と胴部をつなぎ合わせる。埋納する土壌は同じく平面的に大きくなる。

(例) 袋尻8号墳2・3号土器、米子市陰田60号墳第3主体部など

イ、口縁部タイプ……双方の口縁部を故意に打ち欠いてその口縁部を蓋にする。埋納される土壌はやや小さくなる

(例) 松江市大佐遺跡SX-02

B 単独で構成 ……………横倒しの状態で出土したもの。

(例) 袋尻 8 号墳 1 号土器、大佐遺跡 SX-01

……………立った状態で出土したもの

(例) 鹿島町奥才 13 号墳

このように埋葬形態が異なるのは被葬者によるものではないだろうか。規模によって幼児・小児・青年といった具合に分ける説もある<sup>11)</sup>。いずれも人骨が出土していないため埋葬施設であると断言しにくい。土器を使った木成人の埋葬方法ではないだろうか。

- ③石棺墓グループ…丘陵西側緩斜面から検出された SK-08 と丘陵東側斜面から検出された SK-09 である。SK-08 は石蓋土壇で 5 枚の蓋石を使用している。土壇内の北側は地山を加工しているのに対して南側は地山の塊 (石) を加工して墓壇の形を作っている。また西側からはノミ痕 (?) のある石が出土している (図版 7) がどのように使われたかは不明である。SK-09 は組み合わせ式の箱式石棺である。蓋石には 20 枚程度の石が、側石には 10 枚の石が使用されているが、底石は認められなかった。

松江市西持田町小丸山 1 号墳からも同様の箱式石棺が検出されている。小丸山 1 号墳の石棺墓の内法で 1.2m×0.2m×0.2m を測り<sup>12)</sup>、両遺跡とも棺内外に遺物はなく底石がない点など類似するところが多く、山本清氏の分類の IA 類に属する<sup>13)</sup>。検出状況が類似していることや位置的にも近いことから (第 4 図参照)、両遺跡の被葬者は関係があったのではないだろうか。

- ④上墳墓グループ…西側平坦面で検出された SK-05～07 である。SK-05・06 はテラスをつくりたり石を置く点など類似点が多く、同一集団が埋葬されていた可能性が考えられる。

このように本遺跡は同じ尾根筋に複数の墓域が存在する。なかでも丘陵頂部の墓域は地山整形の加工痕跡は不明だが、外観や地形測量などから長方形プランと思われ、“方形台状墓”と考えられる。台状墓とは弥生時代から見られる墓制の一つで、地山整形や丘陵を切断する溝や墳頂に平坦面をつくる。遺存状況から盛土がないものが多く、近畿地方から瀬戸内地方まで広い範囲で確認されている。

北近畿地方の台状墓でも土器棺を伴うものもあり、弥生時代の首長墓に移行する以前の“家族墓”的性格の墓制と考えられており<sup>14)</sup>、同地域では弥生時代の特徴的な墓制である。しかし本遺跡と比較すると土器棺の様相や副葬品が多く出土する点で異なるため、はっきりと同地域の影響と言い切れない。

本遺跡は弥生時代の家族墓的性格を持ちながら特定の集団を埋葬したと考えられる。つまり特定の個人を埋葬したのではなく、特定の家族を埋葬し、周辺に墓域には同一集落内での別の集団が埋葬されたと思われる。土器棺や箱式石棺墓などは松江市周辺では古墳時代前期に多く見られる墓制も存在している。また土器棺Ⅱに使用された土器は底部が平底で、厳密成形のあと磨き調整が施されている。このような器形や技法の特徴はこの周辺では見られず、近畿地方からの影響と考えられるが、時期については庄内Ⅳ期～布留Ⅰ期に相当すると考えられるため、時間的には弥生時代終末から古墳時代前期と思われる。

このように本遺跡は他地域からの影響と弥生時代の墓制から古墳時代の墓制へと変わりゆく過渡期の遺跡と考えられる。

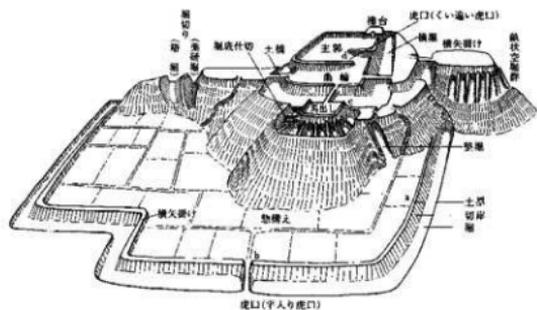
## (2) 藤ヶ谷遺跡

城はその用途・目的に応じて以下のように分類される。

- ①本城…一城内の中心となりうる曲輪の意味と一定区域内の在地支配の中心となる城（大根城）の2通りの意味がある。
- ②枝城…本城に対して間接的な城、「濠城」とも言う。
- ③伝えの城…情報伝達を目的とした見晴らしのよい山上や舌状丘陵先端部に築城する。
- ④繋ぎの城…軍勢移動に伴う駐屯地的な城のこと。
- ⑤境目の城…敵と隣接する領国境線上や進攻を目的とした最前線基地に築城した城のこと。
- ⑥付け城…本城に付属する城砦のこと。「川城」とも言う。
- ⑦陣城…敵地に侵攻した際、城攻めや合戦時に臨時的に築く城のこと。

また個々の用語については以下のとおりである

- ①曲輪…郭とも書く。城を構成する区画のこと。兵法で「円形の徳」（最大面積を広く、防御ラインを最小限にする）から「曲輪」・「廻輪」の文字を使う。「郭」は近世に入ってから使用される。漢字の用例としては内城外郭といって、城が二重以上になっている場合に、その内側を「曲輪」、外側を「郭」を用いる。「丸」は1590年以降多く用いられる。
- ②土塁…「土居」とも言う。城郭の防御壁であり、攻撃台にもなる。一般的には「敵き土塁」「版築土塁」などの上法がある。
- ③土橋…曲輪を結ぶ橋のことである。馬踏（土橋上の平場）を通路とするもの、馬踏上に掛橋を作るもの、中央部を切り開いて水貫きとするものなどがある。
- ④腰曲輪…丘陵斜面に削平された平坦地のこと。丘陵頂上部の曲輪への直接攻撃を遮断したり、移動に使用したりする。
- ⑤堀切…平坦地や峰を遮断する目的で掘られた直線的な堀のこと。
- ⑥虎口…城の出入り口を表す。「小口」とも書く。曲輪の配置の中で最も重要なのが「虎口」の配置とされている。



第59図 山城の主な名称（『城館調査ハンドブック』による）



の拠点となった。元亀元年（1570年）布部山の戦いにおいて尼子側が大敗し、尼子側が出雲出陣後、再び毛利氏が家臣を入城させる。廃城は恐らく慶長5年（1600年）の関ヶ原の合戦以降、毛利氏がこの地を離れた頃と考えられる。

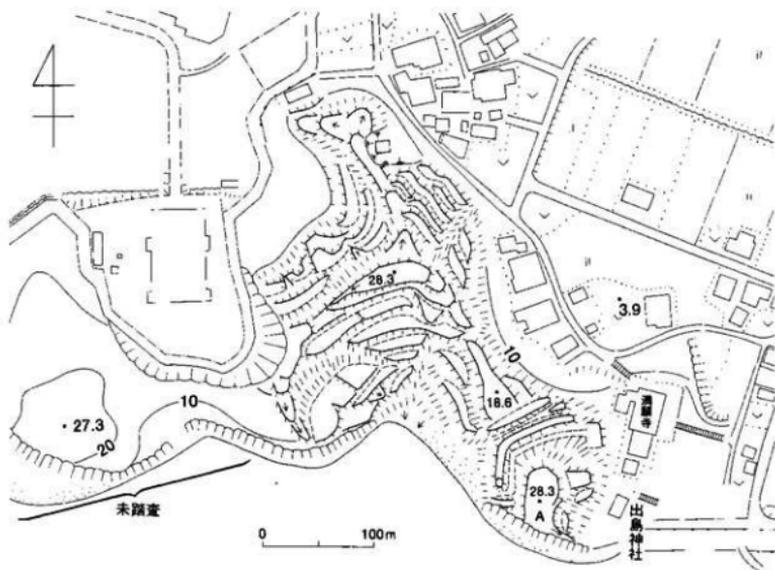
遺構は頂上部に曲輪を築いている。また野面積みの石垣が見られる。

- ③荒隈城（第64図）…洗合城・洗骸城とも書く。松江市の中心街のやや西側、現在の南平台地周辺にあたり、宍道湖沿いの荒隈山の丘陵上に位置する。永祿5年（1562年）に毛利元就が尼子攻めの際、前線基地として築城し、白鹿城攻略後、宮田城陥落まで使用していた。

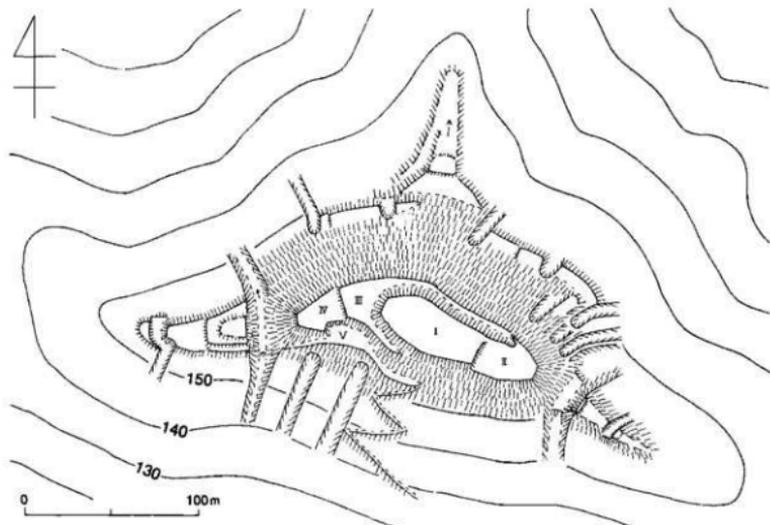
昭和42年・55年に発掘調査が行われ、階段状遺構（離壇状阻害）のや獨立柱建物跡などが検出され、輪花青磁小皿や白磁大皿などの輸入陶磁器やかわらけや耳形土器などの土質土器などが出土し、他にも古銭や和鏡なども出土した。

- ④満願寺城（第65図）…松江市の西側、現在の満願寺・警察学校周辺にあたり、宍道湖沿いの丘陵上に位置する。城主は尼子氏の家臣、湯原氏で大永元年（1522年）に築いたとされる。宍道湖沿いという地理的環境から水軍もしくは水運の重要拠点であったと考えられる。塩冶興久の乱では激戦地となったとされ、毛利氏が荒隈城にはいると湯原氏は毛利氏の傘下に入り、毛利水軍の一員として活躍する。その後尼子復興戦においてこの城を巡って争奪戦を繰り広げる。このように毛利氏、尼子氏にとって重要な城の一つであった。

遺構は階段状に曲輪も設けたり、空堀などによって曲輪を区画したり、横堀なども見られる。



第65図 満願寺城略測図（『出雲・隠岐の城跡』による）



第62図 茶臼山城略測図（『出雲・隠岐の城館跡』による）

- ⑤和久羅城（第66図）…松江市の東側、嵩山の向かい側、標高263mの和久羅山に位置する。当初は尼子側の原田氏・小出氏が城主をつとめるが、富田城陥落後は毛利側の長屋氏が城主となる。尼子復興戦では再び尼子方の羽倉氏が城主となり、その後再び毛利の支配下に入る。

遺構は頂上部に曲輪を築き、虎口なども見られる。

- ⑥末次城（第67図）…松江市の中心、現在の松江城がある亀田山にあったという説と荒隈山につながる幸魂山にあったという説がある。築城は鎌倉時代に佐々木氏によって築かれたとされる。天文3年（1534年）の塩冶興久の乱では興久がこの城を攻め、天文12年（1543年）の太内氏による尼子攻めでは大内方の河津民部左衛門久家がこの城に拠って尼子晴久の手勢によって滅ぼされる。元亀元（1570年）尼子復興戦では尼子方が真山城を拠点とした際にこの付近に土塁を築いたとされる。布部山の戦い後はいったんこの城に籠もるが吉川元春に攻められて真山城まで退却する。

亀田山は慶長5年（1600年）関ヶ原の合戦以後、堀尾吉晴が浜松から出雲に人国し、慶長12年（1607年）本拠地を月山富田城から松江に移し松江城を築いた。

- ⑦茶臼山城（第68図）…松江市の南側、標高171mの茶臼山に位置する。築城年代に関しては不明である。『雲陽軍実記』にはこの付近を毛利軍が通過したとあり、村井伯耆守の拠った城とされる。

遺構は頂上部の曲輪のほか、丘陵斜面に豎堀が見られる。

## ○歴史的背景について

藤ヶ谷遺跡は新山城に隣接し、白鹿城とも近接するためこれらの城跡とは大きな関わりがあると考えられる。つまり尼子氏と毛利氏との抗争に深く関わっているのではないかと思われる。そこで毛利氏と尼子氏との関係を若干ふれてみたい。

### 尼子氏・毛利の関連略年表

- 1458年(長祿2年) 尼子経久生まれる。
- 1467年(応仁元年) 応仁の乱始まる。
- 1484年(文明16年) 経久、富田城を迫放される。
- 1486年(文明18年) 経久、富田城に再入城。
- 1497年(明応6年) 毛利元就生まれる。
- 1526年(大永6年) 毛利元就、尼子方から大内方につく。
- 1532年(天文元年) 塩冶興久(経久の三男)の乱
- 1540年(天文9年) 郡山城合戦—尼子詮久が郡山城を攻める。
- 1541年(天文10年) 尼子久幸戦死、尼子軍、富田城に撤退する。  
経久死去(84歳)
- 1542年(天文11年) 大内義隆による富田城攻略戦、毛利氏もこれに従う。
- 1543年(天文12年) 大内氏が敗退し、指原で嫡男義持が水死し本陣に撤退する。
- 1544年(天文13年) 毛利元就の三男隆景が小早川家を相続
- 1550年(天文19年) 毛利元就の次男元春が占川家を相続。
- 1551年(天文20年) 陶隆房の乱—義隆が白刃し大内氏の滅亡する。
- 1554年(天文23年) 新宮党族滅—尼子家の軍事力の低下
- 1555年(弘治元年) 巖島合戦—毛利元就が陶隆房を倒し、旧大内領の大部分を領有する。
- 1562年(永祿5年) 尼子攻めのための拠点、荒隈城を築く
- 1563年(永祿6年) 毛利元就の長男隆元が急死。  
白鹿城が落城する。
- 1566年(永祿9年) 尼子義久が降伏し、富田城落城する。
- 1569年(永祿12年) 尼子勝久・山中鹿介らが島根半島の上陸。真山城を拠点として毛利方の城を攻略する。
- 1570年(元亀元年) 布部山の戦いで尼子方は大敗し、その後備中から出雲へ出国する。
- 1572年(元亀2年) 元就死去(75歳)
- 1578年(天正6年) 上月城の戦いで尼子勝久は自害、山中鹿介は備中で殺害される
- 1591年(天正19年) 占川広家が出雲三郡、伯耆二郡12万石を下賜され富田城に入城する。
- 1600年(慶長5年) 関ヶ原の戦いにより毛利氏は防・長2国となり、広家は周防岩国に転封。  
堀尾吉晴が遠江浜松から出雲・隠岐24万石に入国し富田城に入城する。
- 1611年(慶長16年) 堀尾吉晴が松江に城を築き、富田城は廃城となる。



### ○藤ヶ谷遺跡出土の鉄砲玉について

藤ヶ谷遺跡ではF地点の腰曲輪周辺から鉄砲弾が1個出土した。大きさは約23mm、重さが63.5gと通常城跡から出土する鉄砲弾に比べて大きい。そこで出土した鉄砲弾から若干考察してみたい。

まず山陰地方での鉄砲の使用は他地域に比べて比較的早いとされる。文献資料から天文11年(1542年)7月、尼子方の赤穴氏が大内氏の出雲侵攻の際に赤穴城の防衛に鉄砲らしきものを使用している<sup>100)</sup>。これは一般的に種子島に鉄砲が伝来する前年にあたり、どのような鉄砲を使用したのかは定かではない。鉄砲伝来に関してもさまざまな文献から最も早いもので文龜元年(1501年)、最も遅いもので弘治元年(1545年)など諸説ある。これはあくまでも西洋式火縄銃の伝来であり、中国・朝鮮では15世紀の中頃には火薬によって箭(矢)を放つ武器があり、西洋式の火縄銃が伝来する以前の当時の日本で火器の類は存在していてもおかしくはない<sup>101)</sup>。

その後、出雲地方では永禄6年(1563年)11月の白鹿城の攻防の折りに、占川元春の軍勢に多数の鉄砲による負傷者が出ていることなどから、この時期すでに大量の鉄砲を導入していたことが伺える<sup>102)</sup>。

#### ①鉄砲弾の材質について

本遺跡出土の鉄砲弾は分析結果からさまざまな不純物が微量に含まれるが、鉛製であることが判明した<sup>103)</sup>。一般的に鉄砲弾の材質は鉄製、鉛製、鉄+鉛製、鉛+青銅製、鉄+錫製などさまざまである。戦国時代においては鉄、鉛が多く使用されたようである。それぞれの特徴は以下の通りである<sup>104)</sup>。

- ・鉛は比重が重く(原子量207.19)遠く飛ぶのに対して、鉄は比重が軽く(原子量55.847)弾道が定せず射程距離も短い。
- ・鉛は融点が低く(328度)、加工がしやすいが、鉄は融点が高く加工にはかなりの技術がいる。
- ・鉛は材質が柔らかいためつぶれやすい。そのため命中して体内にはいると平たくつぶれる性質を持っているため貫通すれば傷口が大きくなり殺傷能力が高くなる。
- ・鉄は衝撃によって形態が変化せず何度も使用できる。

朝倉・乗谷遺跡では鉛製、八王子城では場所によって異なるが鉄製、鉛製<sup>105)</sup>などが使用されている。朝倉・乗谷遺跡では分析結果から鉛の産地の推定が行われ、弾丸そのものは輸入品で、弾丸の原料となる延板は国産品と考えられている<sup>106)</sup>。弾丸が輸入品と国産品と共存していた可能性があり、弾丸の材質はその地域の歴史的背景や地域の状況、流通関係を物語る資料の一つといえる。

#### ②鉄砲弾の大きさについて

藤ヶ谷遺跡出土の鉄砲弾は直径23mm、重量が63.5gであった。これを当時の匁数で換算すると約16.9匁(1匁=約3.75g)となる。当時の火縄銃の銃口径と弾径の関係は以下の通りである<sup>107)</sup>。

	銃口径	弾径		銃口径	弾径		銃口径	弾径
1匁	8.7mm	8.5mm	6匁	15.8mm	15.5mm	20匁	23.6mm	23.1mm
2匁	11.0mm	10.7mm	7匁	16.6mm	16.2mm	30匁	27.0mm	26.5mm
3匁	12.5mm	12.3mm	8匁	17.4mm	17.0mm	100匁	40.3mm	39.5mm
4匁	13.8mm	13.5mm	9匁	18.1mm	17.7mm	1貫目	86.9mm	84.2mm
5匁	14.9mm	14.6mm	10匁	18.7mm	18.3mm			

一般的に使われていたのは3匁～6匁(12.5mm～15.8mm)が最も多く、遺跡から出土する弾丸の大部分も同様である。本遺跡出土の鉄砲弾は弾径から換算すると20匁の相当と考えられ、銃口径も23.6mmとかなり大きなものとなる。それではこの弾径や銃口径からどのような火縄銃で撃たれたものなのか。当時の火縄銃の分類は以下の通りである<sup>130)</sup>。

- ・並筒(なみつづ) … 6匁以下の火縄銃。射程距離は約200mとされているが、殺傷力は約50mから。この距離だと鎧を貫通するくらいの威力がある。
- ・中筒(ちゅうづつ) … 6匁～50匁の火縄銃。射程距離400m～500m。重量があり立射ではなく膝台射撃もしくは固定して使用したと思われる。
- ・大筒(おおづつ) … 50匁以上の火縄銃。射程距離は800m～900m。台車のようなものに乗せて移動し、使用した。

このように本遺跡出土の鉄砲弾は中筒クラスの火縄銃で撃たれた可能性が高い。中筒以上となるとその重量から機動性は低く、野戦よりもむしろ攻城戦に使用された可能性が高い。本遺跡の南側、現在の東奥谷町には松江藩の鉄砲小屋があった<sup>131)</sup>とされるが、江戸時代の幕藩体制では大名家が所有する火縄銃のほとんどが並筒クラスであったことや、鳥や動物を仕留める猟銃では弾丸が大きすぎることなどからこれらの可能性は低いと思われる。

結果として鉄砲弾から詳細な時期に関する確証は得られなかったが、戦国期に攻城戦に使用されたと考えられる。そのため本遺跡が城跡で使用もしくは落とされたものではないかと思われる。

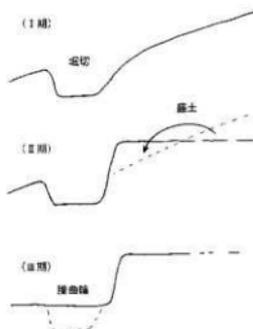
### (3) まとめ

A地点を含めたB地点はこの尾根筋の最北端であり最も高い天狗山の手前にあり、東に行くことも可能な地点である。実際に出土と想定される範囲は恐らくさらに南側に広がるとと思われる。なぜならB地点の小土塁3は南側から続いており、平坦地も続いているためである。

C地点から検出された焼土層から藤ヶ谷遺跡が山城として使用する以前にも使われていたことがうかがえる。SK-01は検出面が遺物包含層であり、その包含層から9世紀以降のものと思われる須恵器が出土している。またSK-02は上層の旧表土層よりも下層から検出されている。土層内からは遺物が出土しなかったため時期の限定はできず、どのような目的で使用されたかは不明である。

D地点から検出された溝状遺構群は斜面の等高線に沿って標高1m毎に作られている。検出された斜面は両側を小さな高まり(一方は小土塁)に挟まれた谷状の地形であり、尾根筋を往来する通路として使用された可能性が高い。それより西側斜面から検出されていないことから通路に関する斜面の処理方法の一つと考えられる。

F地点は発掘成果により使用された3時期が想定される。



第64図 藤ヶ谷遺跡F地点堀切以降の変遷模式図

I期一もともとならかな地形であり、そこに堀切を作った。堀切を作ることによって尾根伝いの通路を一時的に遮断する役目を果たしている。

II期一緩やかな斜面であった丘陵頂上部に盛土することによって頂上部を平坦に堀切の上を切岸状にした。これによって尾根伝いに丘陵頂上部を通行することができなくなり、通路を遮断するための堀切は無力化されたと思われる。また切岸状にすることによって南側からはっきりと城郭として認識できるようになり、威嚇する役目があったと思われる。この時期になると南側に意識しているような感じである。

III期一時期をおかずして堀切を埋めて腰曲輪を作ったと思われる。腰曲輪を作ることによって丘陵頂上部を通らずに丘陵斜面の中腹で通行可能となった。また腰曲輪の造成は鉄砲戦を意識し始めた時期と考えられ、鉄砲弾の出たがそのことをうかがわせる。

以上のような発掘成果から各調査地点は以下のように推測することができる。

- |                |                            |
|----------------|----------------------------|
| A地点－B地点に付属する曲輪 | B地点－A地点を含めたC地点の北側までつながる曲輪。 |
| C地点－B-D間をつなぐ   | D地点－独立した城                  |
| E地点－F地点に付属する曲輪 | F地点－E地点を含めた独立した城           |

藁ヶ谷遺跡のある尾根筋全体は次のような特徴があげられる。

第一に小土塁もしくはそれに類するような高まりが頻繁に見られることである。この小土塁の類は平坦地のみならず斜面にも見られ、脊土塁、縦土塁と呼ばれるものと思われる。普通一般的に土塁は曲輪を囲むように曲輪の周りがあるものが多いが、藁ヶ谷遺跡の場合、通路と思われるところに存在していることが多い。

しかし他の城跡にあるような土塁と比べてあまりにも低く、作り方も版築工法や敷き上げ工法のような作り方ではなく、単に土を盛ったような簡略的な作り方であったと考えられる。土塁の高さに関しては近世兵法の原則の中に「一間なれば人見え、二間なれば馬上見え、三間なれば鎧見え」とあり<sup>20</sup>、城内から見て低い土塁であっても戦闘面では有利であり、尾根頂上部の上塁が低くても麓からは尾根伝いの兵の移動は見えづらいため、多少低くても有効的であったと思われる。また築造当初はもう少し高く、簡単に土を盛っただけのため、長い年月の間に流れ落ちてしまったものと推測される。

第二にC地点以外にも上橋もしくはそれに似た遺構が数カ所確認されている。C地点が最長だが、幅は約1m～2m前後とあまり変わらない。形状的には直線的なものやカーブしたものもありさまざまである。若干異なる点は、土橋の片側もしくは両側に壁状にえぐられたような地形が見られる。いずれも曲輪間をつなぐ役割があったと考えられる。

第三に尾根頂上部だけでなくいたるところに平坦地（削平地）、曲輪を作っていることである。大規模に造成しているのではなく、周辺を削ることによって平坦にし土塁を削り出したと思われる。それ以外は人の手が増えられたような痕跡がなく小規模的な造成という感じがする。しかし尾根筋全体にわたって曲輪が見られることから、全くの簡略化ではなく、意図的にこのようにされたものではないかと思われる。

以上のようなことから藤ヶ谷遺跡は尾根筋全域を範囲とした城跡「藤ヶ谷城砦群」として考えられる。この城砦群の性格として「陣城」ではないかと推測される。「陣城」とは攻城戦や野戦において有利に戦うために造られる城のことであり、総じて簡略的に作られることが多い。たとえば白鹿城に対して真山城であり、富田城に対して京羅木山城砦群という関係にある城のことである。藤ヶ谷城砦群の場合、文献資料等は現在のところ全く発見されていないが位置的な関係から真山城の一部であった可能性が高く、したがって白鹿城に対する陣城であった可能性が高い。

#### (4) むすびにかえて

大佐遺跡は墓制の上からも出土遺物からも弥生時代から古墳時代へと移り変わる過渡期の遺跡であり、他地域からの交流など多くの問題点が提起される。また本遺跡は台状墓である可能性が高く、よって墓域全体はこの調査区にとどまらず、東西に広がる尾根筋にも同様に続いていると考えられる。

藤ヶ谷城砦群は「陣城」である可能性が高い。しかも尾根筋全域にわたって広がりを持っているあまり例のない城跡である。しかしながら今回の発掘調査はあくまでも部分的でしかなく、全容を解明するには至っていない。またこの尾根筋に限って縄張り調査を行ったが、それはあくまでも表面に見える遺構であり、土中にある遺構までは確認できない。したがってそれを発掘調査で補いまた確認することが必要だと考える。

「城」の概念は「天守＝城」という近世城郭のイメージが一般的に強い。これは昭和30～40年代の全国各地で天守の復元が行われた時のイメージと、石垣や櫓など目に見えて残っているため近世城郭が城であると思われている<sup>90)</sup>。また中世城郭の山城でも川山富田城や白鹿城など映画やドラマ、そして文献資料など歴史の表舞台に出てくるものに注目が集まる。このような城は中心的な城（本城）であり、その本城もそれ以外の多くの支城によって構成されることがほとんどである。「中世城郭は『城ではなく多城もって構成する』という概念<sup>91)</sup>から中世の山城を考える上で有機的な関連を考慮に入れなければならない。本城砦群もその例外ではない。この調査がその契機となれば幸いである。

#### <注>

- (1) 東森市良「山陰地方発見の壺棺とその特色」『考古学研究第14巻2号』考古学研究会 1967年
- (2) 松本岩雄「墳丘出土の大形土器」『山陰考古学の諸問題』山本清先生喜寿記念論集刊行会 1986年
- (3) 肥塚弘幸「家族墓へのアプローチ—北近畿後期弥生墳墓の場合—」  
『京都府埋蔵文化財論集第3集』京都府埋蔵文化財調査研究センター 1996年
- (4) 『小丸山古墳』松江市教育委員会 1986年
- (5) 山本清「山陰の石棺について」『山陰古墳文化の研究』山本清先生退官記念論集刊行会 1971年
- (6) 肥塚弘幸「丹後地域の弥生墓」『京都府埋蔵文化財論集第2集』  
京都府埋蔵文化財調査研究センター 1991年
- (7) 山根正明「出雲における毛利氏の山城について」『山陰史談22号』山陰歴史研究会 1987年
- (8) 寺井毅「白鹿城砦群」『中世城郭研究』中世城郭研究会 1988年

- (9) 平田昌司「松江市内の古城址について」『山陰史談 5号』山陰歴史研究会 1972年
- (10) 「雲陽軍表記」
- (11) 宇田川武久「日本の美術No.390鉄砲と石火矢」至文堂 1998年
- (12) 鈴木真哉「鉄砲と日本人—「鉄砲神話」が隠してきたこと—」洋泉社 1997年
- (13) 奈良国立文化財研究所肥塚隆保氏の分析結果による
- (14) 「戦略・戦術・兵器事典 2 日本戦国編」株式会社学習研究社 1994年
- (15) 八丁子市教育委員会戸井晴夫氏の御教授による
- (16) 馬淵久夫「鉛同位体比測定による火縄銃関係資料の原料産地推定」『朝倉氏遺跡資料館紀要』  
福井県立朝倉氏遺跡資料館 1985年
- (17) 須川蒸雄「日本の火縄銃 1」光芸出版 1989年
- (18) 国友鉄砲の里資料館館長国友昌三氏の御教授による
- (19) 坂本育徳「松江藩の鉄砲場」『研究紀要34号』島根県立松江北高等学 1997年
- (20) 西ヶ谷恭弘「日本史小百科 城郭」東京堂出版 1988年
- (21) 千田嘉博「中世城館研究の構想」『中世の城と考古学』新人物往来社 1991年
- (22) 創価大学教授後藤和氏氏の御教授による

#### <参考文献>

- 「袋尻遺跡群発掘調査報告書」松江市教育委員会 財団法人松江市教育文化振興事業団 1998年
- 「奥才古墳群」鹿島町教育委員会 1985年
- 「陰田遺跡群」鳥取県教育文化財団 1996年
- 「日本城郭体系11鳥取・島根・山口」新人物往来社 1980年
- 「出雲・隠岐の城館跡」島根県教育委員会 1998年
- 「日本城郭人辞典」新人物往来社 1997年
- 島羽止雄「城郭」日本城郭資料館出版会 1969年
- 「歴史群像シリーズ49毛利戦記」学習研究社 1997年
- 「月山富田城尼子物語」広瀬町観光協会 1996年
- 「城館調査ハンドブック」千田嘉博・小島道裕・前川 要 新人物往来社 1993年

IV 付 編



# 大佐遺跡出土の繊維状物質と 黒色物質の分析について

奈良国立文化財研究所 佐藤昌憲

大佐遺跡は松江市の北方、西持田町に位置する。平成8年度に松江市教育委員会が分布調査が行い、平成9年度に財団法人松江市教育文化振興事業団によって発掘調査が行われた。大佐遺跡は尾根上に丘陵地にいくつかの墓域を持つ遺跡で、今回分析をした資料は丘陵上にある墓域（木棺墓：SK-01）から出土した繊維状物質である。

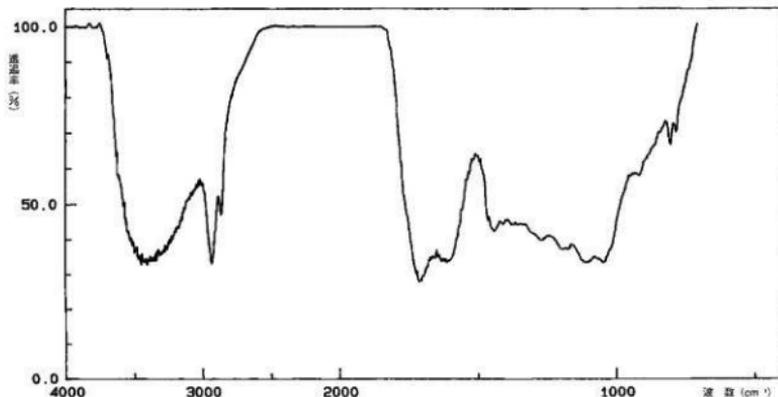
分析方法は資料の端の部分から極めて少量の試料を採取し金属台上でプレスして薄層とし、堀場製 FT-520型顕微赤外分光計（FT-IR）で赤外吸収を測定した。

分析の結果、この資料は白色鉱物状物質の表面に糸状繊維が巻かれ、その表面を黒色物質が覆っていた。この白色鉱物が天然の鉱物か、あるいは人工的に固めたものかは判別はできない。巻かれていた糸状繊維は織物としての組織点（経糸と緯糸の交点）が見えないので、鉱物表面に糸を幾重にも巻き付けたものと考えられる。

この糸状物質の赤外スペクトルは植物繊維の示すスペクトルとほぼ類似しているが、大麻或いは苧麻のスペクトルとは明らかに異なっており、植物種の特定はできない。さらに走査電子顕微鏡などによる繊維形態の観察などが必要である。また資料の別の個所から採取した茶色の繊維状物質の赤外スペクトルも植物性物質の特徴を示しているが、その繊維形態から、ある種の植物の毛根と考えられる。これは埋葬当時或いは後世の付着物が混入物であろう。

黒色物質は第65図のように、典型的な漆の赤外スペクトルの特徴を示したので、糸状物質を鉱物に巻き付けた後、表面に漆を塗布したものと考えられる。

糸状物質の材質特定については、機会があればさらに詳細な調査を行いたい。



第65図 黒色物質の顕微FT-IRスペクトル

# 松江大佐遺跡出土赤色顔料の検討

考古地質学研究所 柴 田 喜太郎

## 1. はじめに

大佐遺跡は松江市西持田町にあり、平成7～8年に実施された分布調査により古墳・住居跡等の遺跡が確認され、平成9年財団法人松江市教育文化振興事業団により発掘調査が実施された。今回検討した試料は大佐遺跡土城墓SK-02から出土した顔料を含む試料と、その周辺から採取された燐分析の比較試料である。顔料の検討は組成に付いて、燐分析は粘土床の燐含有量の検討と周辺地域の試料との比較検討が目的である。

## 2. 試料と分析方法

### 2-1. 試料

試料は次の4試料である。これらの試料は発掘調査担当者が採取した物である。

試料2と3に付いては試料の層序上の位置は明らかではない。

試料1 赤色顔料…大佐遺跡土城墓SK-02東側

粘土床の灰白色土に混入するものから実体鏡下で抽出。

試料2 灰白色土…粘土床の土 燐分析試料

試料3 黄褐色粘上質シルト 燐分析比較試料 (1) 調査区西端部分、SK-03の西側約23m地点

試料4 黄褐色粘土質シルト (2) SK-02の南側約3.2m地点

### 2-2. 分析方法

試料の分析は次の方法による。検討の目的と手順に付いて概要を述べる。

#### 2-2-1. 顔料組成

1. 顔料試料の分析の目的は組成を明らかにすることである。古墳や出土品に作って検出される顔料、中でも出土例の多い赤色顔料には朱（硫化水銀 HgS 辰砂）と紅柄（酸化鉄 Fe<sub>2</sub>O<sub>3</sub> 褐鉄鉱・赤鉄鉱）が知られている。前者の朱は産地が限られているが後者の紅柄は種々の鉄を含む鉱石や風化物から採取あるいは容易に作る事ができる。こうした点を考慮すると、朱（硫化水銀 HgS 辰砂）と紅柄（酸化鉄 Fe<sub>2</sub>O<sub>3</sub> 褐鉄鉱・赤鉄鉱）を組成において厳密に区別することは古代における流通や支配、交易関係の解明にも役立つものである。
2. 提供された試料は顔料が粘土床の上に混入しており含有量が少なかった。先ず試料を乾燥して粗砕き次に粘土床の土の中から赤色の粒子の集中部分を顕微鏡下で拾いだし、メスシリンダーに入れた蒸留水に混入泥化させ比重により顔料を濃縮して分離した。分離した顔料は自然乾燥し、再度顕微鏡下で顔料以外の混入物を除き、最後に含まれている鉄鉱物を磁気分離して除去した。磁気分離により除去される鉱物には磁鉄鉱を含む鉄鉱物、斜方輝石と単斜輝石、雲母類が含まれている。鉄鉱物には褐鉄鉱・赤鉄鉱は含まれていない。

3. 分離した試料の一部を取り乳鉢で微粉碎し、塩酸に溶解しヘキサシアノ鉄(Ⅱ)酸カリウムによる呈色反応を試みた。この呈色反応は次に述べるX線回折の検出限界よりも少ない量の鉄の検出ができる。但し、顔料としての着色が認められない場合でも鉄を含む反応が見られる場合がある。
4. 分離濃縮した試料の一部を微粉碎しスライドガラスに塗布する。湿潤時の土色を記録する。スライドガラスに塗布した顔料が乾燥した後、次の条件で粉末X線回折により顔料の鉱物組成を検討した。装置はマックスサイエンス社(鳥津製作所系列)製粉末X線回折装置(MXP18VA)を使用した。

X-Ray generator	:18KW	Sampling Width:0.0200deg
Target	:1.54056A(Cu)	Scanning Speed:8.0000deg/min
Monochromator	:use	Divergence Slit:1.00deg
KV	:40KV	Scattering Slit:1.00deg
mA	:100.0mA	Receiving Slit:0.30mm

#### 2-2-2. 磷分析

1. 磷酸塩は地球上のあらゆる所に分布する。磷酸塩は植物や動物の遺体や排泄物に起因するもので、人尿では一口排泄量当り0.5~2.0gの磷が含まれ、体重68kgの人体では630gの磷が、その中の541.8g(86%)が骨に含まれている。従って遺体を埋葬した墓壇内部の堆積物と外部の堆積物では磷の含有量に違いがあることが考えられる。この相違が顕著なものであれば、使途が明らかでない土壌の中の堆積物に含まれる磷含有量の検討により埋葬施設が否かを判断できる可能性がある。しかし遺体埋葬後の状況の変化、例えば墓塚が透水性の良い堆積物で覆われていたり、あるいはpHの変化の状況が極端であった場合などでは磷酸塩が遺存するかどうか、上壤を構成する粘土鉱物の種類に依って磷の吸着の程度に差が無いかどうかなど、こうした点に付いての比較検討資料がまだ多くはない。従って今回の大佐遺跡の試料に付いては今後の比較資料を得る為の検討である。

2. 検討した試料は次の3試料である。

試料2 灰白色土…粘上床の上磷分析試料

試料3 黄褐色粘上質シルト 磷分析比較試料(1)調査区西端部分、SK-03の西側約23m地点

試料4 “ “ (2)SK-02の南側約3.2m地点

3. 試料の分析は定価調査法(昭和63、環水管127)によった。この方法は、試料に硝酸と過塩素酸剤を加えて加熱し、有機物を分解後、生成した磷酸イオンを定量し、これを磷濃度に換算して表示するものである。操作の概要を以下に述べる。

1. 試料調製 1 試料を室温で乾燥し乳鉢で粉碎する。

2 OP2mm篩で篩分けする。

2. 乾泥率の測定 1 混合試料から5gをとり乾燥器で105℃~110℃で乾燥し計量する。

(0.01gの桁まで)

3. 分析処理 1 調製試料から1gを取り硝酸、過塩素酸処理を行う。

- 2 残液を濾過し定容にし、適量を取ってpHを調整する。
- 3 モリブデン酸・アスコルビン酸混液を加えて発色させ定容とし、比色計を用いて測定し予め標準物質により作成した検量線から燐含有量を求める。

### 3. 分析結果

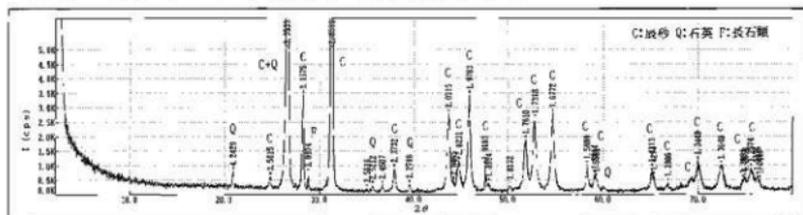
#### 3-1. 顔料

試料1 赤色顔料 大佐遺跡土壌墓SK-02東側

粘土床の灰白色上に混入するものから実体鏡下で抽出。

湿潤時土色：10R5/8（赤）よりも明るい色。

試料1は粉末X線回折の結果、硫化水銀を上成分とする高純度の辰砂（HgS水銀朱）である（添付X線チャート参照）。顕微鏡下で400粒の辰砂粒子の中径を計測し粒度分析を試みたところ、平均粒径と中央粒径値は0.043mm、粒径0.03～0.04mmに最頻値を持つ粒径0.01～0.08mmのグループと0.09～0.12mmに含まれる物に分かれる。辰砂の粒度は微細砂～中粒シルトの範囲に含まれる。添付したX線チャートでは辰砂の他に粘土床の粘土に含まれている微量の石英の反射が見られる。鉄を含む鉱物はX線回折では検出されなかった。呈色反応でも鉄は検出されない。



第66図 大佐遺跡SK-02粘土床に混入する顔料

#### 3-2. 燐分析

試料2 灰白色上…粘土床の土 燐分析試料

湿潤時土色：10R5/8（赤） 燐含有量28mg/試料100g中

試料3 黄褐色粘土質シルト…燐分析比較試料（1）調査区西端部分、SK-03の西側約23m地点

湿潤時土色：10R5/8（赤） 燐含有量29mg/試料100g中

試料4 黄褐色粘土質シルト…燐分析比較試料（2）SK-02の南側約3.2m地点

湿潤時土色：10R5/8（赤） 燐含有量28mg/試料100g中

先述した分析方法により燐含有量を検討した結果は上の通りである。

### 4. 考察

大佐遺跡土壌墓SK-02の東側から採取された粘土床に混入する赤色顔料は高純度の辰砂（HgS硫化水銀朱）である。赤鉄鉱・褐鉄鉱は含まれていない。粒度分析の結果から見ると或程度粉碎等の前処

理が為されていたことも考えられるが、顕微鏡下での観察では結晶が破碎された粒子は少なく、ほとんどの粒子が辰砂の自形結晶（結晶が本来示す結晶形態）に近い。従って水鏡等に依って粒度が揃えられた可能性も考えられる。粒度から見ると辰砂は微細砂～中粒シルトの範囲に含まれ細粒である。辰砂の産地に付いては不純物として混入する成分を検討する事に依って或程度推定できるが、この試料に付いては辰砂の含有量が少なく不純物の同定・定量は困難である。

構成含有量はこれまでに検討した他の地点に較べて少ない。例えば鳥根県頓原町の場尻遺跡（報告書印刷中）の土壌では46mg/100g、周辺の地点では92mg/100gであった。前者は用途不明の石礫であり、後者は放牧地に隣接し家畜の排泄物による汚染が考えられる。こうした例から見ても大佐遺跡土壌SK-02粘土床及び比較試料の構成含有量は微量である。粘土床とされた物がどのような“粘土”なのか、構を吸着・保持する性質の強弱による違いも考えられる。

## 5. 結論

1. 大佐遺跡土壌SK-02の粘土床に含まれている赤色顔料は高純度の辰砂（HgS 硫化水銀朱）である。
2. 粘土床及び周辺から採取された土壌試料に含まれる構は非常に少ない。

### <参考文献（以下文献のリスト参照）>

柴田喜太郎（1998）：庄原市清水3号遺跡馬立第2号古墳主体部

頭位部分出土赤色物質について

広島県埋蔵文化財調査センター調査報告書第164号

# 藤ヶ谷遺跡と周辺の山城遺構について

島根県立松江南高等学校 山根正明

## はじめに

藤ヶ谷遺跡は、松江市と八束郡鹿島町との境界をなす稜線のうちの、鳥ノ子山から南方に向かって伸びる支脈上に立地している。鳥ノ子山を基点とする支脈は、いく筋かに分枝して大橋川水系に向かって下降してゆくが、この支脈上にはいくつかの山城が確認されている。(第61図参照)

これらのうち白鹿城と真山城は古くから周知の遺構であるが、島根県と松江市教育委員会による近年の分布調査によって新しく居館と山城の遺構が追加された。特に平成5年度から進められた島根県中近世城館分布調査事業では、城館の所在の確認のみならず、縄張り調査が行なわれたことによって、曲輪や上塁、堀切や虎口の配置など、個々の城館の姿がより具体的に明らかにされた。ここではそうした調査成果<sup>①</sup>を援用しながら、周辺の山城遺構との対比において藤ヶ谷遺跡内の山城遺構の構造を考えてみたい。

## 1. 雲芸攻防戦におけ毛利元就の戦略構想

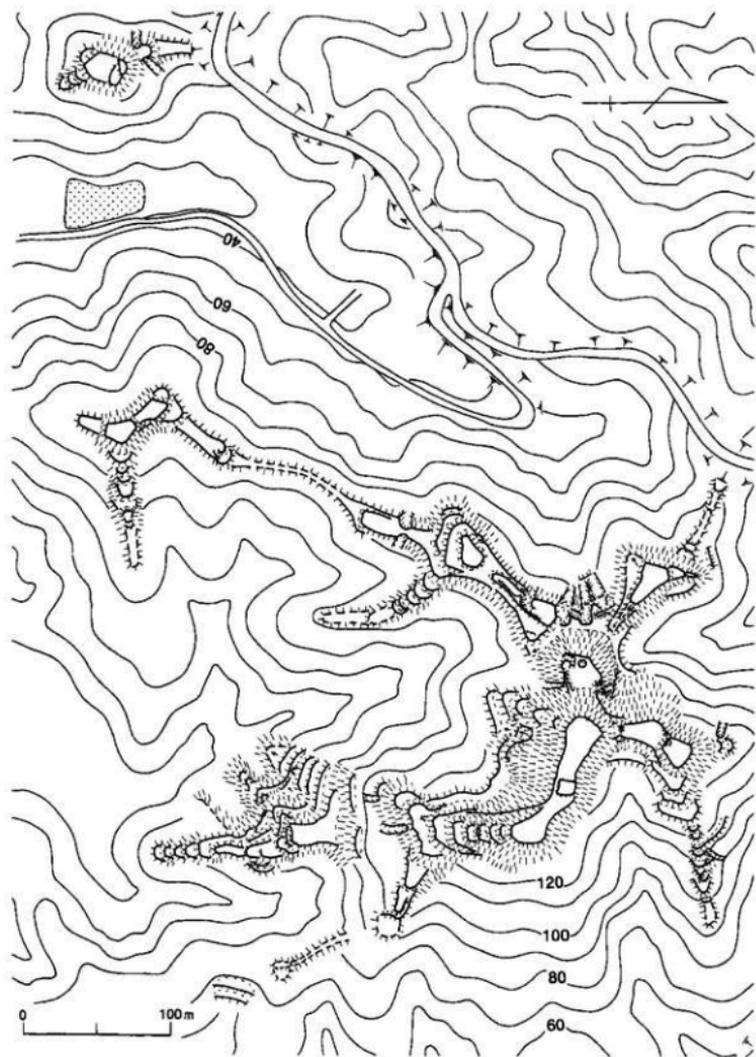
元就は、永祿五年(1562)12月と推定される兼重元宣宛の長文の書状<sup>②</sup>において、次のように富田城攻めの戦略構想を述べている。「ここもと陣取りの趣は、あらはい(荒隅)岬え陣を取るべく候、これは白鹿へは程遠く、水うみのきわにて候、さ候あいだ、わくら(和久羅)山を同日取り候て一城あい構え、富田と嶋福(島根)の間を取り切り候はでは叶わざることにて候、さらに「わくら山取り付け候はば、中海へおし入り、大こん(大根)島などにも取りすわり候ており候はば、水うみの舟もおし下り、一つに成りあい候へば、とた(富田)と嶋ね(島根)の通路のおもいはたへ候」と書き送っている。

つまり元就は、まず荒隈城を築いて白鹿城攻略の拠点とし、同時に和久羅山に城郭を構えて富田城と白鹿城の連絡を切断しようとしている。また和久羅城には、白鹿城の攻略を側面的に援助する機能を果たさせるとともに、宍道湖から大橋川・中海への制海権を掌握しようとするねらいがあったことがわかる。こうした戦略構想にたつて元就は、永祿6年(1563)8月から白鹿城への攻撃を本格的に開始させたのである。

## 2. 白鹿城砦群の構造について

鳥ノ子山から南方に伸びる支脈上に地取りする山城のうち、白鹿山を中心とする山城群が白鹿城砦群である。鳥ノ子山から玄武山をへて大高丸・小高丸とほぼ直線的に下り、左右に分枝して南西方向に高坪、南東方向に下ると白鹿山が位置する。なお白鹿城砦群の乗った支脈の最南端で、宍道湖の湖岸にせり出した低丘陵に地取りしたのが荒隈城である。

白鹿城砦群の中核をなす白鹿城(第67図)は、標高150mの最高所を主郭としこれから派生する尾根



第67図 白鹿城略測図（『出雲・隠岐の城跡』による）

筋を削平して曲輪を重ねている。部分的には、土塁を巡らして防御性を高めた曲輪や尾根伝いの攻撃を切断しようとする堀切も認められるが、いずれも普請の規模は小さい。特に土塁については、曲輪の周辺に巡らして防御としたり、虎口を土塁で固めて堅固にしたり、斜面に登り土塁を築いて連絡路

を確保したりしようとする縄張り観は認められない。荒隈城に拠点を移す以前、毛利元就が出雲国の平野部に進出して最初に築いた鷹ヶ築城（出雲市東林木町）が、土塁を巧妙に活用した縄張りとその手慣れた普請技術を伝えているのと対照的である。基本的に、白鹿城は自然地形の要害性に依存した縄張りの山城といえる。

元就は尼子方の松田誠保が白鹿城を圍いて降伏した後、真山城をこの方面の拠点として重視した。後述するように、真山城ほどの規模の陣城が白鹿城を俯瞰する位置に築造されると、白鹿城の軍事的価値は無に等しくなるといってよからう。そのため、当城については毛利方による改修の可能性は低い。したがって逆に、毛利氏・堀尾氏によって改修強化された部分を除いた富田城や、熊野氏の居城である熊野城などのように、出雲国在来の国人衆の縄張り観と普請技術を知ることができるサンプルといえる。

なお、玄武山・大高丸・小高丸・高坪と続く稜線上と白鹿山の南西の小白鹿にも、臨時の布陣跡らしいかすかな削平の痕跡が認められる。残された文書からも、こうした周辺のピークでの戦闘が激しかったことが知られる。毛利方の城攻めが開始された直後の八月十五日付の元就の書状<sup>⑩</sup>には、「小白鹿切り取り、そのほか諸丸圍屋（小屋）以下残らず焼き崩し候、甲丸（詰の丸）一所に尼子方を押し詰めたとある。また十月十八日付の平佐就之宛の感状<sup>⑪</sup>では、「去る十三日白鹿小高丸合戦の時、魁（先駆け）の衆」が崩れたにもかかわらず踏み止まり、敵を追い返して勝利を得たと賞している。ただ小白鹿や小高丸をめぐる攻防戦は、長期にわたる籠城戦というよりは戦術上重要な尾根筋のピークをめぐる争奪戦と考えるべきであろう。両軍とも、ピークを堅固な血輪に削平して楯籠もろうとした形跡はうかがえない。

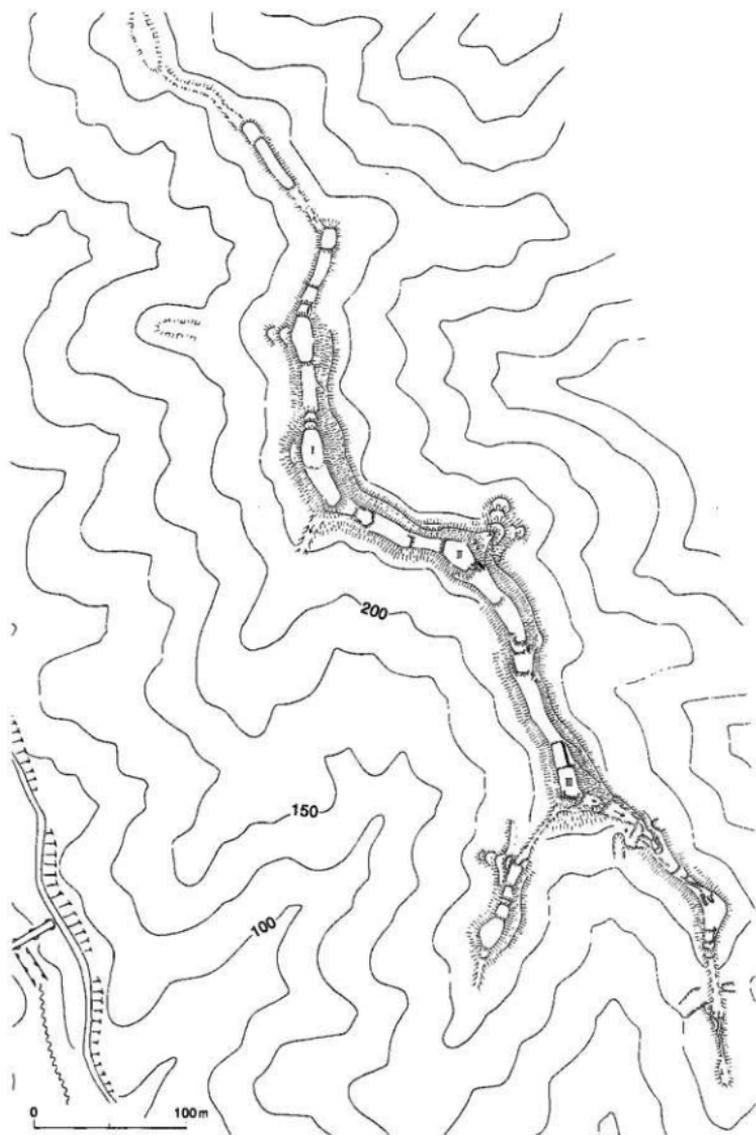
### 3. 真山城の修築について

鳥ノ了山から二手に分かれて南方に伸びる支脈のうち、常福寺川を挟んで白鹿城眷群の東側の支脈上に地取りしているのが真山城（第68図）である。標高256.3mの最高所から約100mの標高差をもって直線距離約1kmの白鹿城を、ほぼ真南に見下ろすことができる位置を占めている。

当城は、吉川元春によって白鹿城攻めの向い城として築かれたとされているが、尾根伝いに鳥ノ了山の樹をまわって連絡ができるから、毛利方が築城する以前、尼子方によって何らかの防御施設が造られていた可能性もある。前述のように白鹿城の開城後は真山城が重視され白鹿城は廃されたという。

白鹿城の開城以後、当城にだれが番将として配されたかについては信頼できる史料から明言することはできないが、『雲陽軍実記』や『陰徳太平記』は多賀元龍としている。元龍は、白鹿城包圍戦が本格的に開始される直前の永禄六年（1563）六月に、毛利元就から乃白二百貫・東長田二百五十貫・国屋百貫をあてがわれ、白鹿城落城後の十一月には西長田二百五十貫をあてがわれている。このうち東長田は、後述する和久羅山城の西麓の松江市上東川津町・下東川津町・川原町付近に比定され、これに接する西長田は、白鹿城の東南麓の菅田町・西川津町・西尾町付近に比定される。また国屋は荒隈城の膝下である。したがって多賀元龍が真山城の番将であった可能性は高いといえる。

ところが、尼子復興戦の際に当城は尼子勝久や山中鹿介らに奪取されて、復興戦中の尼子方の本城



第68図 真山城略測図（『出雲・隠岐の城館跡』による）

として利用された。一時は大野隆重の籠る富田城に迫る勢いを示した尼子方であったが、永禄十三年(元亀と改元)(1570)二月の布部(能義郡広瀬町)の戦いで、富田城救援のため急行した毛利軍に敗退し、急速に衰退した。

復興戦が失敗に終わって勝久らが出雲国を退去した跡は、毛利輝元が井上就正・野村上悦・進藤就勝を普請奉行として当城の修築<sup>94</sup>にあたらせている。そしてその普請は、二月後の元亀2年(1571)12月に「応了」<sup>95</sup>した。

#### 4. 真山城の構造について

真山城は、複せ尾根上に多数の曲輪を700m以上にわたって連接した、いわゆる連郭式山城である。最高所のⅠが主郭と考えられるが、城城の中心であるⅡ郭の可能性もある。前述のような経過から尼子方の手も加わっているはずだが、基本的な地取りと縄張りも最終的な普請も、ともに毛利氏によるものであることは明白である。地形に制約されて小面積ではあるが、稜線の起伏を丹念にひろって曲輪としている点は、争奪的となった山城らしさが感じられる。

当城においても全体に普請の規模は小さく、曲輪に巡らせる土塁はⅢ郭の一部での使用にとどまっている。ただⅢ郭北方の曲輪には東壁に石積みが認められる。また東側の谷斜面を走る通路への連絡路もここから下っており、実質上Ⅲ郭の先端に位置するⅢ郭の周辺が最も緊密な縄張りとなっていることがわかる。谷斜面を走る通路はⅡ郭の裾をへてⅠ郭の北方までを連結<sup>96</sup>しており、曲輪間の連絡はよくとられているといえる。

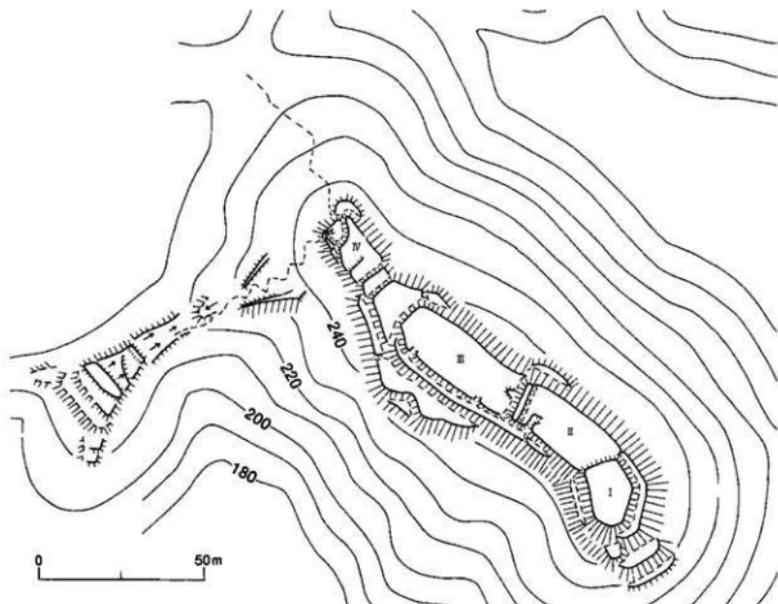
なおⅢ郭北方の鞍部、Ⅱ郭とⅠ郭の中間の鞍部は曲輪として削平されており、城域内に堀切は確認できない。つまり、城域を堀切で分割してそれぞれの防御性を高めようとする意識も、それぞれの曲輪群に機能を分担させようとする意識も読み取ることができない。

実のところ縄張りから読み取れるこうした特徴は、文献史料から推定される歴史像との整合性に苦しむ点の一つである。元亀二年(1572)四月六日付の大野隆重書状<sup>97</sup>によると、先に普請奉行に任ぜられた井上就正は、子息の元勝に給地を賜るならば真山城の城番を勤めたいと隆重に申し出ている。これを受けた隆重は、「一丸お預け候はば然るべき儀に候」と就正の願いを支持して福原貞俊と山羽道良に推挙している。その上で「大事の御山に候あいだ、城督仰せ付けられ候とも、かようの衆五人六人ほどは置かせられたとき」とこと私見を述べている。

こうした文言からは、後北条などと同様毛利氏においても、一定規模以上の城郭においては曲輪を単位として番将が割り当てられたこと、また複数の番将で交代することが当然と考えられていたことが推定されよう。ところが前述のように真山城の縄張りからは、明瞭な区画性を読み取ることができないのである。

#### 5. 尼子家復興戦における和久羅山城

真山城の南東約5.5kmの和久羅山は、真山城・白鹿城はもとより宍道湖・中海を見通すことのできる標高をもつとともに、大橋川を見下ろす位置を占める。元就の言のごとく、富田城から白鹿城への



第69図 和久羅城略地図（出雲・關岐の城館跡」による）

援軍の前に立ち塞がり、そのうえ穴道湖・大橋川・中海の制海権を掌握するに格好の地点に位置している。つまり穴道湖北岸の満願寺城や南岸の穴道要害山城のような、水軍城と見てよい。

したがって芸芸攻防戦の時期だけでなく、尼子家復興戦の段階でも和久羅山城は重要な役割を果たした。元龜元年（1570）五月、尼子方の軍船が島根半島の南北両岸を侵攻したのに際し、番将の野村士悦にあてて小早川隆景が次のように書き送っていることから明らかである。つまり隆景は、まず和久羅山城を堅固に防備することを命じた後、続いて「佐陀江（松江市西浜佐陀町の満願寺城を指す）え、ひとかど人数差し出され候あいだ、真山衆（尼子方）羽倉責め（和久羅攻め）はなりがたく候、この方鉄砲衆はや着いたるべきの条、入城だに候へば異儀あるべからず候」といっている。

またこの四日後にも隆景は、「今度賊船（尼子方の軍船）が盪下し、真山衆、成相（松江市庄成町の二つ山城を指すか）・森山（八東郡美保岡町森山の鈴垂城を指すか）に取り詰めのところ、馬淵（大橋川の川口の南岸）おもてに早々懸け（駆け）つけられ、短息をもって、羽倉そのほか近辺の儀堅固に抱えられる」べし<sup>(9)</sup>と命じている。つまり当城は、大橋川北岸に点在する毛利方の諸城（後述する南岸の茶臼山城も含めて）の中核的位置を占めたと推定される。

翌元龜二年（1571）正月には、和久羅山の山裾の水草川（現在の朝酌川）の河口部と推定されるからから橋で、5月には轟橋で<sup>(10)</sup>、真山城に拠る尼子方と、毛利方の多賀元龍と長尾元定とが戦っている。正月の戦闘は、尼子方が中海沿岸の本庄浦から一艘（うち一艘は大船であった）の船を真山の麓に移

動させたのを、元龍と元定がそのうち二艘を奪い取り一艘を破却したことが発端であった。

したがって和久羅山城は、尼子方が穴道湖・大橋川・中海の各所で積極的に船戦を展開した尼子家復興戦の段階のほうが、より重要性を増したと考えられる。つまりこの水系の制海権を掌握する上での中核的な役割を果たす水軍城という機能に加えて、真山城の向かい城として毛利方の最前線の陣城という性格を合わせ持ったのである。なお、このため毛利方の野村士悦・長尾元定らが番将として当城に在番したが、このような戦時を除いては和久羅山の西麓の東・西長田を所領とする多賀元龍の居城だったと考えてよからう。

## 6. 和久羅城の構造について

和久羅城は、標高261.7m地点に主郭（Ⅰ郭）を置き、北西方向に曲輪を階段状に配置するというのが基本的な縄張り（第69図）である。城城の北西端から南西方向に伸びる尾根にも普請の跡が確認できるが、Ⅳ郭から約20m下った地点から下方の郭は削平が不十分で、主要部分と比較すると普請のていねいさにおいてかなり見劣りする。おそらくこの部分は復興戦段階に陣城として整備される以前の普請で、そのまま放置されたのであろう。

なお、Ⅳ郭の南西下方の鞍部には堀切が認められない。大橋川の南岸の茶臼山城<sup>14</sup>では堀切を多用し主要部の東西に堀切を掘って、東西の尾根先に設置される古い時期の曲輪群と主要部を切断している。茶臼山城は、当城と対応して大橋川の水運を押える役割を果たしたと思われるが、縄張り観において大きな相違があるといわざるをえない。

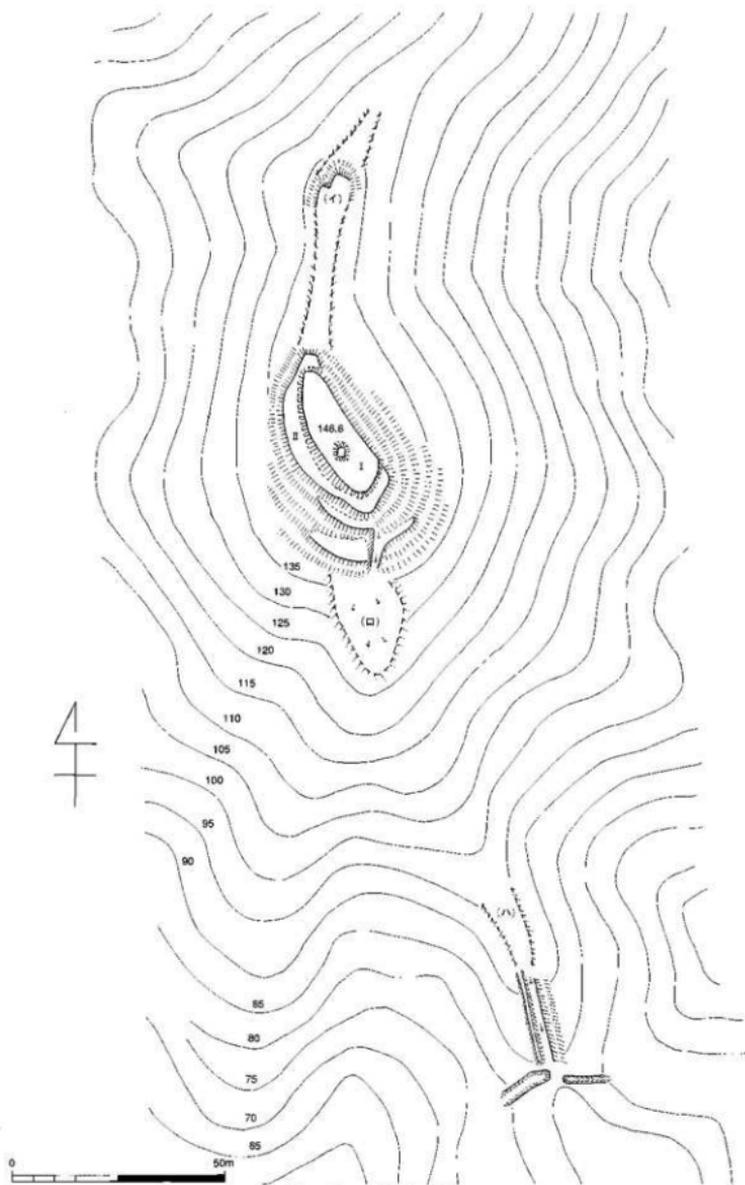
次に、当城の縄張りで特徴的なのは虎口が発達していることである。主郭に続くⅡ郭には北西端に土塁が築かれ、その内側に右折してⅢ郭に入る虎口を開口させている。この虎口を出ると腰曲輪がⅢ郭の西端まで伸びており、Ⅲ郭には二カ所に平入りの虎口が腰曲輪に開いている。Ⅳ郭の西端には、南西方向の尾根筋に向かって開口する枡形虎口が設けられている。

また土塁が効果的に用いられている点にも注目される。Ⅱ郭北西端の土塁は、Ⅱ郭を守るとともに虎口の防壁にもあてられている。またⅣ郭西端の枡形虎口に向かう斜面には二本の登り土塁が築かれている。特に南側の登り土塁の南壁は、ていねいに削り落とされている。現在も登城路がこの間を通っているように、この二本の登り土塁が枡形虎口に向かう通路を守ろうとするものであることは明白であろう。

## 7. 天狗山城の構造について

天狗山城は、真山城の南東約900mの地点に位置する。真山城から朝朝川に向かって下る稜線のピークで、標高は146.6mを測る。真山城と同様に周囲の丘陵から突出した高度で、眺望は誠によい。白鹿城は天狗山の南西約900mの位置に、ほぼ同高度に地取りしているが、中間に低い一筋の稜線が横たわっていて、直接の連絡路はない。なお当城に関する文献史料は今のところ見当たらない。

天狗山城は、標高146.6mの最高所を削平して主郭（Ⅰ）とし、これに腰曲輪を付しただけの単純な縄張り（第70図）の山城である。主郭のほぼ中央には高さ約0.5m、約2m四方の土壇が設けられており、



第70図 天狗山城略測図

小規模な櫓台の基壇と推定される。主郭の東側を除く三方は、1mの段差をもって腰曲輪が巻かれ、南側下方には通路を中央にはさんでさらに二段の腰曲輪が付属させられている。主郭とここまでの腰曲輪の削平はいいねい、平滑に仕上げられている。

しかし主要部の北側(イ)と南側(ロ)の尾根筋の普請は、上面の削平も法面の削り落としも不十分なままで、自然地形に近いものがある。ただⅡ郭の北端から約45m離れているが、(イ)の北端だけはいいねいな普請が施されている。つまり北東方向に緩やかに下る尾根筋を削平し、その先端を削り落として曲輪の切岸としている。しかもその西側は約5m食い込ませて、折りを付けているのである。

城域の南端(ハ)の縄張りや普請にも注目される。(ハ)自体は(イ)(ロ)と同様で、削平の痕がわずかに残る程度の普請であるが、ここに至る斜面の西側には登り上段が築かれ、東側は削り落とされて通路が造られている。幅約2mのこの通路は尾根筋の鞍部まで続き、その先端には堀切が掘られている。堀切は東側が浅く西側が深い。尾根筋と直交するのではなくやや食い違っており、中央に十橋を残そうとしたものと考えられる。

(ハ)は(ロ)との高低差が約35m、直線距離にして約100m離れており、通路と堀切はさらに離れているが、ここまですぐ天狗山城の城域と考えるべきであろう。つまりこの地点から(イ)の北端までを一貫した縄張り観のもとに修築しようとしたのであろう。にもかかわらず(イ)の中央部から南側、あるいは(ロ)と(ハ)が自然地形に近い形状で残されたのは、いわば普請が後回しにされたからと考えるべきである。

特に陣城については、このように普請の途中で放棄される場合があった<sup>100</sup>。これは、茶臼山城の東西の尾根先に認められる古い時期の曲輪群が、少数の兵力で守備できるよう城域を縮小するために放棄されたのとは異なっている。戦況が推移して普請の必要がなくなったり、緊急性が弱まったりした結果であろう。

このような意味で放棄されたり後回しされた陣城の普請を見ると、主要部と並行してあるいはそれに先行して、先端部の普請から着手したことが読み取れる。前述の虎ヶ巣城の北側稜線上の場合、主郭から約300mも離れた尾根筋に、土塁で囲まれた枳形虎口とその東側下方に堀切が造られているのが確認できる。ところが虎口と主要部との間は、二人立ち程度の幅の通路が伸びているだけなのである。枳形虎口と堀切を造った段階で戦況が変わり、曲輪の造成が断念されたことを物語っている。また城山城(八東郡穴道町佐々布)の場合でも、堀切とそれに接する虎口から着手されたことが読み取れるのである。

おそらく当城の場合も、戦況の変化に応じて普請が放棄され、そのため粗放な普請の曲輪が残されたのであろう。そしてこの推定が人筋において妥当とすれば、その戦況の変化とは復興戦に破れた尼子勝久らが真山城を退去したことに当たるであろう。

結論を急ぎすぎたようだが、城域の南北両端の普請は毛利方の手によるものと推定される。それは、(ハ)の南側斜面の登り土塁と通路の縄張りが、和久羅城のⅣ郭の南西斜面の登り土塁と同様な縄張り観によるものと見てよいからである。つまり後述する深町城付近まで進出してきた毛利勢が、尾根筋伝いにさらに北進して確保したのが天狗山のピークで、この普請に着手したところに、尼子方は出塞に



城である。真山城と同様な連郭式山城であるが、はるかに小規模であることはいうまでもない。

検討すべき課題の一つは、主郭とⅥ郭間の切岸と堀切の縄張りと言語である。別項において発掘調査の成果は報告されるので、重複を避けて要点だけを述べたい。まず上郭の南端についてだが、この部位は本来緩やかに南側に傾斜していたものを、主郭上面を削って斜面に盛り上げて、急角度の法面としている。つまり主郭とⅥ郭間の切岸は堀切よりも新しい言語と考えられる。したがってこの切岸に接して掘られている堀切は、本来緩やかな斜面でしかなかった主郭南面の防御を強化するための機能を持つものであった。ただ土橋が残されていたことは、単純に遮断効果をねらったのではなく、主郭と南側斜面のⅥ郭・Ⅶ郭、さらには南方の尾根筋との連絡路を残そうとした縄張りによると考えられる。なお、攻撃を誘導するためとは考えられない。ここを突破されると直ちに主郭に進入を許すことになるからである。

次に検討すべきは主要部の東側斜面に伸びている曲輪（ⅩとⅪ）の機能についてである。これについては主郭とⅥ郭・Ⅶ郭の東側斜面のⅩ郭と、Ⅱ郭・Ⅲ郭・Ⅳ郭の東側斜面のⅪ郭とが、別の曲輪と考えるか連結していたと推定するかによって、評価が異なってくる。別の曲輪と見ると、東側斜面を守るためのそれぞれの腰曲輪となろう。連結されていたとすると、東側斜面を走る連絡通路となろう。

結論的に言って、Ⅹ西とⅪ郭とは連結した通路として言語が施されていたと考えられる。このように推定する理由は、断絶した部分（二）がちょうど主郭の北端に向かってカーブしている斜面で、傾斜がきついため、いわゆる流れたと見られるからである。次に、Ⅹ郭は前述の堀切を埋め戻して造られたことが明らかなので、Ⅶ郭の東側斜面からⅧ郭までをつなごうとする意識が強かったと推測されるからである。

このように考えると元来当城は、北側に緩やかに傾斜したやせ尾根をならして曲輪とし、その南端に土橋を伴う堀切を掘るといふ単純な縄張りの山城だったと思われる。主要部の南北の斜面にも曲輪は設けられていただろうが、南側と北側の曲輪の間は主郭を通して連絡する、いわゆる曲輪越しの連絡しかできない縄張りだったと推定されるのである。

それが、まず主郭上面を削ってその上で南端の法面を急角度の切岸とし、この方面の防御を堀切から切岸による防御へと切り替え、あわせて東側斜面に連絡通路を設けて曲輪越しの連絡の弱点を解消したのであろう。さらにⅦ郭の南側斜面を掘り込むことによって、南部の丘陵伝いの攻撃がⅦ郭の西側に回り込みにくくしたものであろう。

次の課題は、こうした縄張り観による言語がどのような背景のもとで実施されたかであるが、このような縄張りの類例は、この積線の続きの真山城に認められる。つまり長大な城域であるのに堀切によって切断しようとしていないこと、通路を東側斜面に伸ばしてⅢ郭の南部からⅠ郭北方までつないでいることがそれである。もとより城域の規模に差はあるが、地取りの視点も、やせ尾根に曲輪を設けることから来る連絡の悪さの解決策も基本的に同様と見てよい。したがって、おそらく深町城は毛利方がこのピークを奪取した後に、現況のように言語し直したものと推定されよう。

## 9. 藤ヶ谷遺跡の平坦面と土塁状遺構について

最後に、深町城を含む藤ヶ谷遺跡の丘陵上に、断続的に残された平坦面と土塁状遺構にふれたい。付属地図に記載したように、当遺跡の丘陵上には削平されたと思われる平坦面が各所に認められる。ただそれを曲輪とみてよいかというと、やはり断定しかねるのである。後述するように、いずれの地点でも切岸と呼べるほどに法面が急角度に削り落とされてはおらず、旧地形そのものとしか見えないのである。そうした意味では、白鹿城の北部の玄武山、大高丸・小高丸・高坪と続く稜線上や、南西の小白鹿とほぼ同様なのである。

まず深町城の南部から見ておくことにしたい。前述のように、深町城のⅡ郭の南側斜面は削り込まれて東側斜面に通路を限定しようとしているが、この斜面を下ると標高68mのa地点に至る。この地点は、南北軸約40m・東西軸約10mの、南側に緩やかに傾斜する平坦面をなしている。そしてその南側には腰曲輪状の平坦面が取り付けられている。また南西の菅田池方向の斜面にも一段の削平されたと思われる平坦面が認められる。したがって尾根筋のピークに普請が施されたとも考えられるが、上面の削平は平滑とはいえず、法面はいずれも切岸と呼べるほどに削り落とされていない。つまり緩やかな起伏を残した不定形な平場なのであり、こうした現況からすると曲輪と判断するのはためらわれるところである。

このような平坦面は、a地点の南東のb地点（標高64m）、その南方のc地点（標高62m）とこれに続くd地点（標高61m）、d地点の南西のe地点（標高59m）にも、面積に大小の違いはあるものの同様に認められる。また丘陵のさらに南部に当たるf地点（標高42m）、最南端のg地点（標高33m）もほぼ同様である。深町城の北部でいうと、林道を隔てたh地点（標高80m）、さらに北方のi地点（標高71m）・j地点（標高87m）も同様と見てよい。

問題は、こうした平坦面がどのような意味を持つかである。このヒントにすべきはやはり発掘調査の成果であろう。深町城の東方約120mに位置するE地点（標高57m）では、虎口とみられる空間が調査区の南東隅と中央西側の二カ所で認められ、これを守るための横矢掛りと推定される盛土による普請も残されている。詳しくは別稿を参照されたいが、ここでも指摘されているのが、このほかには曲輪らしい普請が施されていないという事実である。

つまり横矢掛りを意識した虎口空間を二カ所も設けるからには、相應の普請がその内側になされているはずと考えるのが普通であろうが、ほぼ自然地形に近い状態のままなのである。緩やかな傾斜を残す平坦面は削平された結果とも考えられるが、柵列か掘立柱建物の存在を示す柱穴も、ましてや礎石<sup>90</sup>も検出されていない。とするとE地点の場合も、天狗山城の項で述べたように普請の途中で放置されたと考えべきではあるまいか。

同様な事例と考えられるのが、f地点の北端の普請である。標高42mの最高所から緩やかに北西方向に下る斜面の、東側と西側に土塁が築かれて虎口空間が造られている。西側の土塁は先端が東方にカーブしているから桁形虎口とみてよい。しかもその北側は、現状では深町浄水場から菅田町へ抜ける通路（送水管が走っている）となっているので、より深く掘り込まれた可能性はあるものの、明らか

に堀切となっているのである。そして、堀切のさらに北側の斜面には登り土塁が設けられ、その間に通路の痕跡が認められる。なおf地点に続くg地点の南端にも、発掘調査によって堀切が掘られていたことが確認されている。

したがってここでも、曲輪の出入り口である虎口部分や防壁上の先端部から普請に着手されたことが読み取れるのである。つまりf地点とg地点は、深町城に続く丘陵の最南端の位置に、一体の曲輪群として普請されようとしたものと推定される。

次にこの丘陵上に断続的に残された土塁状の遺構について考えておきたい。つまり、a地点の南東斜面からb地点の北端まで続く土塁の場合などについてである。なおこれとは別に、性格と機能が明瞭な土塁も確認できる。たとえば、b地点から深町池に向かって下る尾根筋には、その北側に削り残して造られたと考えられる土塁のラインが認められる。d地点から、東側に下る尾根筋の土塁も同様である。いずれもその南側の普請が不十分ではあるものの、これらはその内側の曲輪の側面防御として造られたもので、毛利系の山城に広く検出される普請技法といつてよからう。

これに対して前者の場合は、いったんa地点の南東斜面を標高61mの鞍部まで下った後、さらにb地点の北端に登っているので、両者を連結する狙いがあったものと推定すべきであろう。両地点の間隙は南東の菅田池の側から枝谷が食い込んで（あたかも堅堀のようである）いて、馬の背状の地形となっている。その東側に土塁が築かれているので、この通路を確保してaとbの地点の連絡を確実にするための防御施設とみるべきである。なお鞍部を守るための土塁は、d地点とe地点の間にも認められるところである。

このような土塁は、b地点の南側斜面とその西側、さらにD地点に向かう北側斜面にも認められる。前述のようにh地点は削平の不十分な平坦面ではないが、その西側は屈曲した土塁線によって守られているのである。

C地点からB地点に向かう傾斜面の土塁線はなお嚴重である。ここでは尾根筋の東側と西側とに登り土塁が築かれている。特に東側の土塁は斜面を斜めに下ってi地点の北西端に至っている。なおこの南側にも土塁が築かれて地点の北西端の防御を厳にしているのである。B地点の北端から天狗山城に向かって下る斜面、またB地点からA地点に向かう東側の斜面、さらにはA地点からj地点に向かう斜面にも向翼を固めるかのように土塁線が走っている。

このような土塁線は、いわゆる流れたものもあろうし、見落としも無いとは断言できないので、さらに広く用いられていた可能性が高く、当遺跡の大きな特徴といえる。問題は築造の狙いやその機能についてであるが、やはり連絡路の確保のためと考えておきたい。

それは、C地点の発掘調査の結果からも推定される場所である。つまりC地点では、D地点から北東に向かって伸びる稜線の落ち込みに、西側に土盛りをして連絡路としているのである。ここには、堀切を掘って稜線伝いの攻撃を遮断しようとする縄張り観は認めることができない。通路確保を最優先したと考えざるをえないのである。

なお、斜面に登り土塁を築いて通路を防御するという普請が、天狗山城に南側斜面や和久羅城のIV郭の南西斜面と同様の縄張り観によるものであることは明らかである。したがってこうした土塁状の

遺構もまた、毛利方による普請と推定されるところである。

ただここでも疑問として残るのが、主要部の普請の問題、言いかえれば普請の緊急度の問題である。つまり、長大な登り土塁や通路確保のための土塁などを造っておきながら、防御の拠点となるはずの後線のピークの普請が不十分な点である。この疑問の解明は、単に技術面からのアプローチにとどまらず、普請のための労働力編成や城館を取り巻く政治状況など、多面的な検討を要する課題である。今後、類似した事例の報告を行ってあらためて検討を加えたいと思う。

## むすびに代えて

紙幅を大幅に超過したが、最後に付言しておきたい要望がある。このたび実施された藤ヶ谷遺跡の調査は、雲芸攻防戦から尼子家復興戦にかけての激戦地の一部をほぼ全面発掘するというものであった。この調査の成果は、新たに判明した事実よりも、断続的に続く土塁状遺構の意味づけのように、むしろ疑問を広げるものといえようが、広範囲にわたって山城とその周辺が発掘調査された事例は当地域においてはかつてなく、その意義は誠に大きいものがある。

近年は、山城や居館についても徐々に発掘調査が行われ始めているが、その主要部の部分発掘に終わる場合がほとんどである。今後は、このような城館を中心とした面としての発掘調査が強く望まれるところである。そうした事例の集積の上に、あらためてこの調査の成果を問う時が、一刻も早く到来することを願うものである。

## <註>

- (1) この成果は「尾根県中近世城館跡分布調査報告書 第1集 石見の城館跡」『同 第2集 出雲・隠岐の城館跡』として刊行されている。
- (2) 『萩藩閩閩録』巻52 兼重五郎兵衛2 なお雲芸攻防戦における諸城の機能については、拙稿「出雲における毛利氏の山城について」『山陰史談』22を参照されたい。
- (3) 『萩藩閩閩録』巻119 福井十兵衛19
- (4) 『萩藩閩閩録』巻59 平佐権右衛門1 このほか小高丸の戦闘を伝える元就の書状・感状は三通が確認できる。
- (5) 『萩藩閩閩録』巻144 洞玄寺7・8
- (6) 『萩藩閩閩録』巻38 井上彦左衛門14 この毛利輝元の書状によると、古川元春方よりも二名もの普請奉行が派遣された可能性がある。
- (7) 『同』同40
- (8) 寺井鋭氏の調査によって確認された。前掲註(2)の拙稿においては、この通路を未確認のまま曲輪間の連絡の不十分さを指摘したが、ここで訂正したい。
- (9) 『萩藩閩閩録』巻38 井上彦左衛門35 なおこれ以前の同年二月には多賀元能が毛利輝元から「新山番」を命じられ、四月に再度これを命じられている。『萩藩閩閩録遺漏』巻1 多賀彦右衛門17・18) また五月十日付の古川元春書状では「新山城誘えのこと、古田において内談せしめ、これより申し入れ候」(『萩藩閩閩録』巻115 湯原文左衛門117)とあるから、新

山城の番将については多賀氏・湯原氏といった近隣の国人が任ぜられた。と同時に、番将に任ぜられると修築もまた任せられたようである。なお新山城には、天正十一年（1583）七月まで在番衆が置かれたことが明らかである。（『新修島根県史料編1』成相寺文書）

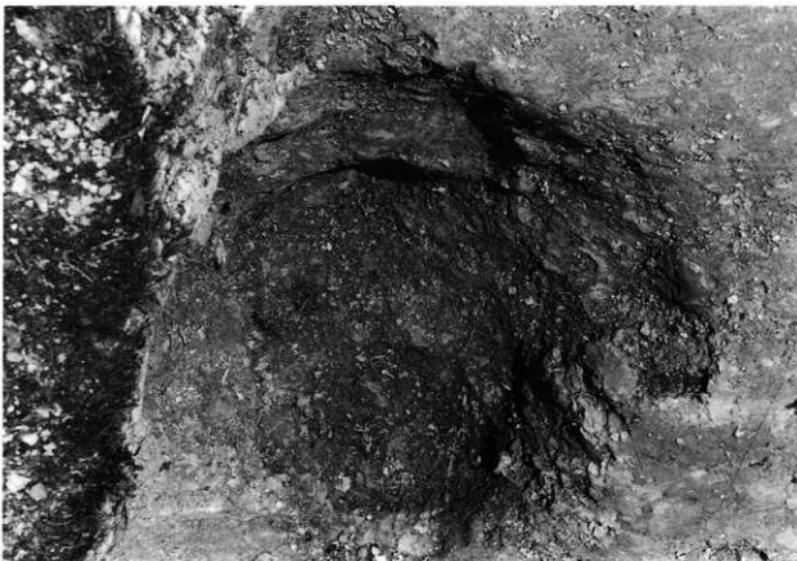
- (10) 『萩藩閩閩録』巻123 野村作兵衛18 野村士悦が在番したことを伝える史料は同文書中に3点ある。その後士悦は同年八月に末次城の番将に転じて（『同』同30）いる。翌年三月から九月までは中島元貞も番将を勤めていた（『同』巻76 中島神兵衛2・3・4・5・7・8）ことが知られる。
- (11) 『萩藩閩閩録』巻144 洞玄寺3・4
- (12) 『島根原中近世城館跡分布調査報告書 第2集 出雲・隠岐の城館跡』を参照されたい。
- (13) 拙稿「普請未成の山城について」註（12）を参照されたい。
- (14) 当遺跡と和久羅城のほぼ中間地点の稲葉城では、主郭に礎石建物のほか石つぶてを集積した土城が検出されている。詳細は松江市教育委員会「岩穴平遺跡・稲葉城」を参照されたい。

V 圖 版





大佐遺跡丘陵頂上部出土 土器棺 I (SX-01) 出土状況 (南より)



大佐遺跡丘陵頂上部 SX-01完掘状況 (西より)



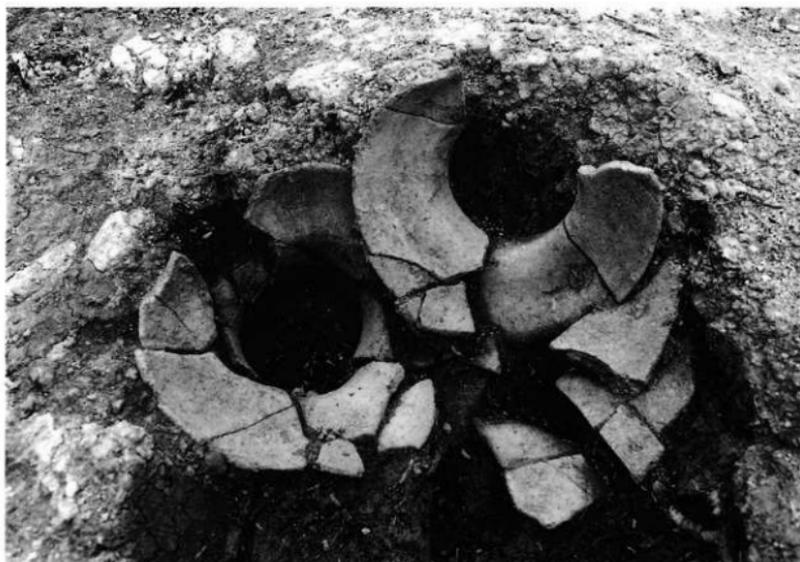
大佐遺跡丘陵頂上部出土 土器棺Ⅱ (SX-02) 出土状況 (北より)



大佐遺跡丘陵頂上部出土 土器棺Ⅱ (SX-02) 出土状況 (東より)



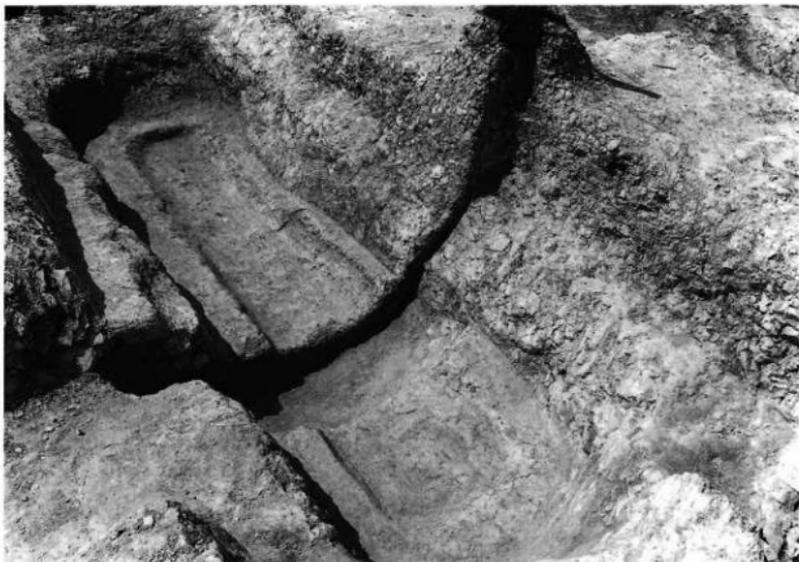
大佐遺跡丘陵頂上部 土器Ⅱ (SX-02) 埋設状況 (東より)



大佐遺跡丘陵頂上部 土器Ⅱ (SX-02) 口縁部出土状況 (東より)



大佐遺跡丘陵頂上部 SK-01完掘状況 (南より)



大佐遺跡丘陵頂上部 SK-02完掘状況 (南東より)



大佐遺跡丘陵頂上部 SK-03完掘状況（北より）



大佐遺跡丘陵頂上部 SK-04完掘状況（北東より）



大佐遺跡丘陵西側 石蓋土壟墓 (SK-08) 検出状況 (東より)



大佐遺跡丘陵西側 石蓋土壟墓 (SK-08) 完掘状況 (東より)



大佐遺跡 石蓋土壙墓 (SK-08) 石蓋



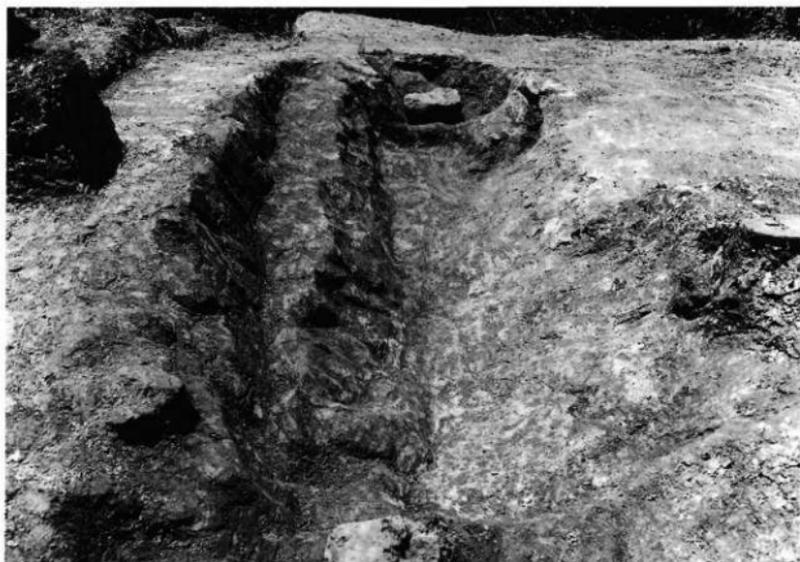
大佐遺跡 石蓋土壙墓 (SK-08) 土壙内出土の石 (ノミ痕あり)



大佐遺跡丘陵東側 石棺蓋 (SK-09) 検出状況 (西より)



大佐遺跡丘陵東側 石棺墓 (SK-09) 蓋石除去後 (北より)



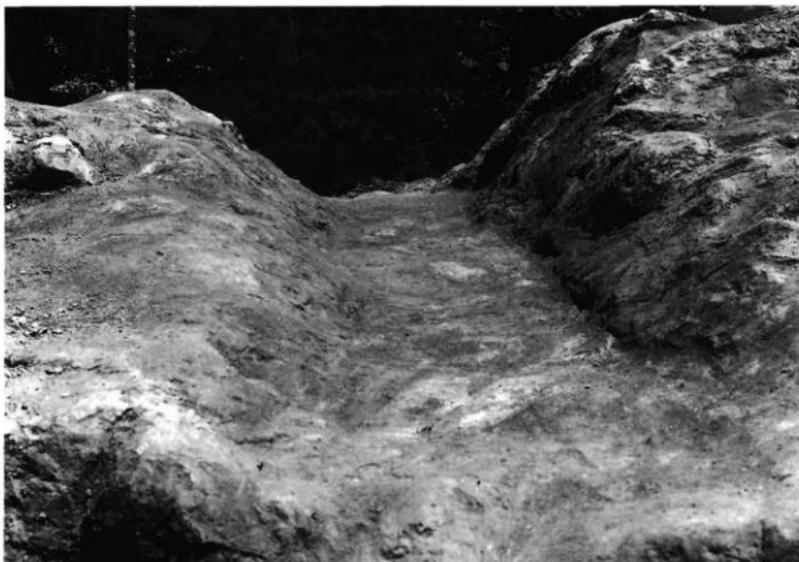
大佐遺跡丘陵西側 SK-05完掘状況（北より）



大佐遺跡丘陵西側 SK-06・07完掘状況（右：SK-06、左：SK-07）（北より）



大佐遺跡丘陵西側 SD-01発掘状況（南西より）



大佐遺跡丘陵西側 SD-01発掘状況（南より）



大佐遺跡丘陵東側 SD-02完掘状況（北東より）



大佐遺跡丘陵東側 SD-02完掘状況（南より）



大佐遺跡出土 土器棺Ⅰ（頸部～肩部）



大佐遺跡出土 土器棺Ⅱ（右：1号土器、左：2号土器）



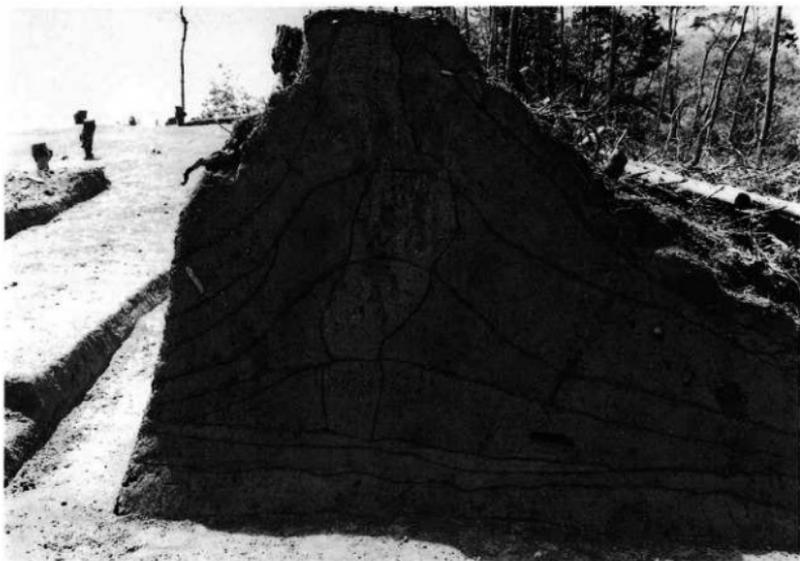
藤ヶ谷遺跡 B地点 調査前（北側、奥の山は天狗山）



藤ヶ谷遺跡 B地点 SX-01完掘状況（東より）



藤ヶ谷遺跡 C地点 調査前（南東より）



藤ヶ谷遺跡 C地点 土横土層堆積状況（北より）



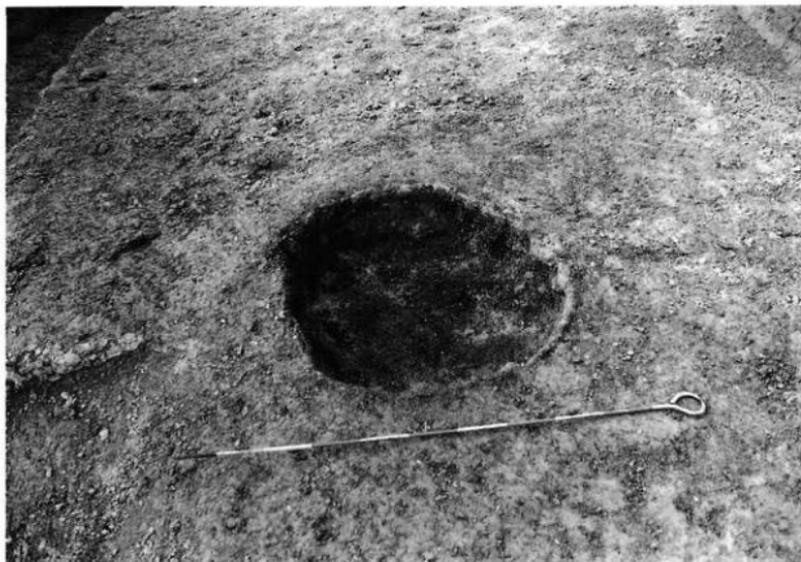
藤ヶ谷遺跡 C地点 SK-01土層堆積状況



藤ヶ谷遺跡 C地点 SK-01完掘状況



藤ヶ谷遺跡 C地点 SK-02土層堆積状況



藤ヶ谷遺跡 C地点 SK-02完形状況